

仙台市文化財調査報告書第421集

長町駅東遺跡第5・6・7・9次調査

—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ—

[第2分冊]

2014年3月

仙台市教育委員会

独立行政法人 都市再生機構

第2分冊 目次

第5章	検出遺構と出土遺物	1
第3節	弥生時代の遺構と遺物	1
(1)	弥生土器	3
(2)	石器	15
第4節	縄文時代の遺構と遺物	78
(1)	縄文土器	81
第6章	自然科学分析	82
第7章	総括	86
第1節	古墳時代～古代の出土土器について	86
第2節	古墳時代～古代の集落について	106
(1)	竪穴住居跡	106
(2)	特殊建物跡	117
(3)	掘立柱建物跡	119
(4)	材木列跡	120
(5)	集落の変遷	120
第3節	まとめ	129
(1)	縄文～弥生時代	129
(2)	古墳時代～古代	130
(3)	中世～近世	130

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

第2分冊 挿図目次

第217図	弥生時代包合層調査範囲	1	第250図	第9次調査(層位不明)出土石器(4)	39・40
第218図	第9次調査区IV層遺物出土状況図	2	第251図	第9次調査(層位不明)出土石器(5)	41
第219図	第5次調査出土弥生土器	4	第252図	第9次調査(層位不明)出土石器(6)	43
第220図	第6次調査出土弥生土器(1)	5	第253図	第9次調査(層位不明)出土石器(7)	44
第221図	第6次調査出土弥生土器(2)	6	第254図	第9次調査(層位不明)出土石器(8)	45
第222図	第6次調査出土弥生土器(3)	7	第255図	第9次調査(層位不明)出土石器(9)	46
第223図	第9次調査区IV層弥生土器出土状況図	8	第256図	第9次調査(層位不明)出土石器(10)	47
第224図	第9次調査(IV層)出土弥生土器(1)	9	第257図	接合資料1~4	49
第225図	第9次調査(IV層)出土弥生土器(2)	10	第258図	接合資料5~7・9	50
第226図	第9次調査(層位不明)出土 弥生土器(1)	11	第259図	接合資料(IV層)出土状況図	51・52
第227図	第9次調査(層位不明)出土 弥生土器(2)	12	第260図	接合資料8・10・11	54
第228図	第9次調査(層位不明)出土 弥生土器(3)	13	第261図	接合資料12~14	55
第229図	第9次調査(層位不明)出土 弥生土器(4)	14	第262図	接合資料15~18・20・1	56
第230図	第5次調査(IV層)出土石器	15	第263図	接合資料19~21	57・58
第231図	第5次調査(層位不明)出土石器(1)	16	第264図	接合資料22・24	60
第232図	第5次調査(層位不明)出土石器(2)	17	第265図	接合資料23・25	61
第233図	第5次調査(層位不明)出土石器(3)	18	第266図	接合資料26・27	63
第234図	第6次調査(層位不明)出土石器(1)	20	第267図	接合資料28~31	64
第235図	第6次調査(層位不明)出土石器(2)	21	第268図	接合資料32~34	65
第236図	第6次調査(層位不明)出土石器(3)	22	第269図	接合資料35~38	67
第237図	第9次調査(IV層)出土石器(1)	24	第270図	接合資料39~44	68
第238図	第9次調査区IV層石器出土状況図	25・26	第271図	接合資料45~47・49~51	70
第239図	第9次調査(IV層)出土石器(2)	27	第272図	接合資料48・52	71
第240図	第9次調査(IV層)出土石器(3)	28	第273図	接合資料53~57	73
第241図	第9次調査(IV層)出土石器(4)	29	第274図	接合資料58~61	74
第242図	第9次調査(IV層)出土石器(5)	30	第275図	接合資料62~64	76
第243図	第9次調査(IV層)出土石器(6)	31	第276図	接合資料65~70	77
第244図	第9次調査(IV層)出土石器(7)	32	第277図	第9次調査区縄文土器出土状況図 ・下層調査区基本層序	79・80
第245図	第9次調査(IV層)出土石器(8)	33	第278図	第6次(IV層)・第9次(IX・XV層)調査区出土 縄文土器	81
第246図	第9次調査(IV層)出土石器(9)	34	第279図	第5次調査土層柱状図 ・火山ガラス比ダイヤグラム	84
第247図	第9次調査(層位不明)出土石器(1)	36	第280図	竪穴住居跡重複関係模式図	91
第248図	第9次調査(層位不明)出土石器(2)	37	第281図	竪穴住居跡出土土器集成図—1期 ・2期(1)	92
第249図	第9次調査(層位不明)出土石器(3)	38			

第282図	竪穴住居跡出土土器集成図-2期(2)	93	第295図	竪穴住居跡集成図(1)-1期	112
第283図	竪穴住居跡出土土器集成図-2期(3)	94	第296図	竪穴住居跡集成図(2)-2期	113
第284図	竪穴住居跡出土土器集成図-2期(4)	95	第297図	竪穴住居跡集成図(3)-3期	114
第285図	竪穴住居跡出土土器集成図-4期(1)	96	第298図	竪穴住居跡集成図(4)-4期	115
第286図	竪穴住居跡出土土器集成図-4期(2)	97	第299図	竪穴住居跡集成図(5)-5期	116
第287図	竪穴住居跡出土土器集成図-5期(2)	98	第300図	竪穴住居跡集成図(6)-6期	117
第288図	竪穴住居跡出土土器集成図-5期(3)	99	第301図	長町駅東遺跡の特殊建物跡	118
第289図	竪穴住居跡出土土器集成図-6期(2)	100	第302図	SB37・38、SD266 および周辺の掘立柱建物跡	119
第290図	竪穴住居跡出土土器集成図-6期(3)	101	第303図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (1期:引田式期)	121
第291図	竪穴住居跡出土土器集成図-6期(4)	102	第304図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (2a期:6世紀初頭～前葉)	122
第292図	竪穴住居跡出土土器集成図	103	第305図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (2b期:住社式期)	123
第293図	竪穴住居跡出土土器集成図	104	第306図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (3期:栗圃式期古段階)	124
第294図	掘立柱建物跡・溝跡出土土器集成図	105	第307図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (4期:郡山I期官衙期)	125
			第308図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (5期:郡山II期官衙期)	126
			第309図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (6a期:8世紀前葉)	127
			第310図	第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図 (6b期:8世紀中葉～末葉)	128

第2分冊 写真図版目次

写真図版1	調査地遠景・基本層序(1)	写真図版10	小溝状遺構群C・D群	第5・9次調査
写真図版2	基本層序(2)	写真図版11	小溝状遺構群E～K群	第6・7次調査
写真図版3	中世～近世面全景(第5次調査区)	写真図版12	溝跡(中世～近世)(1)	第5・6次調査
写真図版4	中世～近世面全景(第6次調査区-1)	写真図版13	溝跡(中世～近世)(2)	第6次調査
写真図版5	中世～近世面全景(第6次調査区-2)	写真図版14	溝跡(中世～近世)(3)	第6次調査
写真図版6	中世～近世面全景(第7次調査区)	写真図版15	溝跡(中世～近世)(4)	第6次調査
写真図版7	中世～近世面全景(第9次調査区)	写真図版16	溝跡(中世～近世)(5)	第7次調査
写真図版8	掘立柱建物跡(中世～近世) 第7次調査	写真図版17	溝跡(中世～近世)(6)	第7次調査
写真図版9	小溝状遺構群A・B群	第5・6・9次調査	写真図版18	溝跡(中世～近世)(7)・井戸跡 第5・6・7・9次調査

写真図版19	土坑(中世～近世)(1)	第5次調査	写真図版55	竪穴住居跡(20)	第9次調査
写真図版20	土坑(中世～近世)(2)	第6次調査	写真図版56	竪穴住居跡(21)	第9次調査
写真図版21	土坑(中世～近世)(3)	第6・7次調査	写真図版57	竪穴住居跡(22)	第9次調査
写真図版22	土坑(中世～近世)(4)	第7次調査	写真図版58	竪穴住居跡(23)	第9次調査
写真図版23	土坑(中世～近世)(5)	第7次調査	写真図版59	竪穴住居跡(24)	第9次調査
写真図版24	土坑(中世～近世)(6)	第7・9次調査	写真図版60	竪穴住居跡(25)	第9次調査
写真図版25	土坑(中世～近世)(7)	第9次調査	写真図版61	竪穴住居跡(26)	第9次調査
写真図版26	土坑(中世～近世)(8)	第9次調査	写真図版62	竪穴住居跡(27)	第9次調査
写真図版27	土坑(中世～近世)(9)	第9次調査	写真図版63	竪穴住居跡(28)	第9次調査
写真図版28	ピット(中世～近世)(1)	第5・6・次調査	写真図版64	竪穴住居跡(29)	第9次調査
写真図版29	ピット(中世～近世)(2)	第6次調査	写真図版65	竪穴住居跡(30)	第9次調査
写真図版30	ピット(中世～近世)(3)	第7次調査	写真図版66	竪穴住居跡(31)	第9次調査
写真図版31	ピット(中世～近世)(4)	第9次調査	写真図版67	竪穴住居跡(32)	第9次調査
写真図版32	性格不明遺構(中世～近世)(1)	第7・9次調査	写真図版68	竪穴住居跡(33)	第9次調査
写真図版33	性格不明遺構(中世～近世)(2)	第6・9次調査	写真図版69	竪穴住居跡(34)	第9次調査
写真図版34	古墳時代～古代面全景(第5・6次調査)		写真図版70	竪穴住居跡(35)	第9次調査
写真図版35	古墳時代～古代面全景(第9次調査)		写真図版71	竪穴住居跡(36)	第9次調査
写真図版36	竪穴住居跡(1)	第6・9次調査	写真図版72	竪穴住居跡(37)	第9次調査
写真図版37	竪穴住居跡(2)	第5次調査	写真図版73	竪穴住居跡(38)	第9次調査
写真図版38	竪穴住居跡(3)	第5次調査	写真図版74	竪穴住居跡(39)	第9次調査
写真図版39	竪穴住居跡(4)	第5次調査	写真図版75	掘立柱建物跡(古墳時代～古代)(1)	第9次調査
写真図版40	竪穴住居跡(5)	第5次調査	写真図版76	掘立柱建物跡(古墳時代～古代)(2)	第9次調査
写真図版41	竪穴住居跡(6)	第6次調査	写真図版77	掘立柱建物跡(古墳時代～古代)(3)	第9次調査
写真図版42	竪穴住居跡(7)	第6次調査	写真図版78	材木列跡	第9次調査
写真図版43	竪穴住居跡(8)	第6次調査	写真図版79	溝跡(古墳時代～古代)(1)	第6・9次調査
写真図版44	竪穴住居跡(9)	第6次調査	写真図版80	溝跡(古墳時代～古代)(2)	第6次調査
写真図版45	竪穴住居跡(10)	第6次調査	写真図版81	溝跡(古墳時代～古代)(3)	第6次調査
写真図版46	竪穴住居跡(11)	第6次調査	写真図版82	溝跡(古墳時代～古代)(4)	第6・9次調査
写真図版47	竪穴住居跡(12)	第6次調査	写真図版83	土坑(古墳時代～古代)(1)	第6・9次調査
写真図版48	竪穴住居跡(13)	第6次調査	写真図版84	土坑(古墳時代～古代)(2)	第9次調査
写真図版49	竪穴住居跡(14)	第6次調査	写真図版85	土坑(古墳時代～古代)(3)	第9次調査
写真図版50	竪穴住居跡(15)	第6次調査	写真図版86	ピット(古墳時代～古代)(1)	第6・9次調査
写真図版51	竪穴住居跡(16)	第9次調査			
写真図版52	竪穴住居跡(17)	第9次調査			
写真図版53	竪穴住居跡(18)	第9次調査			
写真図版54	竪穴住居跡(19)	第9次調査			

写真図版87	ピット(2)・性格不明遺構 (古墳時代～古代) 第9次調査	写真図版120	溝跡出土遺物(1)
写真図版88	第9次調査Ⅲ層遺物出土状況 (弥生時代)(1)	写真図版121	溝跡出土遺物(2)
写真図版89	第9次調査Ⅳ層遺物出土状況 (弥生時代)(2)	写真図版122	溝跡出土遺物(3)・ピット・性格不明遺構 ・河川跡・低位面トレンチ出土遺物
写真図版90	第9次調査Ⅴ層遺物出土状況 (縄文時代)	写真図版123	遺構外出土遺物(1)
写真図版91	小溝状遺構群・溝跡・井戸跡・土坑 ・ピット出土遺物	写真図版124	遺構外出土遺物(2)
写真図版92	性格不明遺構・竪穴住居跡出土遺物(1)	写真図版125	弥生土器(1)
写真図版93	竪穴住居跡出土遺物(2)	写真図版126	弥生土器(2)
写真図版94	竪穴住居跡出土遺物(3)	写真図版127	弥生土器(3)
写真図版95	竪穴住居跡出土遺物(4)	写真図版128	弥生土器(4)
写真図版96	竪穴住居跡出土遺物(5)	写真図版129	石器(1)
写真図版97	竪穴住居跡出土遺物(6)	写真図版130	石器(2)
写真図版98	竪穴住居跡出土遺物(7)	写真図版131	石器(3)
写真図版99	竪穴住居跡出土遺物(8)	写真図版132	石器(4)
写真図版100	竪穴住居跡出土遺物(9)	写真図版133	石器(5)
写真図版101	竪穴住居跡出土遺物(10)	写真図版134	石器(6)
写真図版102	竪穴住居跡出土遺物(11)	写真図版135	石器(7)
写真図版103	竪穴住居跡出土遺物(12)	写真図版136	石器(8)
写真図版104	竪穴住居跡出土遺物(13)	写真図版137	石器(9)
写真図版105	竪穴住居跡出土遺物(14)	写真図版138	石器(10)
写真図版106	竪穴住居跡出土遺物(15)	写真図版139	石器(11)
写真図版107	竪穴住居跡出土遺物(16)	写真図版140	石器(12)
写真図版108	竪穴住居跡出土遺物(17)	写真図版141	石器(13)
写真図版109	竪穴住居跡出土遺物(18)	写真図版142	石器(14)
写真図版110	竪穴住居跡出土遺物(19)	写真図版143	石器(15)
写真図版111	竪穴住居跡出土遺物(20)	写真図版144	石器(16)
写真図版112	竪穴住居跡出土遺物(21)	写真図版145	石器(17)・接合資料(1)
写真図版113	竪穴住居跡出土遺物(22)	写真図版146	接合資料(2)
写真図版114	竪穴住居跡出土遺物(23)	写真図版147	接合資料(3)
写真図版115	竪穴住居跡出土遺物(24)	写真図版148	接合資料(4)
写真図版116	竪穴住居跡出土遺物(25)	写真図版149	接合資料(5)
写真図版117	竪穴住居跡出土遺物(26)	写真図版150	接合資料(6)
写真図版118	竪穴住居跡出土遺物(27)	写真図版151	接合資料(7)
写真図版119	竪穴住居跡出土遺物(28) ・掘立柱建物跡出土遺物	写真図版152	接合資料(8)
		写真図版153	接合資料(9)
		写真図版154	接合資料(10)
		写真図版155	接合資料(11)
		写真図版156	接合資料(12)・縄文土器

第5章 検出遺構と出土遺物

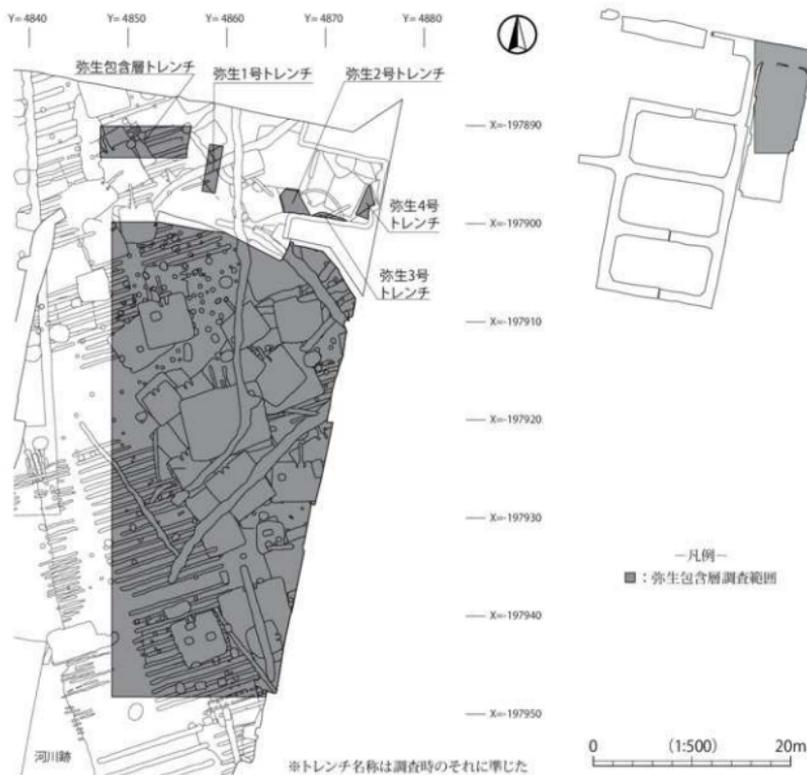
第3節 弥生時代の遺構と遺物

第5・6・9次調査において、古墳時代～古代の遺構調査終了後に弥生時代以前の遺構・遺物を確認するため基本層IV層以下の調査を行った。これらの調査区では、基本層IV層上面における遺構検出時に弥生土器や石器の出土が頻繁にみられ、基本層IV層が弥生時代の包含層であることは明白であった。このため、第5・6次調査ではトレンチ調査を、第9次調査では基本層IV層全体の調査を実施した。

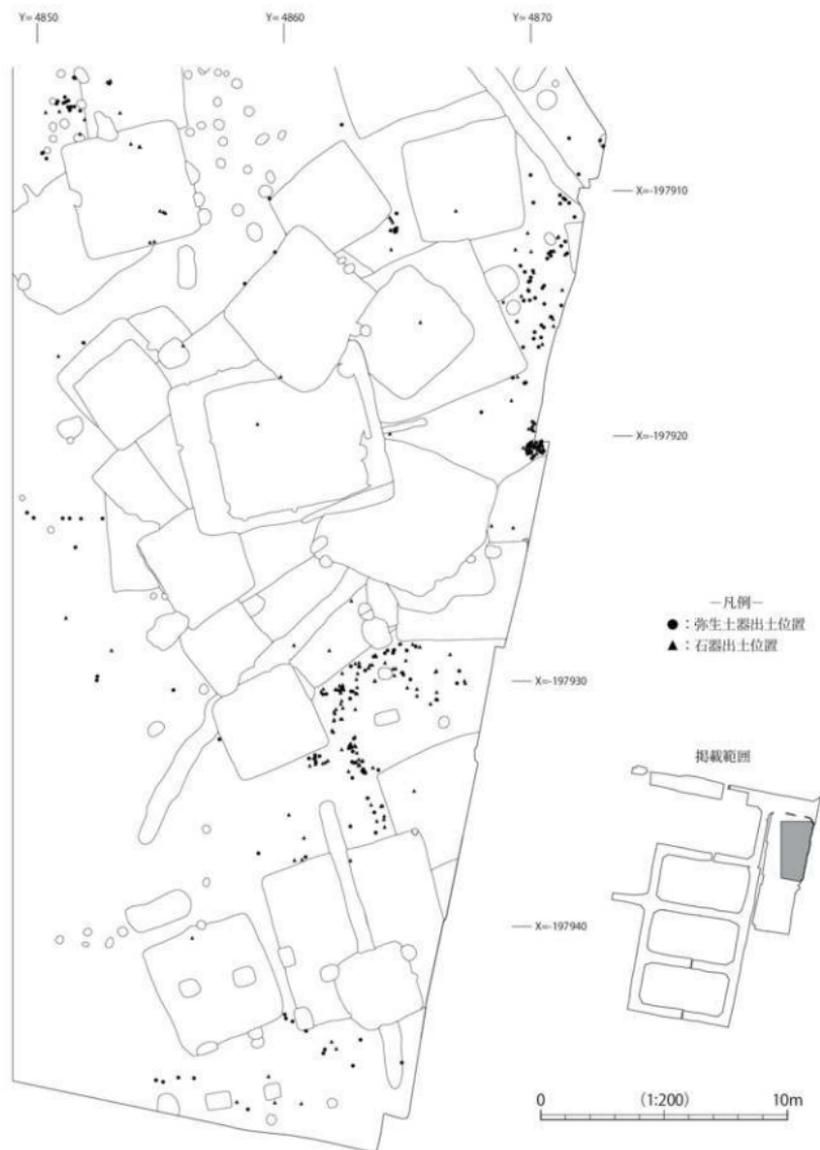
第5次調査の概要

調査区（北区）の東側に、東西9m×南北3m程のトレンチを1箇所設定した。層位は基本層IV層上面から深さ60cm前後までを掘削し、基本層Vb層の中位まで検出した。

遺構は検出されず、基本層IVa層中より弥生土器が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。



第217図 弥生時代包含層調査範囲



第 218 図 第 9 次調査区IV層遺物出土状況図

第6次調査の概要

調査区（北区）の西側と、南側から東側にかけて4箇所のトレンチを設定した（弥生1～4号トレンチ）。

弥生1号トレンチは調査区の西側に設定し、東西1.5m×南北4.8mの範囲を掘削した。基本層IV層上面から約60cmの深さまで掘り下げ、基本層Vb層の下部を検出した。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生2号トレンチは調査区の中央南側に設定し、SI283とSI284、SI289の間の基本層IV層残存部分を対象とした。東西2.1m×南北2.8mの不整五角形状の範囲を、基本層Va層上面まで掘り下げた。掘削深度は30cm前後である。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生3号トレンチは、2号トレンチの東隣に設定した。東西3.6m×南北0.5mの不整三角形形状の範囲を、基本層Va層上面まで掘り下げた。掘削深度は2号トレンチと同じく、30cm前後である。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生4号トレンチは、調査区の東側に設定した。SI4とSI287の中間、基本層IV層残存部分が対象である。範囲は東西1.9m×南北3.5mの不整三角形形状を呈する。やはり基本層Va層上面まで掘り下げ、25cm前後で同層を検出した。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

第9次調査の概要

個別のトレンチは設定せず、遺構と遺構の間に残存する基本層IV層部分を、全体にわたって調査した。西側および南側は河川跡に向かう傾斜地となっているため、調査の対象から外した。遺構は検出されなかったが、特に基本層IVa層部分を中心に弥生土器、石器などが多量出土した。

このように、いずれの調査でも当該期の遺構は全く検出されておらず、遺物が出土したのみであった。しかしその点数は相当数あり、コンテナで10箱以上におよぶ。

以下、当該期の出土遺物について報告する。なお、事実記載は各年次順に行うこととした。

(1) 弥生土器（第219～229図）

第5次調査（第219図）

掲載した弥生土器は、全て古墳時代以降の遺構堆積土、もしくは遺構検出時に出土したものである。図化した土器は深鉢1点、鉢3点、甕3点、蓋2点である。

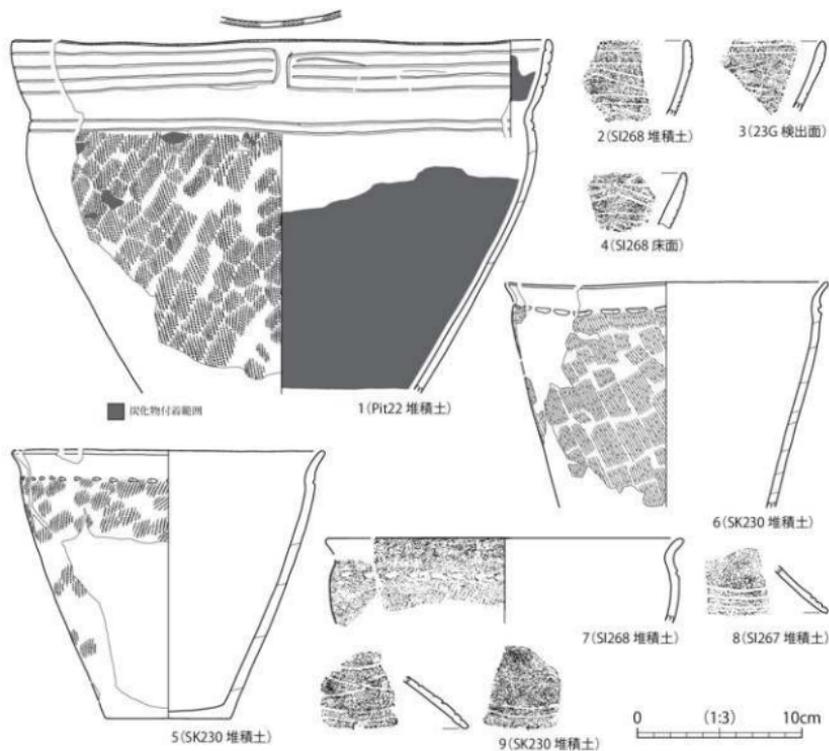
第219図-1は深鉢である。底部から体部にかけて大きく開き、口縁部と体部の境に括れを持ち、口縁部が内湾気味に外傾する器形である。口縁部には区画内に2条の横位直線文が施される四角文、体部上端には2条の横位直線文が施文されている。また、口縁部内面には1条の横位直線文が施文されている。口唇部および体部には地文として単節LR縄文が施文されている。内外面に炭化物が付着している。

2～4は鉢である。これら鉢の器形には、体部から口縁部にかけて内湾する2・3、直線的に外傾する4がある。横位直線文と連弧文・連続山形文の組み合わせが施文され、文様内には縄文が充填される2・3と無文の4がある。2・3の地文は単節LR縄文である。

5～7は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形で、口縁部に最大径を持ち括れが緩やかな5・6、口縁部と体部上半に最大径を持ち括れが鈍角な7がある。いずれも口縁部には明瞭なヨコナデが施され、体部上端に列点刺突文が施されている。これら甕の地文は、5・7が単節LR縄文、6が植物茎回転文である。

第219図-8・9は蓋である。第219図-8は体部が外反気味に開き、第219図-9は体部が内湾気味に開く

器形である。3条の横位直線文や横位直線文と連弧文様の組み合わせが施文され、地文はともに単筋LR網文である。これらの弥生土器は、中期中葉の樹形圃式に比定されるものと考えられる。

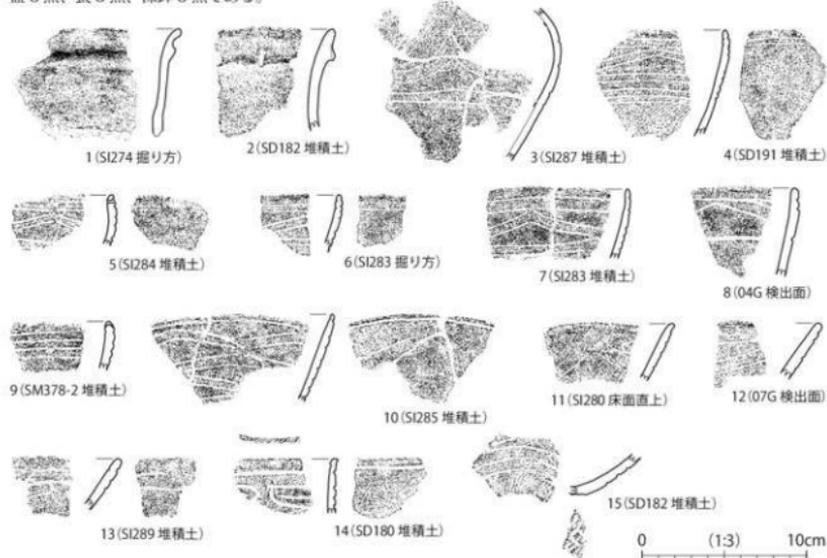


図号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 撮影
1	B-056	第5次	Pi22	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁:LR網文横位直線文 体部:LR網文横位直線文+四角文	口縁:沈線→ミガキ (横位直線文)	口縁:(32.6)cm 内外面灰化物付着	125	
2	B-016	第5次	SI268	堆積土	弥生土器	鉢	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	口縁:19.0)cm 底径:(7.0)cm 器高:16.5cm	125	
3	B-057	第5次	23G	検出面	弥生土器	鉢	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	内外面摩滅	125	
4	B-027	第5次	SI268	床面直上	弥生土器	鉢	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	内外面中平摩滅	125	
5	B-044	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	甑	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	口縁:(19.0)cm 底径:(7.0)cm 器高:16.5cm	125	
6	B-046	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	甑	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	口縁:(19.0)cm	125	
7	B-018	第5次	SI268	堆積土	弥生土器	甑	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	口縁:(21.6)cm	125	
8	B-013	第5次	SI267	堆積土	弥生土器	甑	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	内外面摩滅	125	
9	B-038	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	甑	口縁:体部 口縁:体部	口縁:体部 口縁:体部	口縁:内外面灰化物付着	125	

第 219 図 第 5 次調査出土弥生土器

第6次調査 (第220～222図)

第6次調査でも、包含層中からは図化できるような遺物が出土しなかった。ここに掲載したのは、第5次調査と同じく遺構堆積土もしくは遺構検出時に出土したものである。掲載した遺物は、壺3点、鉢12点、高環1点、蓋8点、甃8点、深鉢3点である。

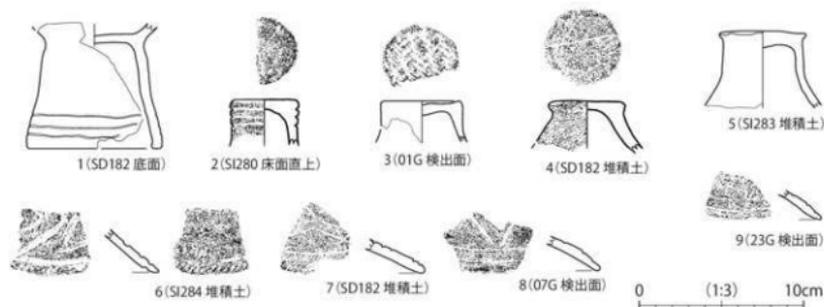


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調査 (文様)	内面調査 (文様)	備考	写真 掲載
1	B-005	第6次	SI274	掘り方	弥生土器	壺	口縁～胴部	口縁:横位帯帯刷付→ミ方弁	ナゾ?	内面摩滅	125
2	B-072	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	壺	口縁～胴部	口縁:横位帯帯刷付→刺突→ミ方弁	ミ方弁		125
3	B-054	第6次	SI287	堆積土	弥生土器	壺	体部	体上半:沈陥→L形文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+蓋弧文)	ナゾ		125
4	B-080	第6次	SD191	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体上半:L形文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+山形文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)		125
5	B-050	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈陥→ミ方弁(横位直線文+山形文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)	口縁部焼成や穿孔孔径:3.0～4.0mm	125
6	B-043	第6次	SI283	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈陥→L形文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+山形文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)		125
7	B-027	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈陥→L形文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+蓋弧文)	ミ方弁		125
8	B-031	第6次	04G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体部:沈陥→植物葉形刷付文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+山形文)		内面やや摩滅	125
9	B-062	第6次	SM378-2	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁:波状口縁→沈陥(横位直線文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)	外面やや摩滅	125
10	B-052	第6次	SI285	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体部:沈陥→L形文?→沈陥 (横位直線文+蓋弧文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)	内外面摩滅	125
11	B-023	第6次	SI280	床面直上	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:L形刷文→沈陥(横位直線文+蓋弧文) 力	横位ミ方弁		125
12	B-099	第6次	07G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体下半	口縁～体上半:沈陥→L形文?→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+蓋弧文)	ナゾ		125
13	B-056	第6次	SI289	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:植物葉形刷付文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+工字文?)	口縁:沈陥→ナゾ (横位直線文)		126
14	B-065	第6次	SD180	堆積土	弥生土器	鉢?	口縁～体上半	口縁～体上半:沈陥→L形文→沈陥→ミ方弁 (横位直線文+四角文)	口縁:沈陥→ミ方弁 (横位直線文)		126
15	B-075	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	鉢	体下半 →底面	体下半:沈陥→ミ方弁 体下半:L形刷文横位刷付 底面:刷付文	ミ方弁		126

第220図 第6次調査出土弥生土器 (1)

第 220 図-1～3 は壺である。1 は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反し、2 は頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる器形である。ともに頸部上端に横位の隆帯が貼り付けられ、2 の隆帯頂部には刺突が施されている。3 は体部の破片で、体部上半に最大径を持つ器形である。横位直線文と鐳形文の組み合わせが施文され、文様内には単節 LR 縄文が充填されている。

4～15 は鉢である。これら鉢の器形は多様で、体部から口縁部にかけて内湾する 4～9、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する 10～13、体部から口縁部にかけて直立する 14 がある。横位直線文と連弧文・連続山形文の組み合わせが施文されるほか、変形工字文が施文される 13 や区画内に 1 条の横位直線文が施される四角文が施文される 14 がある。これら鉢の地文は、4・6・7・10・11・14・15 が単節 LR 縄文、12 が無節 L 縄文、8 が植物茎回転文である。15 は施文部位が体部下半にまで及んでおり、底面には網代痕が観察される。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	單位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-070	第6次	SD182	底面	弥生土器	高杯	杯底部 -杯部	杯底部-単節:ミガキ 即下階:沈陥(横位直線文)	ナデ	器の可能性有	126
2	B-022	第6次	SI280	床面直上	弥生土器	蓋	天井:木葉痕 体上半	天井:網代痕 体上半:沈陥→ミガキ(横位直線文)	天井:ナデ 体上半:ミガキ		126
3	B-108	第6次	01G	横出面	弥生土器	蓋	天井:木葉痕 体上半	天井:網代痕 体上半:ナデ	ナデ		126
4	B-076	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	蓋	天井:木葉痕 体上半	天井:木葉痕 体上半:沈陥→ミガキ(横位直線文)	ミガキ		126
5	B-040	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	蓋	天井:ナデ 体上半	天井:ナデ 体上半:ミガキ	ミガキ		126
6	B-048	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	蓋	口縁:木葉痕 体下半	口縁:木葉痕 体下半:沈陥→ミガキ(横位直線文+幾何学文)	口縁:木葉痕 体下半:沈陥→ミガキ(横位直線文)	口縁部内面因化物付着	126
7	B-071	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	蓋	口縁:木葉痕 体下半	口縁:木葉痕 体下半:沈陥→ミガキ(横位直線文+幾何学文)	ミガキ	口縁部内面因化物付着	126
8	B-093	第6次	07G	横出面	弥生土器	蓋	口縁:木葉痕 体下半	口縁:沈陥→単節文→沈陥→ミガキ(横位直線文+幾何学文)	ミガキ		126
9	B-096	第6次	23G	横出面	弥生土器	蓋	口縁:木葉痕 体上半	口縁:木葉痕 体上半:沈陥→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ		126

第 221 図 第 6 次調査出土弥生土器 (2)

第 221 図-1 は蓋の可能性もあるが、ここでは高杯として扱った。脚部は台形状を呈し、脚部下半に 3 条の横位直線文が施文され、ミガキ調整が施されている。

2～9 は蓋である。これら蓋の器形は多様で、天井部側縁の形態では、張り出しを持たない 2、上方に向かって盛り上がる 3、外側に向かって張り出す 4・5 があり、体部から口縁部にかけての形態では、外反気味に開く 6、直線的に開く 7、内湾気味に開く 8・9 がある。横位直線文や横位直線文と幾何学文・連続山形文などの組み合わせが施文されるほか、無文の 3・5 や地文のみの 4 がある。これら蓋の地文は、4・6・7・9 が単節 LR 縄文、8 が単節 RL 縄文である。2・3 の天井部には網代痕、4 の天井部には木葉痕が観察される。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-090	第6次	05G	横出面	弥生土器	甕	口縁～ 体部	口縁:ヨコナデ 体部:LR横文横位・斜位回転	横位ミガキ	口径:(19.8)cm	126
2	B-044	第6次	SI283	握り方	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:LR横文横位・斜位・斜位回転 体上半:LR横文横位・斜位・斜位	ミガキ		126
3	B-073	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:植物葉回転文 口縁:ヨコナデ 体上部:列点刺突(左→右) 体上半:植物葉回転文	横位ミガキ		126
4	B-026	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナデ 体上部:列点刺突(左→右) 体上半:LR横文横位回転	ミガキ		126
5	B-042	第6次	SI283 P11	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナデ 体上部:LR横文横位・斜位 体上半:LR横文横位回転	横位ミガキ		126
6	B-102	第6次	05G	横出面	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナデ 体上部:沈陥(横位直線文) 体上半:LR横文横位回転	横位ミガキ		126
7	B-019	第6次	SI279	床面直上	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナデ 体上部:列点刺突(左→右) 体上半:植物葉回転文	横位ミガキ		126
8	B-031	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナデ 体上部:植物葉回転文 体上半:列点刺突(右→左)	ミガキ		126
9	B-095	第6次	05G	横出面	弥生土器	深鉢	口縁～ 体上半	口縁:体上半・沈陥→ミガキ(横位直線文+ 四角文)	横位ミガキ	外面や摩滅	126
10	B-014	第6次	SI279	床面直上	弥生土器	深鉢	口縁	口縁:沈陥(横位直線文)	ミガキ	内外面炭化物付着	126
11	B-053	第6次	SI287	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁	口縁:沈陥→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ	外面摩滅 内面炭化物付着	126

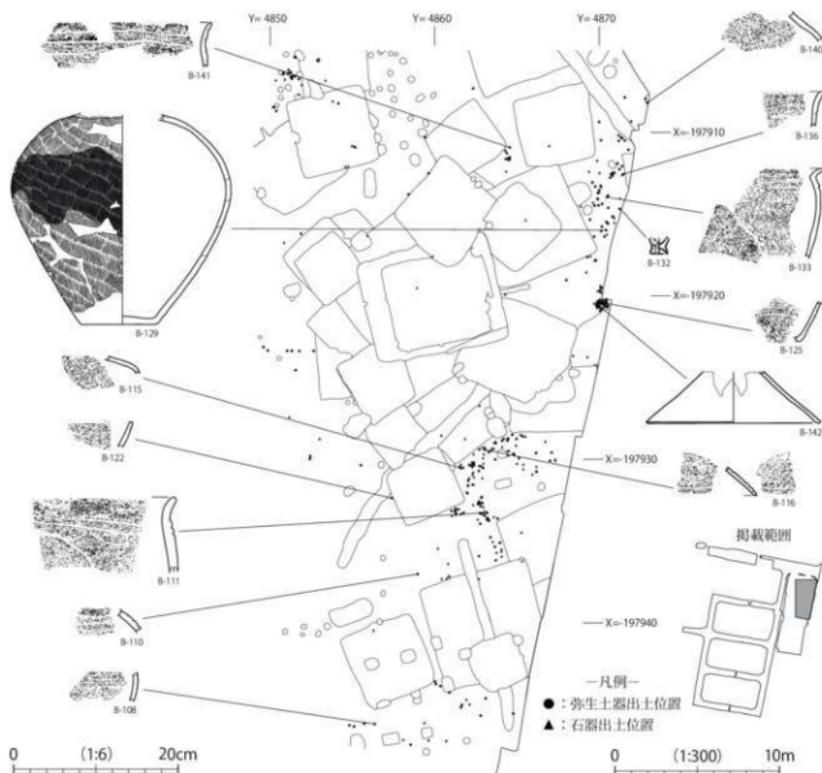
第 222 図 第 6 次調査出土弥生土器 (3)

第 222 図 1～8 は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形である。1・2・4～8 は口縁部に最大径を持ち、3 は体部上半に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上部に列点刺突が施文されるほか、2 条の横位直線文が施文される 6 や無文の 2 がある。これら甕の地文は、1・2・4～6 が単節 LR 縄文、3・7・8 が植物葉回転文である。

9～11 は深鉢である。口縁部と体部の境が括れ、口縁部が内湾する器形である。9 は口縁部に横位直線文と縦位直線文・四角文の組み合わせが施文され、10・11 は数条の横位直線文が施文されている。10・11 の内外面には炭化物が付着している。

第 9 次調査 (第 223～229 図)

第 9 次調査では、遺物包含層である基本層Ⅳ層から多量の弥生土器が出土している。また、遺構堆積土への混入も頻度が高く、他の調査区とは異なる様相を呈している。このため、本次調査出土の弥生土器については、包含層出土のものとしてそれ以外に分割して報告する。



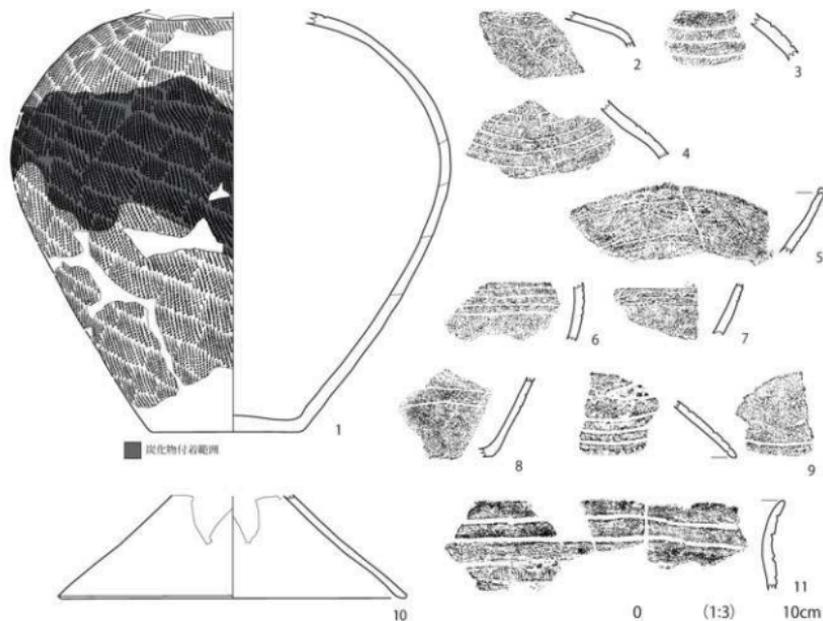
第223図 第9次調査区IV層弥生土器出土状況図

①IV層出土弥生土器 (第224・225図)

壺4点、鉢4点、蓋2点、深鉢1点、甕3点、小型土器2点を掲載した。

第224図一～4は壺である。1は体部上半に最大径を持つ器形で、器高30cm前後の中型品と推定される。頸部と体部の境に横位直線文が施文され、体部には単節RL縄文を斜位回転施文し、縦走縄文を施している。最大径付近の外面には炭化物が付着している。2～4は体部上半の破片である。横位直線文と罟形文、四角文の組み合わせが施文され、文様内には縄文が充填されている。これら壺の地文は、1が単節RL縄文、2・3が単節LR縄文、4が植物茎回転文である。

5～8は鉢である。5は体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾する器形で、平口縁に2個1対の突起を持つ。口縁部の残存状況から4単位の突起と推定される。口縁部から体部上半にかけて横位直線文と連弧文の組み合わせが施文され、口縁部内面に1条の横位直線文が施されている。6・7は体部の破片で、3～4条の横位直線文が施文されている。8は底部から直線的に外傾する器形で、横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されている。文様内には縄文が充填される8と無文の6～7がある。8の地文は単節LR縄文である。

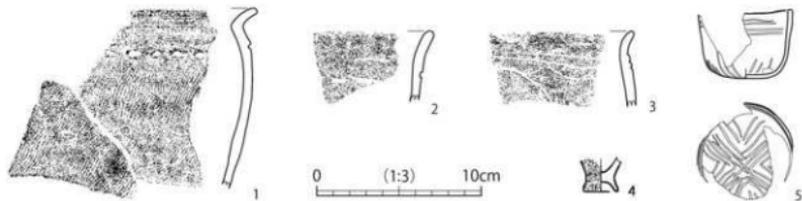


図録番号	作群番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図説
1	B-129	第9次	15G	IV層	弥生土器	蓋	体上部・底面	体上部:沈線(横位直線文) 体部:乱縄文斜位直線(底面:刷文)	ミガキ	底径:19.2cm 炭化物付着	126
2	B-115	第9次	33G	IV層	弥生土器	蓋	体上半	体上半:乱縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+刷文)	ナデ		126
3	B-110	第9次	36G	IV層	弥生土器	蓋	体部	体部:乱縄文→沈線→ミガキ(横位直線文)	ナデ		126
4	B-140	第9次	10G	IV層	弥生土器	蓋	体上半	体上半:沈線→刷文斜位直線文→沈線→ミガキ(横位直線文+四角文)	横位ミガキ		126
5	B-128	第9次	19G	IV層	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁:2箇1対の突起 沈線→ミガキ(横位直線文) 体部:沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)	口縁:沈線(横位直線文) ミガキ		126
6	B-108	第9次	44G	IV層	弥生土器	鉢	体部	体部:沈線(横位直線文)	横位ミガキ		126
7	B-122	第9次	32G	IV層	弥生土器	鉢	体部	体部:沈線→ミガキ(横位直線文)	ミガキ		126
8	B-125	第9次	25G	IV層	弥生土器	鉢	体下半～底面	体下半:乱縄文→沈線→ミガキ(横位直線文+連弧文)	ミガキ		126
9	B-116	第9次	29G	IV層	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁:沈線→ミガキ(横位直線文) 体部:沈線→ミガキ(変形上字文)	口縁:沈線(横位直線文) 横位ミガキ		126
10	B-142	第9次	20・24G	IV層	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁～体部:ミガキ	口縁～体部:ミガキ	口径:(20.8)cm	126
11	B-141	第9次	14G	IV層	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:沈線(横位直線文) 体上半:沈線+乱縄文→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ	外部や中層に炭化物付着	126

第 224 図 第 9 次調査 (IV層) 出土弥生土器 (1)

9・10は蓋である。ともに体部から口縁部にかけて直線的に開く器形である。9は横位直線文と斜位直線文が施文され、残存部から変形工字文と推定される。口縁部内面に1条の横位直線文が施されている。10は無文でミガキ調整されている。

11は深鉢である。口縁部と体部の境が僅かに括れ、口縁部が反外する器形である。口縁部から体部上半にかけて幅3mm前後の沈線による横位直線文が施文されている。体部の文様内には単節LR縄文が施されているが、摩滅のため充填縄文か磨消縄文かは不明である。



第225図 第9次調査(IV層)出土弥生土器(2)

調査番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 掲載
1	B-133	第9次	15G	IV層	弥生土器	甕	口縁～ 体部	口縁:LR縄文横線付帯・口縁:ヨコナデ 体上部:列点刺突(右→左) 体部:LR縄文横線付帯	ミガキ	外面灰化物付着	127
2	B-136	第9次	15G	IV層	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ミガキ 体上部:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横線付帯	ミガキ		127
3	B-111	第9次	33G	IV層	弥生土器	甕?	口縁～ 体上半	口縁:ミガキ 体上半:沈線+ミガキ(横位直線文+連弧文)	ミガキ		127
4	B-132	第9次	15G	IV層	弥生土器	小型 土器	体下半 ～底部	つまみ:沈線(横位直線文) つまみ～口縁:ナデ	ナデ		127
5	B-126	第9次	20G	IV層	弥生土器	小型 土器	口縁～ 底部	口縁:沈線+ミガキ(横位直線文) 底部:沈線	ナデ		127

第225図-1～3は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形である。1・2は口縁部に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上端に列点刺突文が施文されている。これら甕の地文は、単節LR縄文である。3は体部上半に最大径を持つ。体部上半に横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されている。大型の鉢の可能性も考えられる。

4・5は小型土器である。4は高環形または蓋形と思われる小型土器で、脚部上端に1条の横位直線文が施文されている。5は鉢形の小型土器であるが、蓋の可能性もある。体部上端に2条の横位直線文、底部には多条沈線による「+」字状文が施文されている。

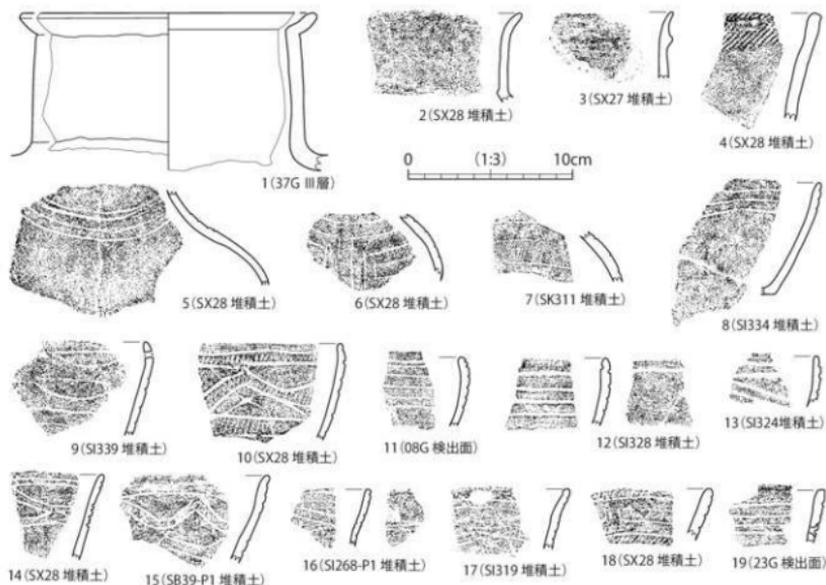
これらの弥生土器は、中期中葉の樹形圃式に比定されるものと考えられる。

②層位不明弥生土器(第226～229図)

壺7点、鉢16点、蓋12点、甕13点、深鉢5点、高環1点、小型土器1点を掲載した。

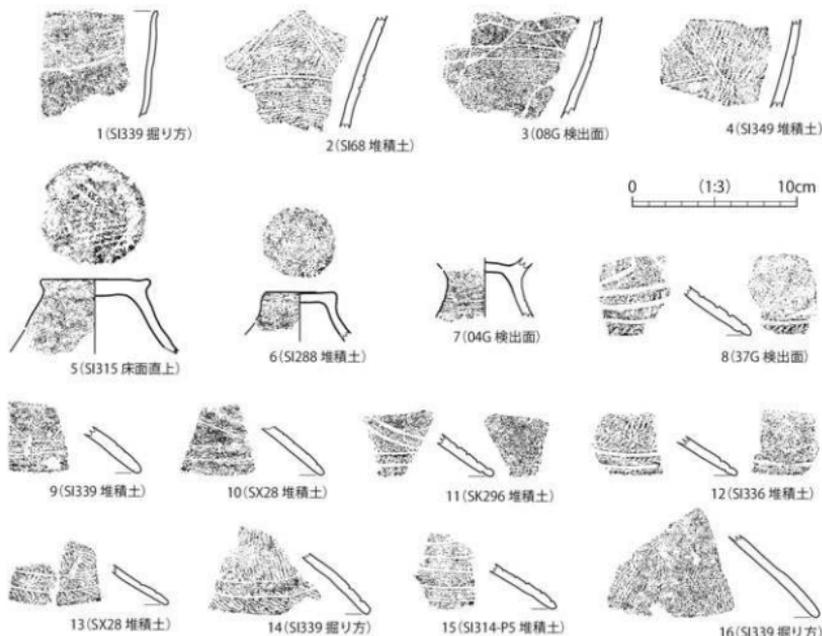
第226図-1～7は壺である。1は口径18cm前後の大型品で、頸部が内湾気味に直立し、口縁部が受口状を呈する。2・3は頸部が直立し、口縁部が外反する器形である。3の頸部上端には横位の隆帯が貼り付けられている。4は頸部が外傾し、口縁部が内湾するもので、口唇部と口縁部に単節LR縄文が施文され、頸部はミガキ調整されている。5は頸部と体部の境に横位直線文が施文されている。6・7は体部上半の破片で、横位直線文と四角文の組み合わせが施文され、文様内に単節LR縄文が充填されている。

第226図-8～19、第227図-1～4は鉢である。これら鉢の器形は多様で、体部から口縁部にかけて内湾する第226図-8・10～13、直線的に外傾する体部から口縁部が強く内湾する9、体部から口縁部にかけて緩やかに外傾する14～19、第227図-2～4、体部から口縁部にかけて直立する第227図-1がある。第226図-8・11・12・19は数条の横位直線文、9・10・13～17、第227図-2・3は横位直線文と弧線文・連弧文・連続山形文・波状文の組み合わせ、4は幾何学文が施文されている。第226図-12・16は口縁部内面に横位直線文が施文されている。これら鉢の地文は、第226図-10・12・16・17・19、第227図-2～4が単節LR縄文、第226図-9が無節L縄文、15が無節R縄文、8が植物茎回転文である。9の口縁部と19の体部上半には焼成前の穿孔が穿たれている。



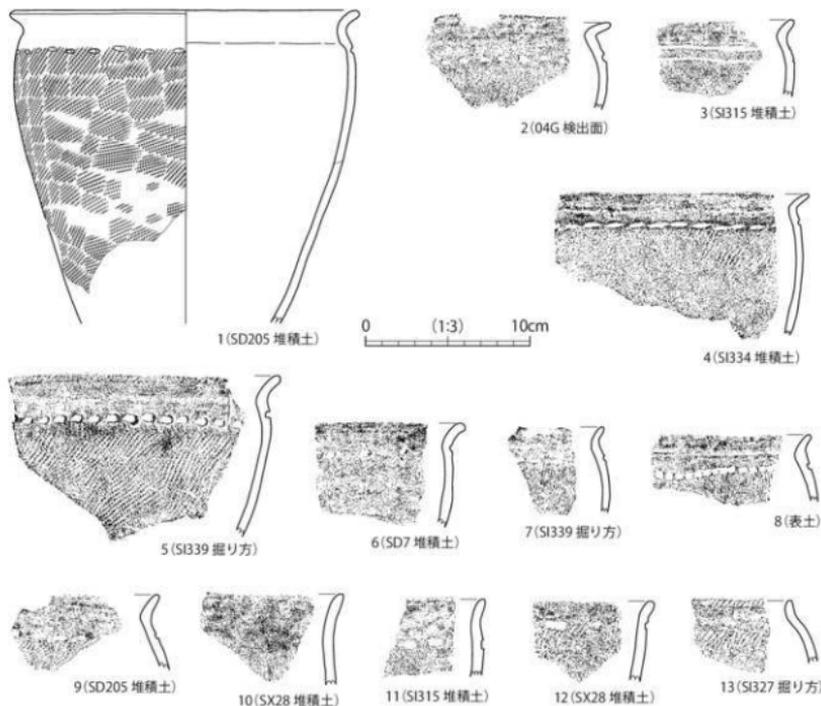
図録番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面図物(文様)	内面図物(文様)	備考	写真図録
1	B-188	第9次	37G	Ⅲ層	弥生土器	甕	口縁~体上部	口縁~体上部:ミガキ	ミガキ	口径(17.8)cm	127
2	B-086	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	甕	口縁~腹部	口縁~腹部:ミガキ	ミガキ		127
3	B-084	第9次	SX27	埴積土	弥生土器	甕	口縁~腹部	口縁:横位隆起部付~ミガキ	ミガキ		127
4	B-150	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	甕	口縁~腹部	口唇~口縁:1段縄文横位付	横位ミガキ		127
5	B-098	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	甕	口縁~体上半	体上部:沈隆(横位直線文)	ナシ?	内外面磨光	127
6	B-097	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	甕	体部	体部:沈隆~1段縄文~沈隆~ミガキ(四角文)	ナシ		127
7	B-081	第9次	SK311	埴積土	弥生土器	甕	体部	体部:沈隆~1段縄文~ミガキ(四角文)	ミガキ		127
8	B-040	第9次	SI334	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~底部	口縁~体上部:ミガキ(横位直線文) 体部:植物葉形刺文 底部:副代瓦	ミガキ		127
9	B-057	第9次	SI339	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:1段縄文?~沈隆~ミガキ	ミガキ	口縁部地物穿孔孔径:3.0mm	127
10	B-100	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:沈隆~1段縄文~沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧文)	ミガキ	内外面灰化物付着	127
11	B-172	第9次	08G	検出面	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:沈隆~ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ		127
12	B-035	第9次	SI328	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口唇:1段縄文横位付 口縁:突起 口縁~体上半:沈隆~ミガキ(横位直線文)	口縁:沈隆(横位直線文) ミガキ		127
13	B-031	第9次	SI324	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:沈隆~1段縄文~沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧山形文)	横位ミガキ	内外面灰化物付着	127
14	B-095	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体部	口縁~体部:沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧文)	ナシ		127
15	B-067	第9次	SB39P1	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体部:沈隆~1段縄文~沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧文)	横位ミガキ		127
16	B-003	第9次	SI268P1	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:沈隆~1段縄文~沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧山形文)	ナシ		127
17	B-021	第9次	SI319	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:沈隆~ミガキ(横位直線文+遊弧文)	ナシ		127
18	B-104	第9次	SX28	埴積土	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁~体上半:1段縄文~沈隆~ミガキ(四角文)	ミガキ		127
19	B-146	第9次	23G	古代遺構検出面	弥生土器	鉢	口縁~体上半	口縁:1段縄文横位付 体上半:沈隆(横位直線文)	ミガキ	体部上半地物穿孔孔径:5.0mm	127

第 226 図 第 9 次調査(層位不明) 出土弥生土器(1)



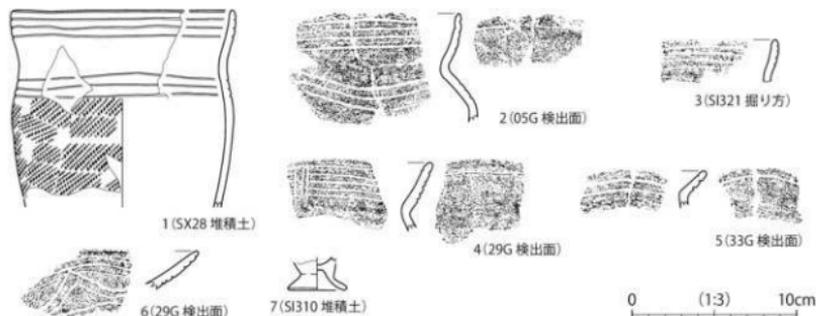
図録番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 掲載
1	B-055	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	鉢or 深鉢	口縁～ 体上半	口縁～体上半:ミガキ (横位直線文+透地山形文)	ミガキ		127
2	B-002	第9次	SI268	堆積土	弥生土器	鉢?	体部	体部:丸線文斜位回転→沈殿→ミガキ (横位直線文+透地山形文)	ミガキ		127
3	B-149	第9次	O8G	横出面	弥生土器	鉢	体部	体上半:丸線文→沈殿→ミガキ(幾何学文) 体下半:丸線文斜位回転	ミガキ		127
4	B-063	第9次	SI349	堆積土	弥生土器	鉢	体部	体部:沈殿→丸線文→沈殿→ミガキ(幾何学文)	ミガキ		127
5	B-016	第9次	SI315	床面直上	弥生土器	蓋?	体下半 ～底部	体上半:植物葉回転文 体部:丸線文 底部:副代面→周縁部立止オコシ	ミガキ		127
6	B-004	第9次	SI288	堆積土	弥生土器	蓋	天井～ 体上半	天井～体上半:植物葉回転文→ミガキ	ミガキ		127
7	B-159	第9次	O4G	横出面	弥生土器	蓋	つまみ～ 体上半	つまみ:沈殿(横位直線文)→ミガキ	ナデ		127
8	B-168	第9次	37G	横出面	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁:丸線文 口縁～体下半:沈殿→丸線文→ミガキ(横位直線文+幾何学文)	口縁:丸線文 口縁:沈殿(横位直線文)ミガキ		127
9	B-048	第9次	SI330	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁～体下半:沈殿→ミガキ (横位直線文+透地山形文)	ミガキ		127
10	B-101	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁～体下半:植物葉回転文→沈殿→ミガキ (横位直線文+山形文)	ミガキ		127
11	B-078	第9次	SK296	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁～体下半:丸線文斜位回転→沈殿→ミガキ (横位直線文+透地文)	口縁:丸線文→沈殿 体下半:ミガキ	口縁部内面灰化物質着	127
12	B-043	第9次	SI336	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁:丸線文→沈殿→一部ミガキ(横位直線文) 体下半:丸線文横位回転	口縁:沈殿(横位直線文)ミガキ	口縁部内面灰化物質着	127
13	B-102	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁～体下半:丸線文→沈殿→ミガキ(横位直線文)	ミガキ		127
14	B-060	第9次	SI330	掘り方	弥生土器	蓋	口縁～ 体部	口縁:沈殿→丸線文→沈殿→ミガキ(横位直線文) 体部:丸線文横位回転	ミガキ		128
15	B-011	第9次	SI314P5	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～ 体下半	口縁～体下半:丸線文横位回転→沈殿→ミガキ (横位直線文+透地文)	横位ミガキ		128
16	B-054	第9次	SI330	掘り方	弥生土器	蓋	口縁～ 体部	口縁～体部:植物葉回転文	ミガキ		128

第 227 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土弥生土器 (2)



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整 (文様)	内面調整 (文様)	備考	写真 図版
1	B-073	第9次	SD205	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体部	口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(左→右) 体部:L段横文縦位+斜位回転	ミガキ	口径(21.2)cm	128
2	B-158	第9次	O4G	検出面	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(右→左) 体上半:L段横文(附加L段+R段横位回転)	ミガキ		128
3	B-015	第9次	SI315	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナ字 体上端:沈凹(横位或縦文) 体上半:L段横文?→沈凹→ミガキ	ミガキ		128
4	B-041	第9次	SI334	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:沈凹→ミガキ(横位或縦文) 体上半:L段横文?→沈凹→ミガキ	ミガキ	外面炭化物付着	128
5	B-061	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	甕	口縁～ 体部	口縁:L段横文縦位回転 口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(左→右) 体部:L段横文縦位回転	ミガキ	外面炭化物付着	128
6	B-070	第9次	SD7	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:L段斜位縦位回転	ミガキ		128
7	B-039	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(右→左) 体上半:L段横文縦位回転	ミガキ		128
8	B-144	第9次	—	表土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口内:L段横文(附加L段+R段横位) 口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(右→左) 体上半:L段横文(附加L段+R段横位)	縦位ミガキ		128
9	B-072	第9次	SD205	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ヨコナ字 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:L段横文縦位回転	ミガキ		128
10	B-092	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ミガキ 体上半:植物葉回転文	ミガキ		128
11	B-018	第9次	SI315	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ミガキ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:植物葉回転文	ミガキ		128
12	B-087	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口縁:ミガキ 体上端:列点刺突(左→右) 体上半:L段横文縦位回転	ミガキ		128
13	B-034	第9次	SI327	掘り方	弥生土器	甕	口縁～ 体上半	口内:L段横文縦位回転 口縁:ミガキ 体上半:L段横文縦位回転	口縁:ヨコナ字→ミガキ 体上半:ミガキ		128

第228図 第9次調査(層位不明)出土弥生土器(3)



図版番号	登録番号	調査年度	出土地点	層位	種類	部類	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考	写真掲載
1	B-004	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～体上半 ～体部	口縁～体上半:沈彫→ミガキ(横位直線文) 体下半:LR段文横位・斜位回転	ミガキ	口径:13.6cm 口縁部内外面図化 物付存	128
2	B-164	第9次	05G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈彫→ミガキ(横位直線文)	口縁:沈彫(横位直線文) ミガキ		128
3	B-020	第9次	SI321	掘り方	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:LR段文横位回転 口縁～体上半:沈彫(横位直線文+内角文)	横位ミガキ		128
4	B-154	第9次	29G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:沈彫→ミガキ(横位直線文+縦位直線文) 体上半:ミガキ	口縁:沈彫(横位直線文) 縦位ミガキ		128
5	B-166	第9次	33G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:沈彫→ミガキ(横位直線文) 体上半:ミガキ	口縁:沈彫(横位直線文) ミガキ		128
6	B-152	第9次	29G	検出面	弥生土器	高坏	口縁～体上半	口縁:沈彫→植物茎回転文→沈彫→ミガキ (横位直線文+連弧文)	ミガキ		128
7	B-006	第9次	SI310	堆積土	弥生土器	小型土器	体下部～胴部	つまみ～口縁:ナデ	ナデ		128

第229図 第9次調査(層位不明)出土弥生土器(4)

第227図-5～16は蓋である。5・6は天井部側縁が外側に向かって僅かに張り出し、7は天井部の側縁に高いつまみが付く器形である。7・12～15は横位直線文、8～11は横位直線文と幾何学文・斜位直線文・連続山形文・連弧文の組み合わせが施文され、16は地文のみである。これら蓋の地文は、8・11・12が単節LR縄文、13・14が無節R縄文、5・6・10・15・16が植物茎回転文である。5は天井部に網代痕が観察され、周縁部がユビオサ工調整されている。6の天井部は地文施文後にミガキ調整されている。

第228図-1～13は甕である。1～6・10～12は口縁部に最大径を持ち、7～9・13は体部に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上端に列点刺突が施文されるほか、2条の横位直線文が施文される3や無文の10・13がある。これら甕の地文は、1～7・9が単節LR縄文、8が附加条縄文、12・13が無節L縄文、10・11が植物茎回転文である。

第229-1～5は深鉢である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持ち、1～4は口縁部が内湾気味に直立または外傾し、5は口縁部が直線的に外傾する器形である。1～3・5は横位直線文、4は横位直線文と縦位直線文の組み合わせが施文され、2・5は口縁部内面に1条の横位直線文が施文されている。これら深鉢の地文は、単節LR縄文である。

6は高坏である。内湾気味に大きく開く器形である。横位直線文と連弧文の組み合わせが施文され、文様内に植物茎回転文が充填されている。

7は高坏形の小型土器である。内外面ともにナデ調整が施されている。

これら弥生土器は、概ね中期中葉の椀形器式に比定されるが、第226図-9は弥生時代前期末から中期前葉と考えられる。

(2) 石器 (第 230～276 図)

第 5 次調査 (第 230～233 図)

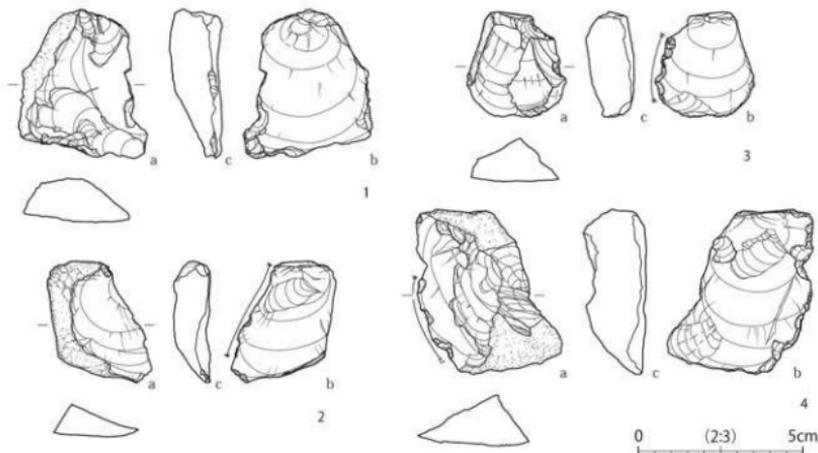
第 5 次調査で出土した石器は、殆どが層位不明である。包含層の遺物と思われる石器は基本層IVa層から 4 点出土したが、グリッド単位での取り上げのため詳細な出土位置は不明である。下層調査トレンチからは石器は出土しなかった。

①IV層出土石器 (第 230 図)

二次加工のある剥片 1 点、微細剥離のある剥片 3 点を掲載した。

第 230 図-1 は二次加工のある剥片である。a 面の左側縁部に自然面を残し、a・b 面の下端部に二次加工を施す。石材は流紋岩である。

2～4 は微細剥離のある剥片である。2 は a 面の左側縁部に自然面を残し、b 面の左側縁部に微細剥離が認められる。3 は a 面の左側縁部に自然面を残し、b 面の左側縁部に微細剥離が認められる。4 は a 面の上下端部に自然面を残し、同面の左側縁部に微細剥離が認められる。石材は 2 が黒色安山岩、3・4 が流紋岩である。



図版 番号	発掘 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	寸法(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-189	第5次	11G	IVa層	打製石器	二次加工のある剥片	4.6	4	1.6	22.2	流紋岩	a面左側縁部自然面,a・b面下端部二次加工	129
2	Ka-209	第5次	12G	IVc層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.7	3.2	1.1	9.6	黒色安山岩	a面左側縁部自然面,b面の左側縁部微細剥離	129
3	Ka-211	第5次	11G	IVc層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.2	3	1.5	11.7	流紋岩	a面左側縁部自然面,b面の左側縁部微細剥離	129
4	Ka-210	第5次	18G	IVc層	打製石器	微細剥離のある剥片	5.1	4.4	1.9	30.3	流紋岩	a面上下端部自然面,a面左側縁部微細剥離	129

第 230 図 第 5 次調査 (IV層) 出土石器

②層位不明石器 (第 231～233 図)

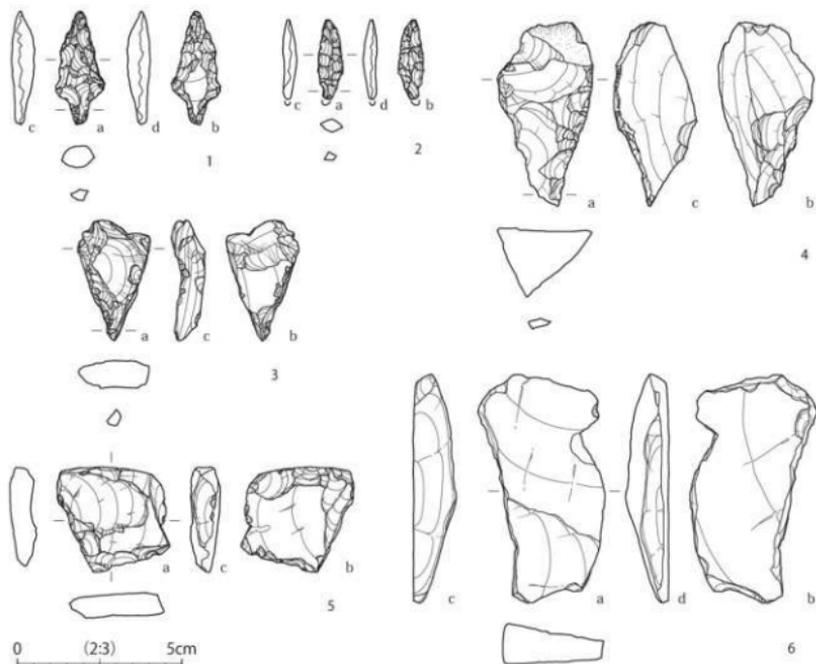
石鏃 2 点、石錐 2 点、楔形石器 1 点、板状石器 (?) 1 点、二次加工のある剥片 2 点、石核 3 点、石砲丁 1 点、磨製石斧 1 点を掲載した。遺構堆積土からの出土が多く、もともとは基本層IV層に包含されていたと考えられるが、遺構の構築によって原位置を失い、遺構堆積土に混入したものと思われる。そのほか遺構検出時に出土した石器も

ある程度認められたが、帰属層位を確定するまでには至っていない。この状況は第6次調査においても同様であり、いずれも基本層IV層のトレンチ調査では出土遺物が僅かしか認められなかったことなどから、遺物が含まれていた層位は削平などにより大半が失われてしまったと考えられる。

しかしこれら層位不明石器も出土量は多く、本来は第9次調査の例が示す通りある程度の密度をもって包含されていたものと思われる。また、第5次調査においては調査区北東寄りの13・14・20グリッドから出土した石器が大半を占め、ここを中心に包含されていた可能性が考えられる。

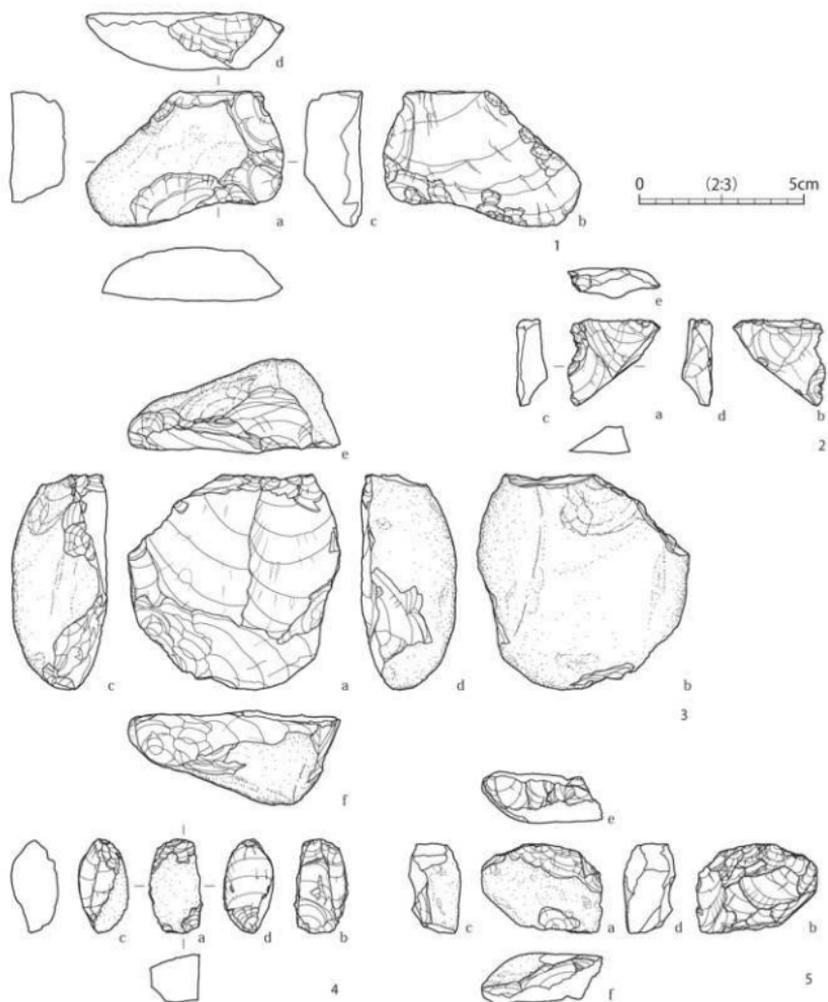
第231～233図に掲載した石器は残存状態が比較的良好な製品類を主に抽出し、剥片や一部の石核などは割愛した。この点は第6次および第9次調査の層位不明石器についても同様で、第5次と第9次調査では微細剥離のある剥片についても図化しなかった。

第231図-1・2は石鏃で、ともに有茎鏃である。1は完形品で、b面に素材面を残す。2は基部を欠損し、平面形状が「し」字状に歪む。いずれも入念な調整にて整形される。石材はともに流紋岩である。



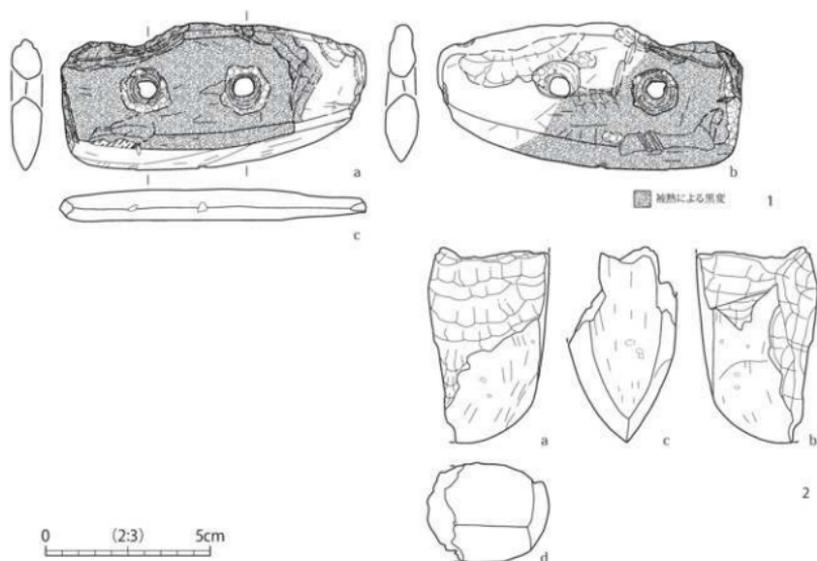
図録番号	発掘年次	調査地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真掲載	
						全長	幅	厚さ					
1	Ka-253	第5次	SK231	上層	打製石器	石鏃	3.5	1.5	0.7	2.6	流紋岩	完形。a・b面入念な調整。b面素材面	129
2	Ka-254	第5次	河川跡	上層	打製石器	石鏃	2.4	0.8	0.4	0.6	流紋岩	基部欠損。a・b面入念な調整	129
3	Ka-265	第5次	SK206	掘り方	打製石器	石鏃	3.7	2.2	1	5.8	瑛質頁岩	a面を修整。二次加工。先端部使用面	129
4	Ka-266	第5次	河川跡	埋積土	打製石器	石鏃	5.6	2.9	2.5	26.5	流紋岩	a・b面を修整部連続する二次加工。先端部使用面	129
5	Ka-261	第5次	SM347	埋積土	打製石器	楔形石器	3.2	3.4	0.9	11.7	黒色安山岩	上下端部ツレ状の剥離	129
6	Ka-282	第5次	SK265	埋積土	打製石器	板状石器	7	3.9	1.3	33.9	片岩	板状石器破片	129

第231図 第5次調査(層位不明)出土石器(1)



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-286	第5次	SK230	埋積土	打製石器	二次加工のある石片	4.2	6	1.8	42.2	燧石片	a面自然面,a-b面二次加工(b面部分的)	129
2	Ka-287	第5次	SI265	埋積直土	打製石器	二次加工のある石片	2.7	2.8	0.0	4.6	燧石片	a-b面上端部へ一箇所不連続な二次加工	129
3	Ka-240	第5次	SK223	埋積土下層	打製石器	石核	6.6	6.4	2.9	121.9	燧石片	両片素材,a面のみ削離作業,打面転移180°,b面全体自然面	130
4	Ka-241	第5次	20G	埋出層	打製石器	石核	2.9	1.6	1.5	7.6	燧石片	両核の縁削片素材,b-c面の削離作業,打面転移180°,a面自然面	129
5	Ka-242	第5次	SK230	埋積土	打製石器	石核	2.8	3.7	1.6	16.8	燧石片	b面同一方向の面がc-削離作業,a面自然面	130

第 232 図 第 5 次調査 (層位不明) 出土石器 (2)



調査番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Kb-008	第5次	SE265	堆積土	磨製石器	石庖丁	4.6	0.3	1.1	56.3	片岩	縁孔外径1.5cm・内径0.6cm, 最打・剥離→磨整形, 刃部顯著な光沢痕, 大半被熱	130
2	Kb-001	第5次	SK230	堆積土	磨製石器	大型 粘刀石斧	(6)	(3.7)	(3.2)	87.3	黒色頁岩	刃部, 折前→剥離, a~c面磨状痕	130

第233図 第5次調査(層位不明)出土石器(3)

3・4は石錐で、ともにやや大型の製品である。3はa面の左側縁部を中心に入念な二次加工を施し、先端部には使用時の微細剥離が認められる。4はa面上端部に自然面を残し、a・b面とも右側縁部を中心に連続する二次加工を施す。やはり先端部には使用時の微細剥離が認められる。石材は3が珪質頁岩、4が流紋岩である。

5は楔形石器である。上下端部にはツブレ状の剥離が認められる。石材は黒色安山岩である。

6は板状石器の一部と考えられる。石材は片岩とみられる。

第232図-1・2は二次加工のある剥片である。1はa面に自然面を残し、b面とともに二次加工を施すが、b面の加工は部分的な剥離に留まる。2はa・b面上端部および一側縁部に不連続な二次加工を施す。石材は1・2ともに流紋岩である。

第232図-3～5は石核である。3は大型の剥片素材の石核で、剥離作業はa面のみに行われ、打面を180°転移させている。b面は全体が自然面である。4は両極剥離による剥片素材の石核で、剥離作業はb・c面を中心に行われ、途中で打面を180°転移させている。a面には自然面を残している。5はb面にて同一方向からの細かい剥離作業が行われている。a面には自然面を残す。石材は3が流紋岩、4・5が黒曜石である。

第233図-1は石庖丁である。板状節理の素材周縁部を敲打・剥離し、その後磨整形される。紐孔は2箇所あり、孔部分を両面とも敲打し、その後回転穿孔を行う。刃部には顕著な光沢痕が認められ、大半が被熱する。石材は片岩である。

第 233 図-2 は磨製石斧で、太型の蛤刃石斧である。刃部破片で、欠損後に折れ部分に剥離が行われる。石材は黒色頁岩と思われる。

第 6 次調査 (第 234 ~ 236 図)

石鏡 1 点、削器 2 点、楔形石器 1 点、二次加工のある剥片 8 点、微細剥離のある剥片 5 点、石核 3 点を掲載した。本調査区では IV 層出土の資料がなく、このため微細剥離のある剥片を含む全ての器種を図化した。

第 234 図-1 は石鏡である。有茎鏡で形状は細長い三角形を呈し、先端部を欠損する。人念な調整にて整形されている。石材は流紋岩である。

2・3 は削器である。2 は半月状の形状を呈し、a 面全体と b 面の周縁部に二次加工を施す。3 は横長の剥片を素材とし、a・b 面の周縁部に二次加工を施す。著しく摩耗し、a・b 面に二重パティナが認められる。石材は 2 が黒色安山岩、3 が安山岩である。

4 は楔形石器である。a 面に自然面を残し、上下両端部にツブレ状の剥離が認められる。c 面は両極剥離である。石材は流紋岩である。

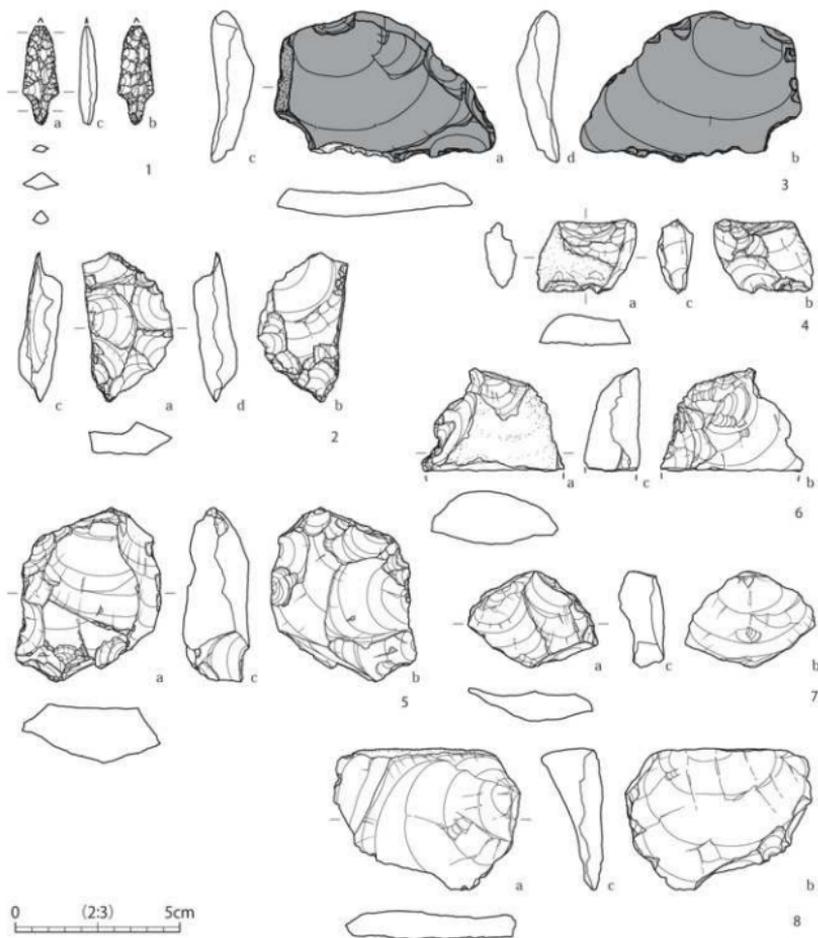
第 234 図-5 ~ 8、第 235 図-1 ~ 4 は二次加工のある剥片である。第 234 図-5 は a・b 面の周縁部に二次加工を施し、a 面の稜上にはツブレ状の微細剥離が認められる。6 は下半部を欠損し、a 面の広い範囲に自然面を残す。二次加工は a・b 面ともに左側縁部に施す。7 は a 面の右側縁部に二次加工を施し、b 面には素材面をそのまま残している。8 は上部端部に自然面を残し、b 面の周縁部に不連続な二次加工を施す。第 235 図-1 は大型の剥片を素材とし、a 面の周縁部に不連続な二次加工を施す。2 は a・b 面の両側縁部に細かい二次加工を連続して施す。3 は a 面の一部に二次加工を施し、その後折れが生じている。4 は a 面の広い範囲に自然面を残し、同面の両側縁部に二次加工を施す。右下部には折れが生じている。石材は第 234 図-5 ~ 8、第 235 図-1・4 が流紋岩、第 235 図-2・3 が頁岩である。

第 235 図-5 ~ 9 は微細剥離のある剥片である。5 は鉤状の形状を呈し、その括れ部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はともに僅かである。6 は a 面の両側縁部および b 面の右側縁部に微細剥離が認められる。両面剥離部分は剥離範囲が a・b 面ともほぼ同じである。7 は厚みのある素材で、a・b 面の上部部を中心に微細剥離が認められる。b 面では剥離範囲が左側縁の上部にまで達している。8 は a 面の下部部と、b 面の右側縁部から下部部にかけて微細剥離が認められる。9 は上部端部に自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は b 面の方が狭い。石材は 5 ~ 7・9 が流紋岩、8 が頁岩である。

第 236 図-1 ~ 3 は石核である。1 は剥片素材の石核で、断面形状は船底形を呈する。剥離作業はほぼ全面にて行われ、b 面の右上方と e 面の左上方には細かな剥離が認められる。自然面を b 面の一部に残し、e 面には節理面が形成されている。2 は垂角礫を素材とする石核で、各面に自然面を残す。剥離作業は上半部に集中して行われる。剥離作業中、打面を 90° 転移させている。3 も垂角礫素材と考えられ、下面から c 面にかけて自然面を残す。剥離作業は a・b・d の 3 面で行われ、剥離面は幅広である。自然面には被熱痕が認められ、加熱処理後に剥離作業が行われたことが判る。石材は 1 が頁岩、2 が流紋岩、3 が石英岩である。

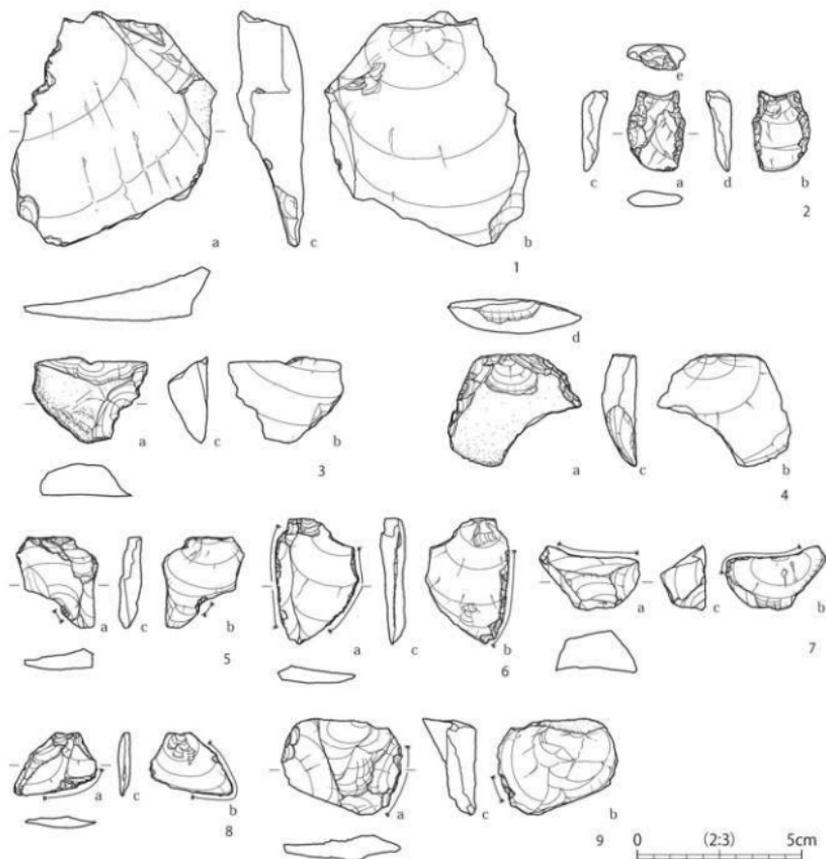
第 9 次調査 (第 237 ~ 256 図)

第 9 次調査では基本層 IV 層中からの出土が多く認められ、本書ではこのうち 53 点を掲載した。ただし第 238 図に示したように IV 層の大部分が遺構によって失われ、断片的な出土状況しか把握できなかった。雑駁に見れば 33 グリッド、特に SX28 の周辺に集中する傾向が窺え、SX28 堆積土の石器も出土量が他の遺構を上回っている点が注意される。そのほか本調査区では出土層位不明の石器も多く、これらについても 50 点を掲載した。



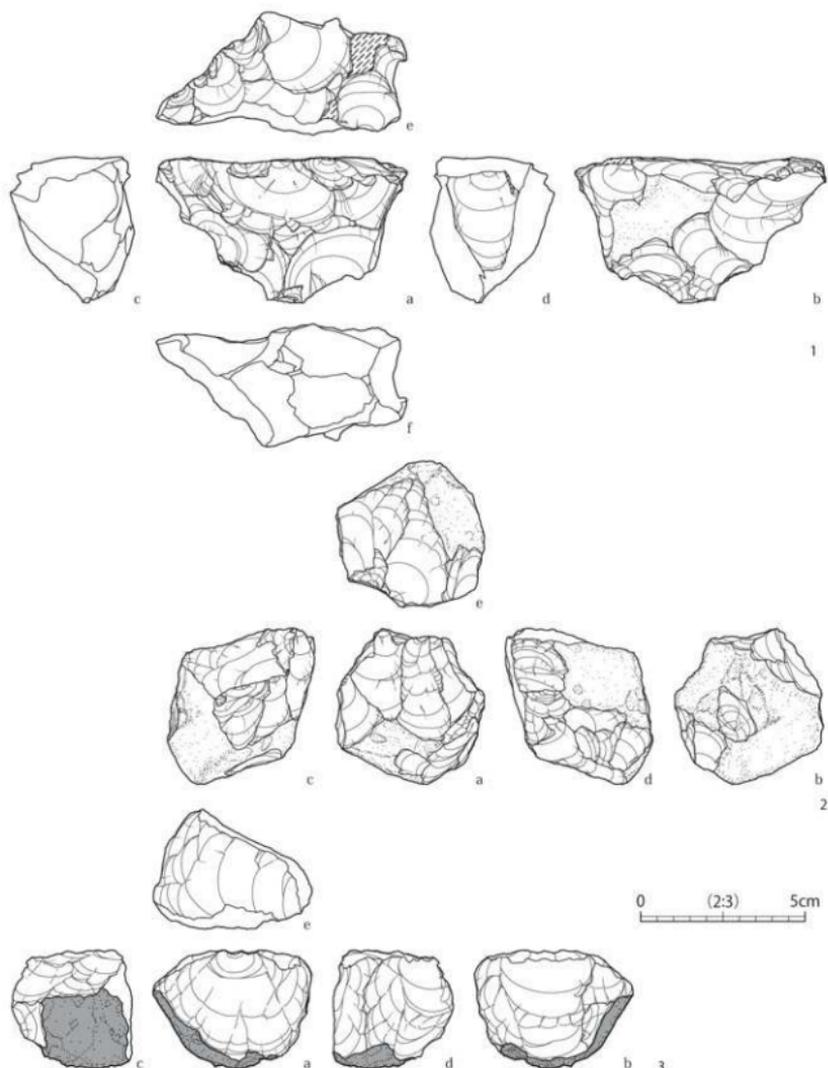
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-174	306次	20G	検出面	打製石器	石鏃	3.1	1.1	0.6	1.3	流紋岩	先端部欠損,a,b面人間的調整	130
2	Ka-263	306次	SD182	埋積土	打製石器	刮削器	4.6	2.7	1.3	11.4	黒色安山岩	a面全体・b面側縁部二次加工	130
3	Ka-264	306次	SK282	埋積土	打製石器	刮削器	4.6	0.7	1.3	31.4	安山岩	a・b面側縁部二次加工,厚肉による「重バティナ」	130
4	Ka-262	306次	SD191	埋積土	打製石器	楔形石器	2.3	3	1.1	6.7	流紋岩	a面白然面,上下端部ツブレ状側縁,c面両端側縁	131
5	Ka-190	306次	03G	検出面	打製石器	二次加工のある刮削器	5.4	4.4	2	45.1	流紋岩	a・b面側縁部二次加工,a面縁上にツツレ状微細側縁	131
6	Ka-191	306次	23G	検出面	打製石器	二次加工のある刮削器	3.2	4.3	1.7	19.9	流紋岩	下部欠損,a面白然面,a・b面左側縁部二次加工	131
7	Ka-193	306次	03G	検出面	打製石器	二次加工のある刮削器	3	3.9	1.4	11	流紋岩	a面白側縁部二次加工,b面全体素材面	131
8	Ka-194	306次	23G	検出面	打製石器	二次加工のある刮削器	4.3	5.7	1.9	30.2	流紋岩	上端部白然面,b面側縁部不連続な二次加工	131

第 234 図 第 6 次調査 (層位不明) 出土石器 (1)



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-195	第6次	07G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	7.2	6.2	2	52.6	流紋岩	a・b面両縁部不連続な二次加工	131
2	Ka-288	第6次	SI273	掘り方	打製石器	二次加工のある剥片	2.5	1.8	0.8	2.8	頁岩	a・b面内側縁部から二次加工	131
3	Ka-289	第6次	SM375	堀積土	打製石器	二次加工のある剥片	2.6	3.5	1.2	9.2	頁岩	a面一部二次加工, c面折れ	131
4	Ka-290	第6次	SI279	床面直上	打製石器	二次加工のある剥片	3.4	4.1	1.1	11.9	流紋岩	a面自然面, a・b面内側縁二次加工, c面折れ	131
5	Ka-212	第6次	23G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2.8	2.5	0.7	3.4	流紋岩	括れ部内面微細剥離	131
6	Ka-213	第6次	03G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	3.8	2.5	0.8	5.1	流紋岩	a面内側縁部・b面右側縁部微細剥離	131
7	Ka-214	第6次	29G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2	3	1.4	5.9	流紋岩	a面上端部・b面上端部～左側縁部微細剥離	131
8	Ka-215	第6次	06G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2	2.5	0.4	1.4	頁岩	a面下端部・b面右側縁部～下端部微細剥離	131
9	Ka-216	第6次	01G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	3	3.7	1.6	0.6	流紋岩	上端部自然面, 一側縁部内面微細剥離	131

第 235 図 第 6 次調査 (層位不明) 出土石器 (2)



図版 番号	発掘 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 掲載
						全長	幅	厚さ				
1	Ka-180	第6次	236	横出面	打製石器	石核	4.5	7.6	3.8	102	石灰 洞片素材, 断面が底形, 全面の礫片呈, 一部自然面+面理面	132
2	Ka-179	第6次	076	横出面	打製石器	石核	4.8	4.5	4.5	87.7	流紋岩 準角礫素材, 内面自然面, 上半部の礫片呈, 90°打面転移	132
3	Ka-243	第6次	5298	埋藏土	打製石器	石核	3.6	4.8	3.7	67.8	石英岩 準角礫素材, 下面~c面自然面, a-b-d面の礫片呈, 加熱処理	132

第 236 図 第 6 次調査 (層位不明) 出土石器 (3)

①IV層出土石器(第237・239～246図)

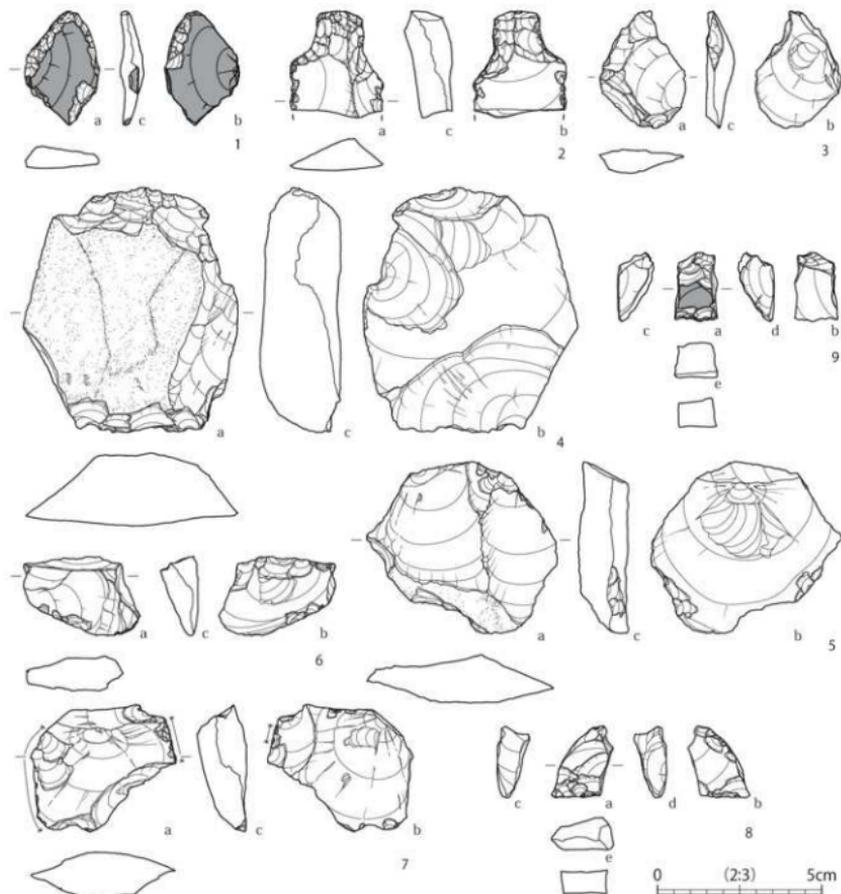
石鏃1点、石匙1点、二次加工のある剥片15点、微細剥離のある剥片23点、石核8点、磨製石斧1点、磨石3点、敲石3点、石皿1点、台石1点を掲載した。

第237図-1は石鏃の未成品である。a・b面に素材面を残し、a面の周縁部とb面の左上側縁部に調整を加えている。a・b面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。石材は鉄石英である。

2は石匙である。つまみ部のみが残存し、a・b面の両側縁部に調整を加えて凸状のつまみ部に整形する。調整は直接打撃で行っており、製作時に欠損したものであると思われる。石材は頁岩である。

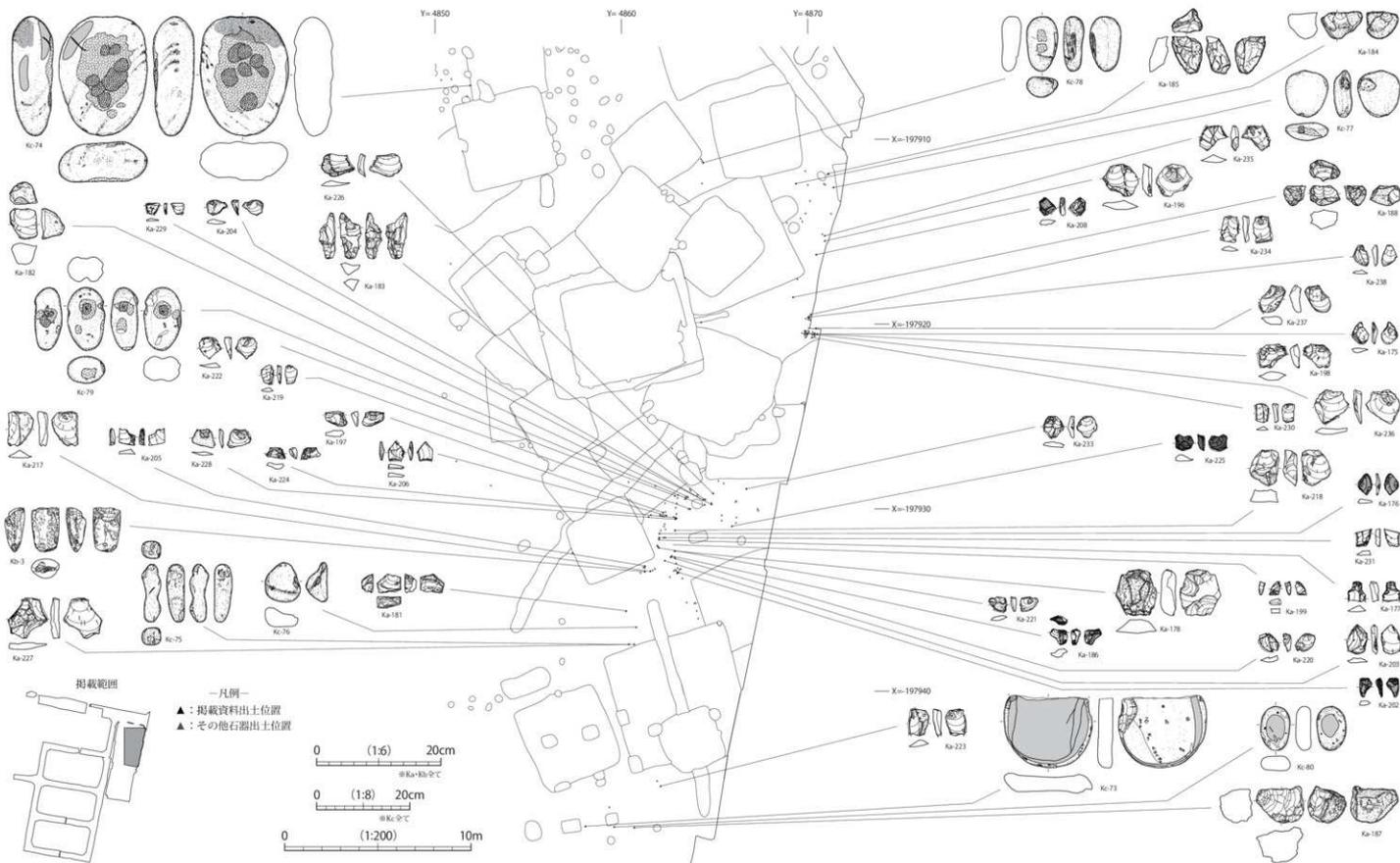
第237図-3～9、第239図-1～8は二次加工のある剥片である。第237図-3はa面の右側縁部から下端部にかけて二次加工を施す。4は大型の剥片素材を用い、a面の広い範囲に自然面を残す。a・b面ともに上下端部に二次加工を施し、a面には細かい加工を連続して施す。5はa面の下端部に自然面を残し、a・b面ともに部分的な二次加工を施す。6は上部、両側縁部ともに折れており、a・b面の下端部とb面上端部に二次加工を施す。7は素材がa・b面ともにボゾ面となっており、a面の周縁部を中心に二次加工を施すほか、a面の両側縁部とb面の左側縁部には微細剥離が認められる。b面の微細剥離が確認できるのは僅かな範囲である。8は両側縁部を切筋調整し、a・b面の下端部とb面上端部に二次加工を施す。9は両側縁部を切筋調整し、a面の上下端部に二次加工を施す。a面には加熱処理による二重パティナが認められる。第239図-1はa・b面ともに周縁部に二次加工を施す。2はa面の右側縁部に二次加工を施す。3は横長の剥片を素材とし、二次加工はa面の自然面部分を中心に施され、下端部には細かい剥離が連続する。a・b面ともに被熱による二重パティナが認められ、剥片状態で加熱処理されたと考えられる。4はa面の周縁部とb面上端部に二次加工を施し、a・b面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。5はa面の右側縁部に自然面を残し、二次加工はその自然面を中心に施す。6はa・b面の下端部とa面の左側縁の一部、a面上端部に二次加工を施し、同時に微細剥離も認められる。刃部以外の周縁部は切筋調整時の折れ面で構成される。7はa面の全体に自然面を残し、その右側縁部から下端部にかけて二次加工を施す。8はa面に自然面を残し、a面の下半部とb面上半部を中心に二次加工を施す。a・b面の下半部には微細剥離も認められる。a・b面には加熱処理による二重パティナが認められる。a面には加熱処理前の二次加工も残る。a面の左側縁部には折れ面が認められる。石材は、第237図-1が鉄石英、第237図-2、第239図-8が頁岩、第237図-8・9、第239図-3・6が珪化凝灰岩、第239図-4が珪質頁岩、第239図-5・7が黒色頁岩、その他は流紋岩である。

第239図-9・10、第240・241図は微細剥離のある剥片である。第239図-9はa面の下端部に自然面を残し、b面の左側縁部に微細剥離が認められる。剥離範囲は僅かである。10はa面の右半部に自然面を残し、微細剥離はb面の右側縁部に認められる。下端部は同時割れを起こしている。第240図-1はa面の右側縁部から下端部にかけて微細剥離が認められる。2はa面の左側縁部から下端部にかけて微細剥離が認められる。3はa面の大半に自然面を残し、微細剥離はa面の下端部に認められる。4はa面の右側縁部に微細剥離が認められ、剥離範囲は狭い。5はa面の1/2程に自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はa面の方が広く、上端部に達する。6はb面の下端部に微細剥離が認められ、剥離範囲は狭い。7はa面の左側縁部に自然面を残し、b面の下端部を中心に微細剥離が認められる。全体が被熱し、a面には火ハネの痕跡を有する。8はa面の左側縁部から下端部にかけて自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はa面の方が広く、側縁部全体におよぶ。9はa面の右側縁部に微細剥離が認められる。10はa面の大半に自然面を残し、b面の右側縁部に微細剥離が認められた。第241図-1はa面の両側縁部とb面の下端部に微細剥離が認められる。b面の微細剥離は下端部の一部のみに形成されている。2はa面の左側縁部に微細剥離が認められる。3は一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は両面ともほぼ同じである。4はa面の両側縁部に微細剥離が認められる。5

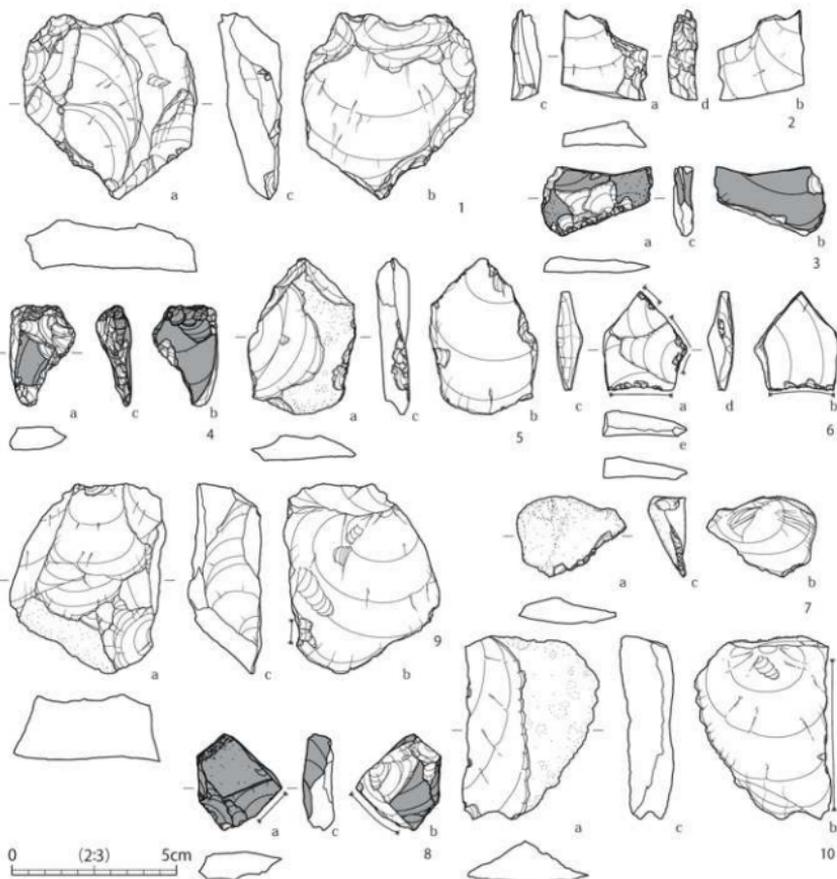


図録 番号	登録 番号	調査 年次	調査地点	層位	種別	器種	法量(cm)		重量 (g)	石材	備考	写真 掲載
							全長	幅				
1	Ka-176	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石鏢	3.5	2.3	0.7	4.5	珧石英 本道具、a面内側部-b面上部縁部入念な調整、二重ハチイ 子(加熱処理)	132
2	Ka-177	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石鏢	3.3	2.8	1.5	10.1	凸縁→まみ部破片、→まみ部直接打撃の調整 ※製作時欠陥?	132
3	Ka-175	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	3.6	2.7	0.9	5.9	流紋岩 a面右側縁部~下端部二次加工	132
4	Ka-178	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	7.5	6.5	2.5	125.1	流紋岩 大型刮片素材、a面自然部、a-b面上下端部二次加工、a面 中心の溝掘削	133
5	Ka-196	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	5.3	5.8	1.5	39.3	流紋岩 a面下部自然部、a-b面部分的な二次加工	133
6	Ka-197	第9次	下層調査	IV層	打製石器	打製石器	2.4	3.6	1.2	7.9	流紋岩 上部→内側縁部削れ、a-b面下部部-b面上端部二次加工	133
7	Ka-198	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	3.9	4.4	1.5	20.7	流紋岩 a-b面若干部、a面内側部中心二次加工、a面内側部-b面 左側縁部微細削磨	133
8	Ka-199	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	2.2	1.9	1	2.7	珧化燧石片 内側縁部切端調整、a-b面下部部-b面上端部二次加工	133
9	Ka-200	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工の ある刮片	2.1	1.3	1.1	2.4	珧化燧石片 内側縁部切端調整、a面上下端部二次加工、a面二重ハチイ 子(加熱処理)	133

第 237 図 第 9 次調査 (IV 層) 出土石器 (1)

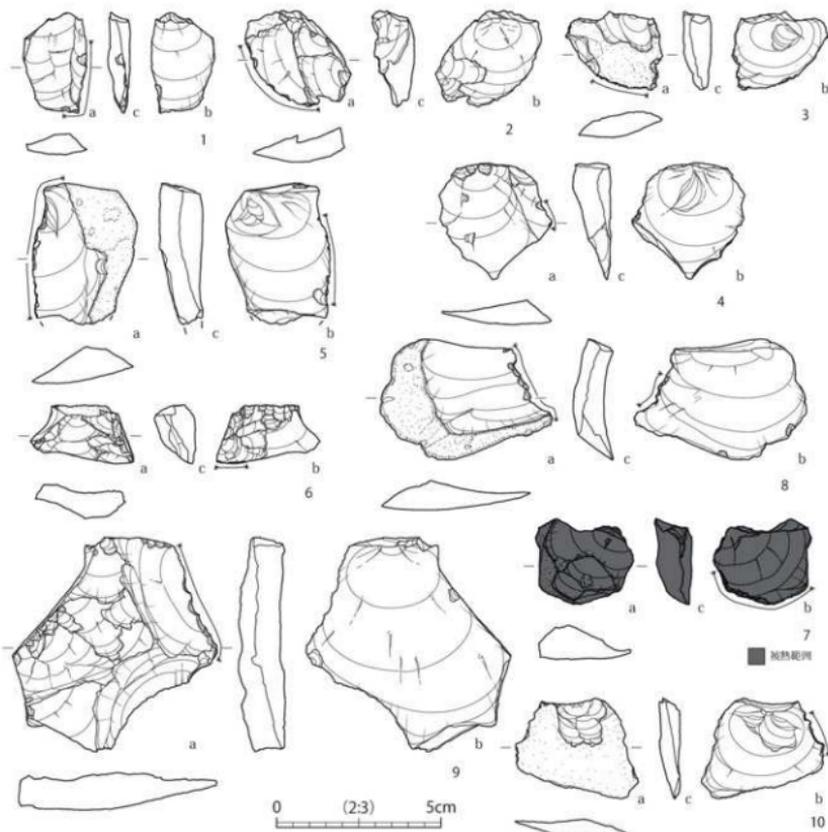


第 238 図 第 9 次調査区IV層石器出土状況図



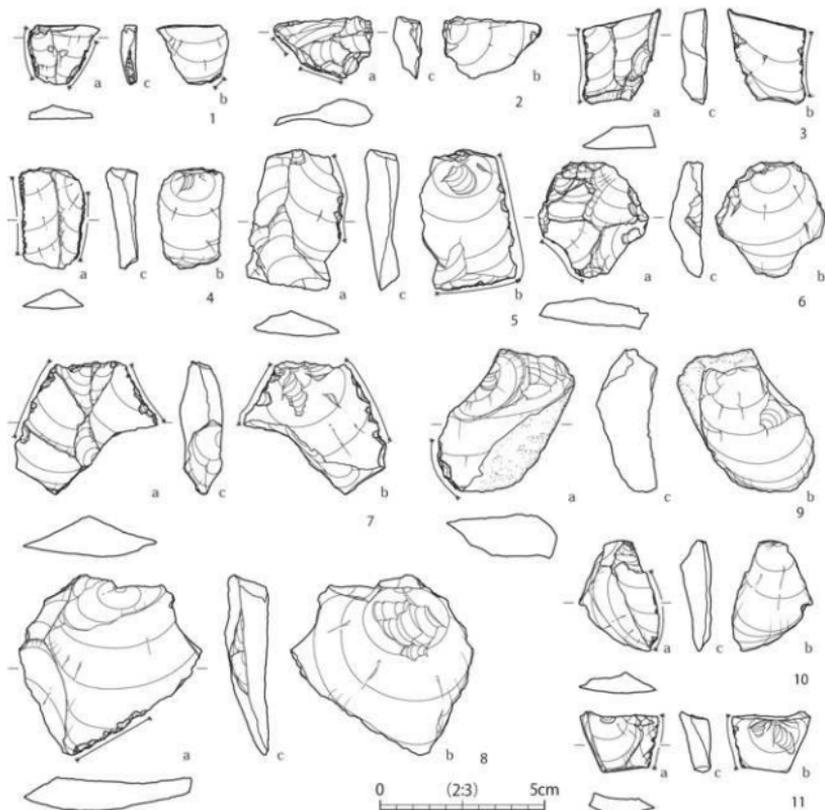
図録 番号	作銀 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	径長(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図録
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-207	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	5.7	5.3	1.9	50.1	燧石片	a-b面側縁部二次加工	133
2	Ka-205	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	2.8	2.6	0.9	5.6	燧石片	a面右側縁部二次加工	133
3	Ka-201	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	2.1	3.4	0.6	4	珪化燧石片	a面自然面部分中心二次加工・下端部鋭い部縁部削、a-b面二重パチヤ(加熱処理)	133
4	Ka-202	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	3.1	2	1.1	5.1	珪化燧石片	a面側縁部・b面上端部二次加工・二重パチヤ(加熱処理)	133
5	Ka-203	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	3.8	3.3	1	13.6	黒色頁岩	a面右側縁部自然面・二次加工	133
6	Ka-206	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	3.1	2.5	0.8	5.3	珪化燧石片	a-b面下端部・a面右側縁部・a面上端部二次加工・微細削、刃部以外は切削調整時の削れ面で構成	133
7	Ka-204	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	2.5	3.3	1.2	7.1	黒色頁岩	a面全体自然面・右側縁部・下端部二次加工	133
8	Ka-208	第9次	下層調査	IV層	打製石器	二次加工のある刮片	3	2.6	1	6.6	頁岩	a面自然面、a面下部・b面上下部二次加工、a-b面微細削、二重パチヤ(加熱処理)、a面加熱処理前の二次加工	133
9	Ka-218	第9次	下層調査	IV層	打製石器	側縁部削のある刮片	5.8	4.8	2.2	61.1	燧石片	a面下端部自然面、b面右側縁部微細削	133
10	Ka-217	第9次	下層調査	IV層	打製石器	側縁部削のある刮片	5.6	4.2	1.6	28	燧石片	a面右平部自然面、b面右側縁部微細削、下端部同時削	134

第 239 図 第 9 次調査 (IV層) 出土石器 (2)



図号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(m)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-219	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	3.1	1.9	0.7	3.9	流紋岩	a面右側縁部～下端部微細刻線	134
2	Ka-220	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	3	3.2	1.3	7.2	流紋岩	a面右側縁部～下端部微細刻線	134
3	Ka-221	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	2.4	3	0.9	4.9	流紋岩	a面大平自然面, a面下端部微細刻線	134
4	Ka-222	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	3.6	3.4	1.2	8.7	流紋岩	a面右側縁部微細刻線	134
5	Ka-223	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	4.3	3.2	1.3	12.9	珪化凝灰岩	a面1/2程自然面, 一側縁部の内面微細刻線	134
6	Ka-224	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	1.8	3.1	1.3	4.4	珪化凝灰岩	b面下端部微細刻線	134
7	Ka-225	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	2.6	3	1.1	8.3	珪化凝灰岩	b面下端部中心微細刻線, 全体焼熱, a面火ハキ	134
8	Ka-226	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	3.7	5.2	1.2	16.3	頁岩	a面右側縁部～下端部自然面, 一側縁部内面微細刻線	134
9	Ka-227	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	6.7	6.2	1.9	45.4	流紋岩	a面右側縁部微細刻線	134
10	Ka-228	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻線のある刮片	3.1	3.7	0.6	5.3	流紋岩	a面大平自然面, b面右側縁部微細刻線	134

第240図 第9次調査 (IV層) 出土石器 (3)

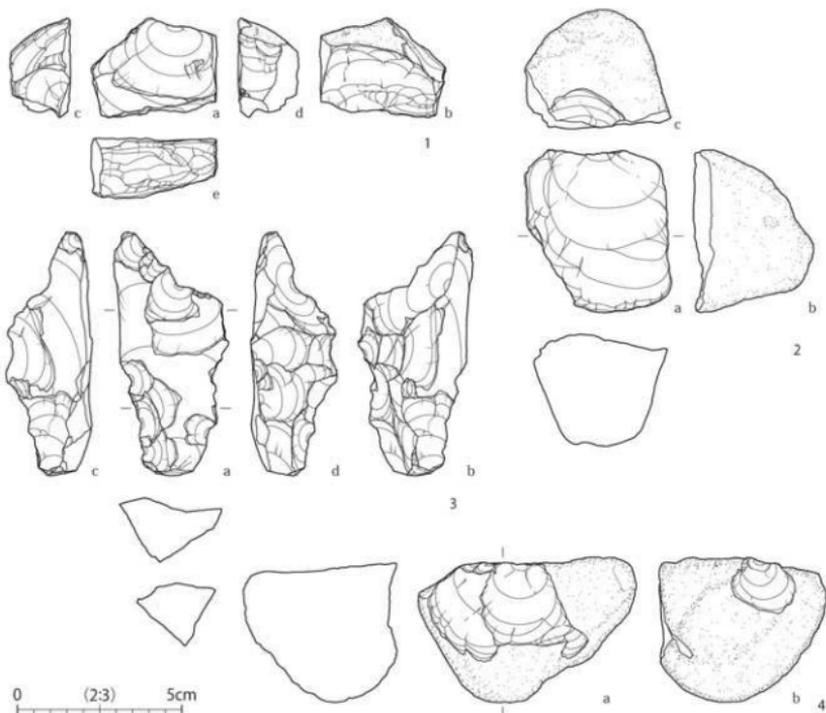


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-229	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	1.8	2.2	0.5	1.7	流紋岩	a面内側縁部-b面下部微細刻跡	134
2	Ka-232	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	1.0	3	0.9	3.3	流紋岩	a面左側縁部微細刻跡	134
3	Ka-231	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	2.9	2.4	0.8	5.5	黒色頁岩	一側縁部内面微細刻跡	134
4	Ka-230	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	3.1	2	1	4.3	流紋岩	a面内側縁部微細刻跡	134
5	Ka-234	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	4.3	3	1	9.8	流紋岩	一側縁部内面-b面下部微細刻跡	134
6	Ka-233	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	3.6	3.3	1	8	流紋岩	a面左側縁下部～下部微細刻跡	134
7	Ka-235	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	4.1	4.3	1.3	13.2	流紋岩	内側縁部内面微細刻跡	134
8	Ka-236	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	5.6	5.6	1.3	27.4	流紋岩	a面下部微細刻跡	134
9	Ka-237	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	4.4	4.2	1.8	22.6	流紋岩	a面右側縁部～下部部-b面上端部付近自然面、a面左側縁部微細刻跡	135
10	Ka-238	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	3.4	2.4	0.9	4.7	流紋岩	a面右側縁部微細刻跡	135
11	Ka-239	第9次	下層調査	IV層	打製石器	微細刻跡のある刮削	1.0	2.4	1	2.7	流紋岩	一側縁部内面微細刻跡	135

第241図 第9次調査(IV層)出土石器(4)

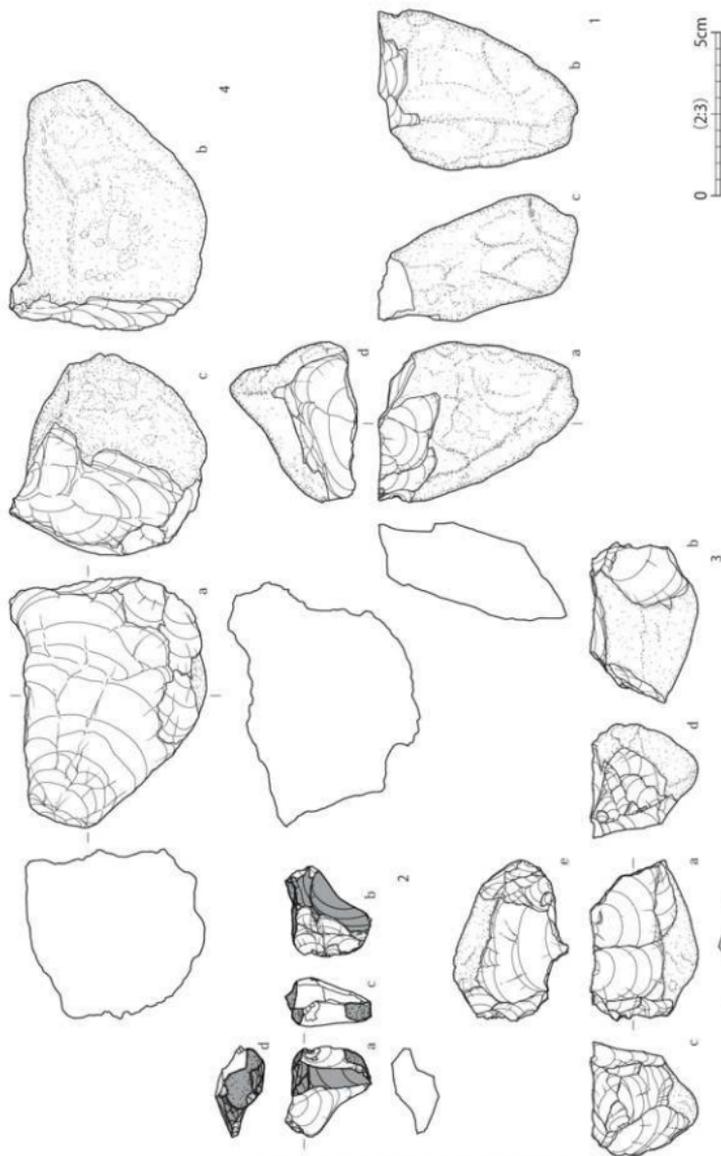
は一側縁部の両面とb面の下端部に微細剥離が認められる。側縁部の剥離範囲はb面の方が広い。6はa面の左側縁部の下部から下端部にかけて微細剥離が認められる。7は両側縁部の両面に微細剥離が認められる。8はa面の下端部に微細剥離が認められる。9はa面の右側縁部～下端部とb面上端部付近に自然面を残し、a面の左側縁下部に微細剥離が認められる。10はa面の右側縁部に微細剥離が認められる。11は一側縁の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はa・b面ともほぼ同じである。このように本器種の微細剥離は殆どが片側だけに認められ、これに該当しないのは第241図-1・4・7の3点のみである。石材は第240図-5～7が珪化凝灰岩、同図-8が頁岩、第241図-3が黒色頁岩、その他は流紋岩である。

第242・243図は石核である。第242図-1は、同時割れを起こした残核と考えられる。上部部に自然面を残し、ここを打面としている。2は半割したブランクと考えられる。剥離作業は行われていない。3は厚手の剥片を素材とし、断面形状は船底形を呈する。作業面は3面ある。4の作業面は2面で剥離回数は少ない。このため全体に自然面が良く残っている。



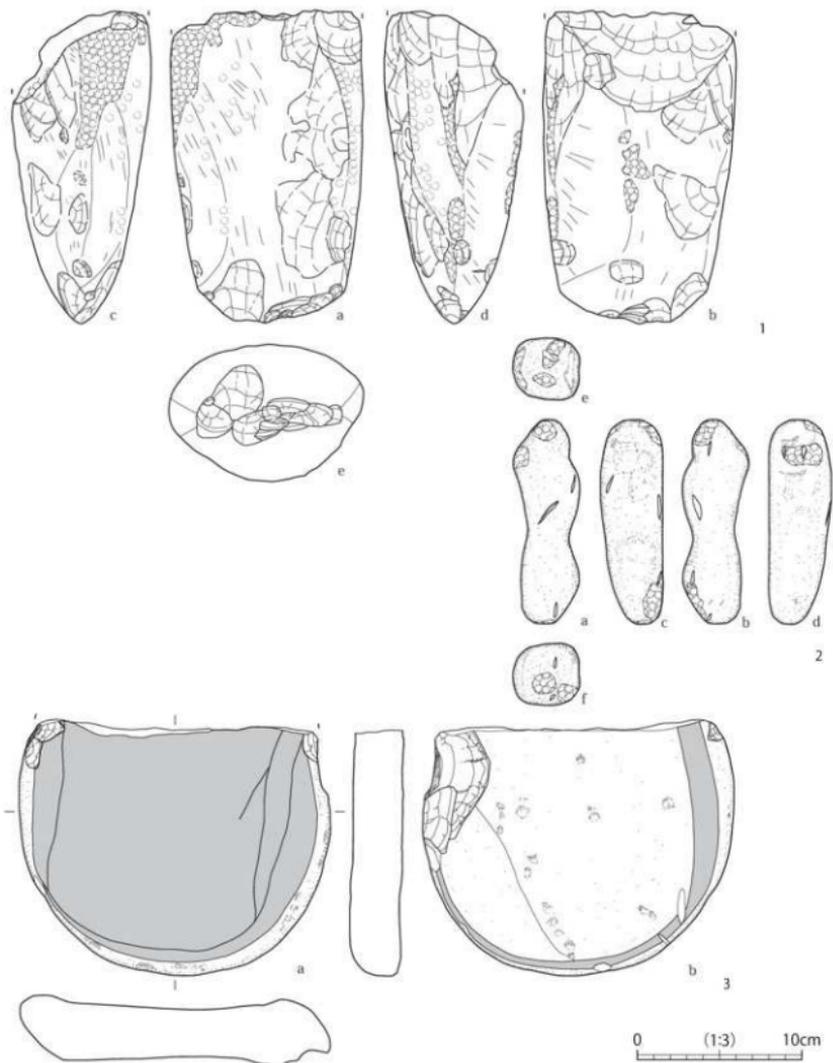
調査番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真90%
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-181	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石核	3.1	3.8	1.8	22.6	流紋岩	端部同時割れ、打面自然面	135
2	Ka-182	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石核	5	4.5	3.7	88.8	流紋岩	半割破(ブランク)、c面1箇所剥離	135
3	Ka-183	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石核	7.4	3.5	2.6	41.7	流紋岩	厚手剥片素材、断面船底形	135
4	Ka-184	第9次	下層調査	IV層	打製石器	石核	4.5	6.6	5.1	133.5	流紋岩	作業面2面、大平台自然面	135

第242図 第9次調査 (IV層) 出土石器 (5)



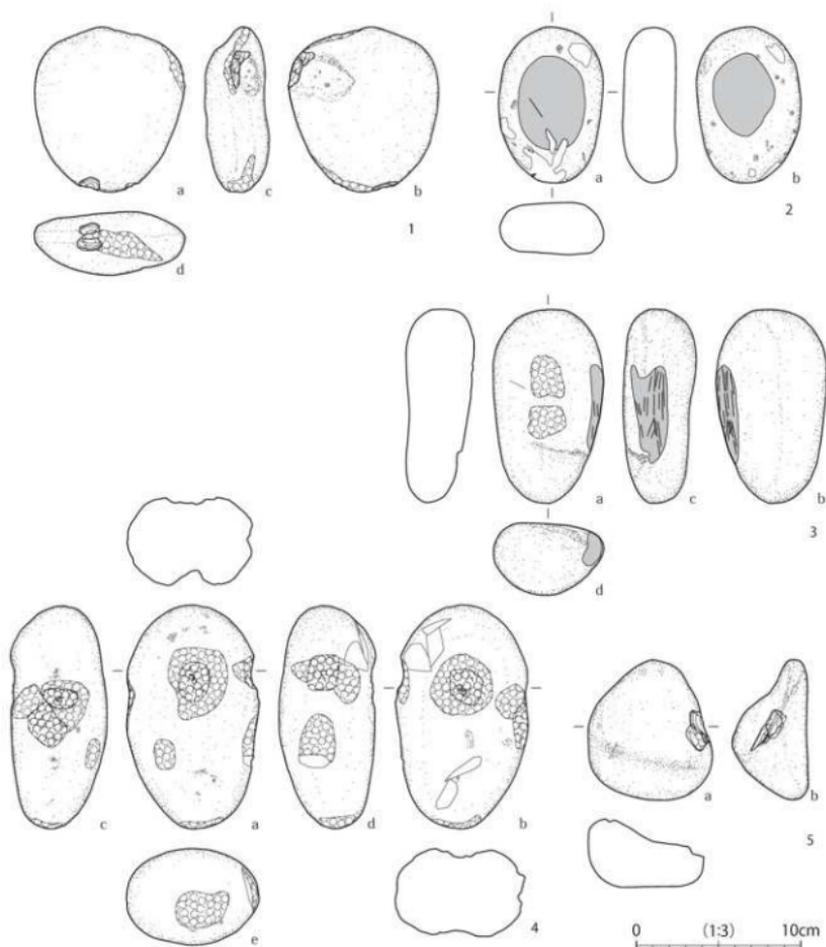
第 243 图 第 9 次調査 (IV 層) 出土石器 (6)

発掘 層位	発掘 層別	出土地点	層位	層別	器種	寸法 (cm)			石 材	備 考	
						全長	幅	厚さ			
1	Ka 185	202.2c	下層遺存	IV層	打製石片	6.1	4.9	5.0	0.87	0.8721	平打製礫素材, 打面打削面, 右側面直, 人字状断面
2	Ka 186	202.2c	下層遺存	IV層	打製石片	2.7	2.8	1.5	7.4	0.17	礫材, 打面打削面, 一面バツテテ (打削面直)
3	Ka 188	202.2c	下層遺存	IV層	打製石片	3.3	4.9	3.5	31.4	0.8271	礫中礫素材, 打面打削面
4	Ka 187	202.2c	下層遺存	IV層	打製石片	6	7.7	6.2	297.3	0.8271	平打製礫素材, 右側面直, 人字状断面



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法長(cm)			重量(g)	石材	備考	写真90版
							全長	幅	厚さ				
1	Kb-003	第9次	下層調査	IV層	磨製石器	丸型 船形石斧	9.5	5.0	4.2	298.1	灰岩	中央部付近で折損→割離、刃部割離。c-d面縦、a~d面輪状痕	136
2	Kc-075	第9次	下層調査	IV層	磨製石器	船石	12.5	3.6	3.8	270	安山岩	上下端部割(折)。a~d面輪状・溝状痕	136
3	Kc-073	第9次	下層調査	IV層	磨製石器	石皿	15.6	18.9	3.2	1028	黒角閃岩	a面全体・b面両縁部割、上部欠損	136

第244図 第9次調査(IV層)出土石器(7)



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	注量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真 掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ke-077	第9次	下層調査	IV層	礫石器	磨石	10.1	9.2	3.9	421.7	燧灰岩	c-d面縦(縦)・縦行跡の剥離	130
2	Ke-080	第9次	下層調査	IV層	礫石器	磨石	9.5	6.3	3.2	148.9	燧灰岩	a-b面縦, a面縦状面	137
3	Ke-078	第9次	下層調査	IV層	礫石器	磨石	11.9	6.7	4.4	374.3	燧灰岩	a面縦(縦), c面面縦-縦状面	137
4	Ke-079	第9次	下層調査	IV層	礫石器	磨石	13.7	8	5.9	400	燧灰岩	a→面縦(縦)・c→a-d面縦(各行跡)	137
5	Ke-076	第9次	下層調査	IV層	礫石器	磨石	7.6	8.6	4.7	324	燧灰岩	b面縦(縦)・縦行跡の剥離	137

第 246 図 第 9 次調査 (IV 層) 出土石器 (9)

第 243 図-1 はやや扁平な円盤を半分割し、その分割面を打面として剥離作業を行う。作業面は 1 面で、剥離回数は少ない。自然面が良く残る。2 は残核で、剥離作業の途中で打面を 90° 転移させている。二重パティナが認められ、加熱処理されたと考えられる。3 は円盤の上部を打ち欠き、そこを打面として剥離作業を行う。作業途中

で打面を90°転移させている。4は円盤を半分割し、その面に対して剥離作業を行う。剥離回数も少なく、自然面が良く残る。石材は第243図-2が頁岩であるほかは、全て流紋岩である。

第244図-1は磨製石斧である。各面には製作時の敲打痕や擦痕が認められる。中央部付近から基部にかけて欠損している。折れ部分と刃部に転用によると思われる剥離痕が観察される。石材は泥岩である。

第244図-2、第246図-1・4・5は敲石である。第244図-2は細長い棒状礫を用い、上下両端部に弱い敲打痕が形成されるほか、a～dの各面にはまばらに線状痕や溝状痕が認められる。第246図-1は円盤状の円礫を用い、上下端部から一側縁部の途中(c面)にかけて弱い敲打痕が形成される。一部敲打時に剥離を起こしている。4は扁平な円礫を用い、表裏両面と両側面に凹部も観察される。敲打痕はa～eの各面に形成されるが、凹部周辺を除き全体的に弱い。凹部はa～dの4面で1箇所ずつ認められ、a面のものが最も深く形成されている。5は一側縁部(b面)に敲打痕が観察されるが、敲打範囲は狭い。敲打時に剥離を起こしている。石材は第244図-2が安山岩、第246図-1・4が凝灰岩、5が安山岩である。

第244図-3は石皿である。円盤状の礫を用い、皿部は緩やかに歪む。a面はよく使い込まれ、a面の全体とb面の周縁部に磨痕が形成される。石材は凝灰岩である。

第245図-1は台石である。大型の扁平な礫を用い、a・b面には弱い敲打痕が形成されている。c面には磨痕が形成されており、上部の磨痕には溝状痕が1箇所重なる。上部は被熱している。石材は凝灰岩である。

第246図-2・3は磨石である。3は敲石の機能を併せ持ち、扁平な礫を用いている。a面には弱い敲打痕が2箇所形成され、c面には著しい磨痕と、その上には多数の線状痕が重なる。線状痕はa面に1箇所認められる。2も同様の扁平な礫を用いており、a・b両面に弱い磨痕が形成される。a面の磨面上には、線状痕が1箇所重なる。石材は2が凝灰岩、3が流紋岩である。

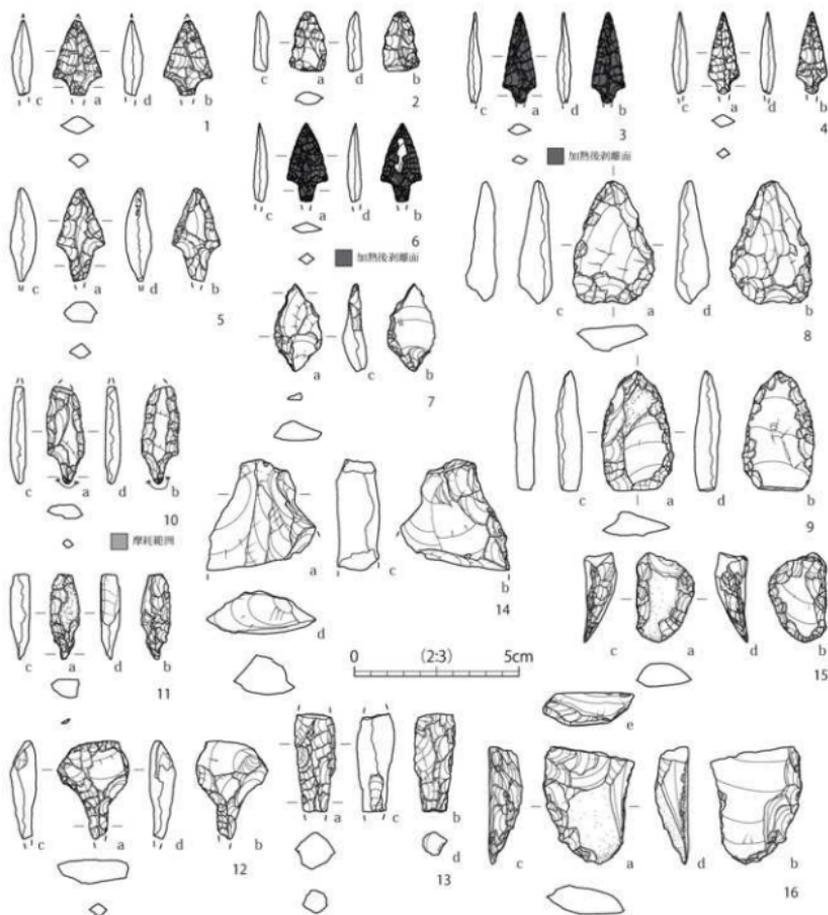
②層位不明石器(第247～256図)

石鐮9点、石錐4点、石匙1点、削器5点、二次加工のある剥片10点、板状石器等4点、石核9点、石廂丁2点、磨製石斧5点、独鈷石1点を掲載した。

第247図-1～9は石鐮である。2・7～9は未成品、ほかは有茎鐮に分類される。完成品はいずれも入念な調整にて整形されている。1は尖端部と基部を欠損し、縦断面の形状はやや「く」字状に歪む。3は基部末端を欠損し、全体が加熱処理による著しい光沢をもつ剥離面に覆われている。4～6も基部末端を欠損し、このうち5はb面の一部に素材面を残す。調整は粗く、他の石鐮よりもやや歪んだ形状を呈する。6はb面の一部に素材面を残し、全体に加熱処理による著しい光沢が認められる。未成品のうち2はa面の一部に素材面を残す。7～9はいずれもa・b両面あるいは片面に素材面を残し、二次加工や調整は7がa面の左側縁部およびb面の左側縁部中心、8がa面の周縁部とb面のほぼ大半、9がa・b面の周縁部に施され、9のa面には自然面が残る。8・9は7と比べ一回り以上大きい。石材は1が凝灰岩、2・9が頁岩、3が珪化凝灰岩、4が珪質頁岩、5が黒色頁岩、6が碧玉、7・8が流紋岩である。

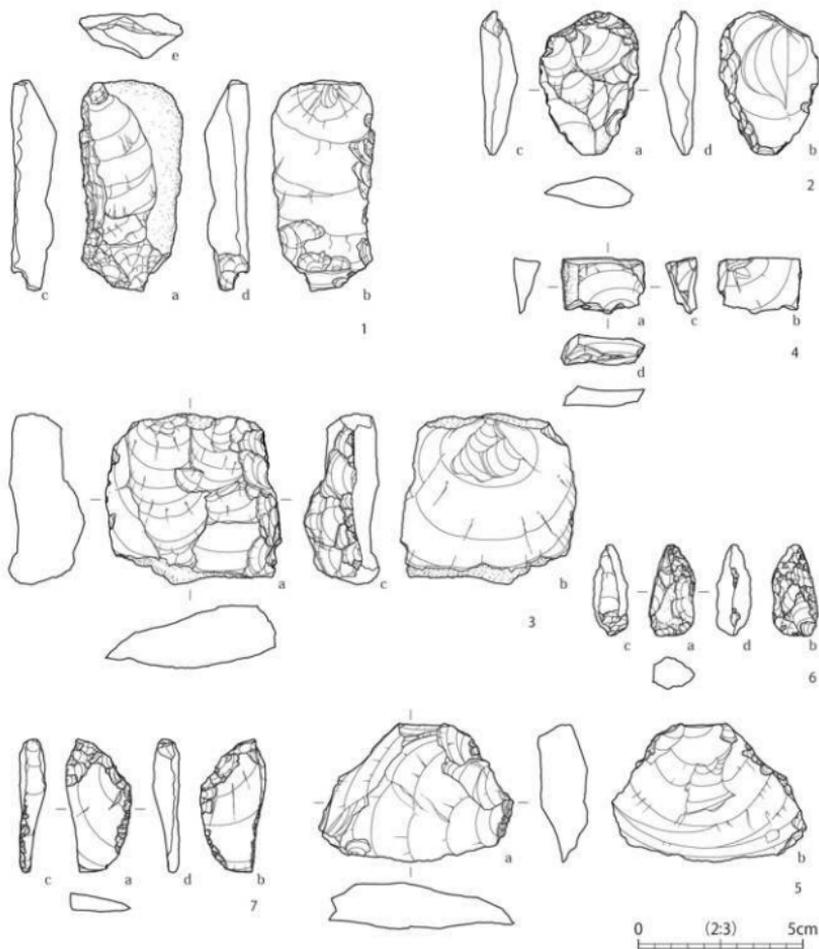
10～13は石錐である。10は基部を欠損し、b面の一部には素材面を残す。尖端部には使用による著しい摩耗が認められる。11は尖端部を中心に調整を施し、a面に自然面、b面に素材面をそれぞれ一部に残す。12は銀杏の葉状に広がる基部をもち、尖端部を欠損する。基部調整はa面の方が入念であり、b面は粗く、素材剥片の打点部を残す。尖端部調整は両面ともに入念である。13は尖端部を欠損し、厚みのある剥片素材を用いている。両側縁部に細かな調整を施す。石材は10が頁岩、11が珪化木、12が黒色頁岩、13が流紋岩である。

14は石匙である。a面の右側縁部とb面の右側縁部に二次加工を施す。製作途中で折損、廃棄されたものと考えられる。石材は頁岩である。



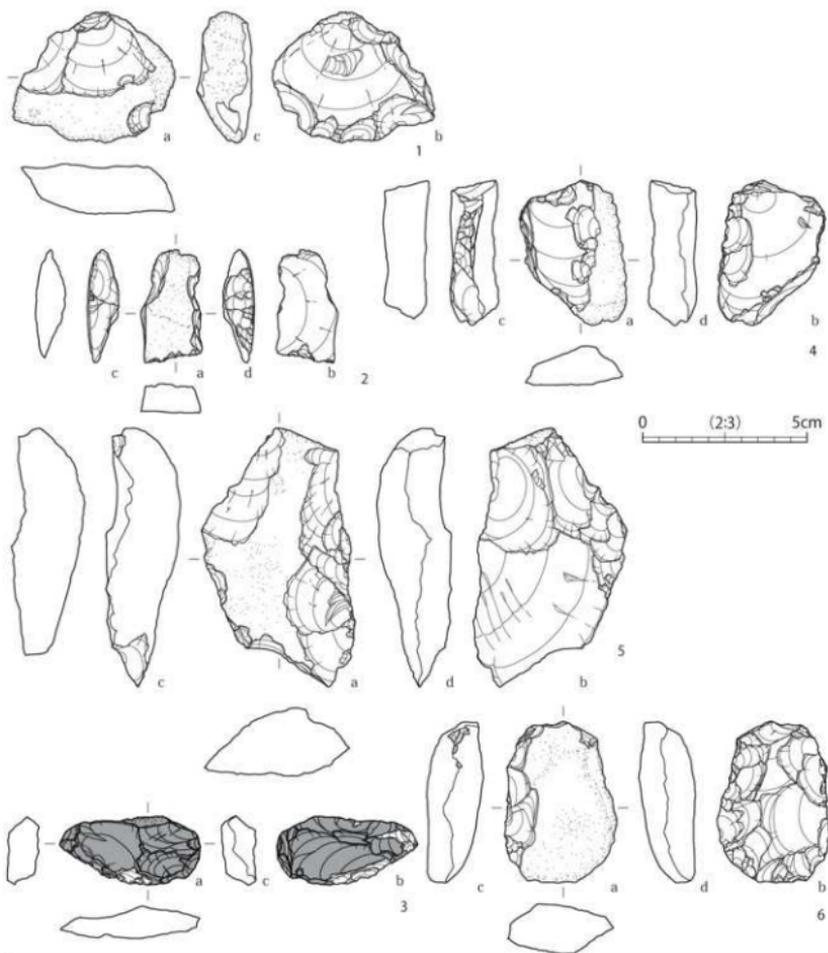
図版番号	登録番号	調査年度	調査地点	層位	種別	器種	法量(cm)		重量(g)	石材	備考	写真番号	
							全長	幅					
1	Ka-255	旧3次	299c	横出面	打製石部	石鏃	2.3	1.9	0.6	黒閃石	尖端部・基部欠損, a+b面人工急調整	138	
2	Ka-256	旧3次	S8	縦切面	打製石部	石鏃	1.8	1.1	0.5	0.6	頁岩	本底品, 人工急調整, b面一部素材面	138
3	Ka-257	旧3次	SX28	厚積土	打製石部	石鏃	2.8	1	0.4	0.7	珩化燧石	基部未端欠損, a+b面人工急調整, 加熱処理	138
4	Ka-258	旧3次	SX28	厚積土	打製石部	石鏃	2.5	0.9	0.5	0.7	珩質頁岩	基部未端欠損, a+b面人工急調整	138
5	Ka-259	旧3次	SK346	厚積土	打製石部	石鏃	2.9	1.5	0.8	1.9	黒色頁岩	基部未端欠損, a+b面人工急調整, b面一部素材面	138
6	Ka-260	旧3次	1.3c	横出面	打製石部	石鏃	2.4	1.2	0.4	0.8	頁岩	基部未端欠損, b面一部素材面, 加熱処理	138
7	Ka-271	旧3次	O3c	横出面	打製石部	石鏃	2.7	1.4	0.7	1.8	流紋岩	本底品, a+b面人工急調整, 二次加工	138
8	Ka-283	旧3次	33c	横出面	打製石部	石鏃	3.8	2.5	1	7.6	流紋岩	本底品, a面側縁部・b面人工急加工	138
9	Ka-284	旧3次	SX28	厚積土	打製石部	石鏃	3.7	2.2	0.8	5.8	頁岩	本底品, a+b面側縁部・二次加工	138
10	Ka-267	旧3次	SM396-1	厚積土	打製石部	石鏃	3	1.1	0.5	1.7	頁岩	基部欠損, b面一部素材面, 尖端部先欠損(厚積)	138
11	Ka-268	旧3次	37c	横切面	打製石部	石鏃	2.6	0.9	0.6	1.5	珩化頁岩	a面一部自然面, b面一部素材面	138
12	Ka-269	旧3次	SK301	厚積土	打製石部	石鏃	3	2.2	0.8	3.2	黒色頁岩	尖端部欠損, a面人工急調整, b面打点処理	138
13	Ka-270	旧3次	SX28	厚積土	打製石部	石鏃	3	1.2	1.2	4.2	流紋岩	尖端部欠損, 人工急調整	138
14	Ka-272	旧3次	SX28	厚積土	打製石部	石鏃	3.4	3.3	1.3	13	頁岩	本底品, a面側縁部・b面側縁部・二次加工, 製作途中欠損	138
15	Ka-273	旧3次	23c	横出面	打製石部	柄部	2.7	1.8	1	3.9	頁岩	a+b面側縁部・二次加工, a面一部自然面	138
16	Ka-274	旧3次	SK333	縦切面	打製石部	柄部	3.6	2.8	1.1	10	黒色頁岩	側縁部両面・二次加工, a面側縁部側縁部・一部自然面	138

第 247 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (1)



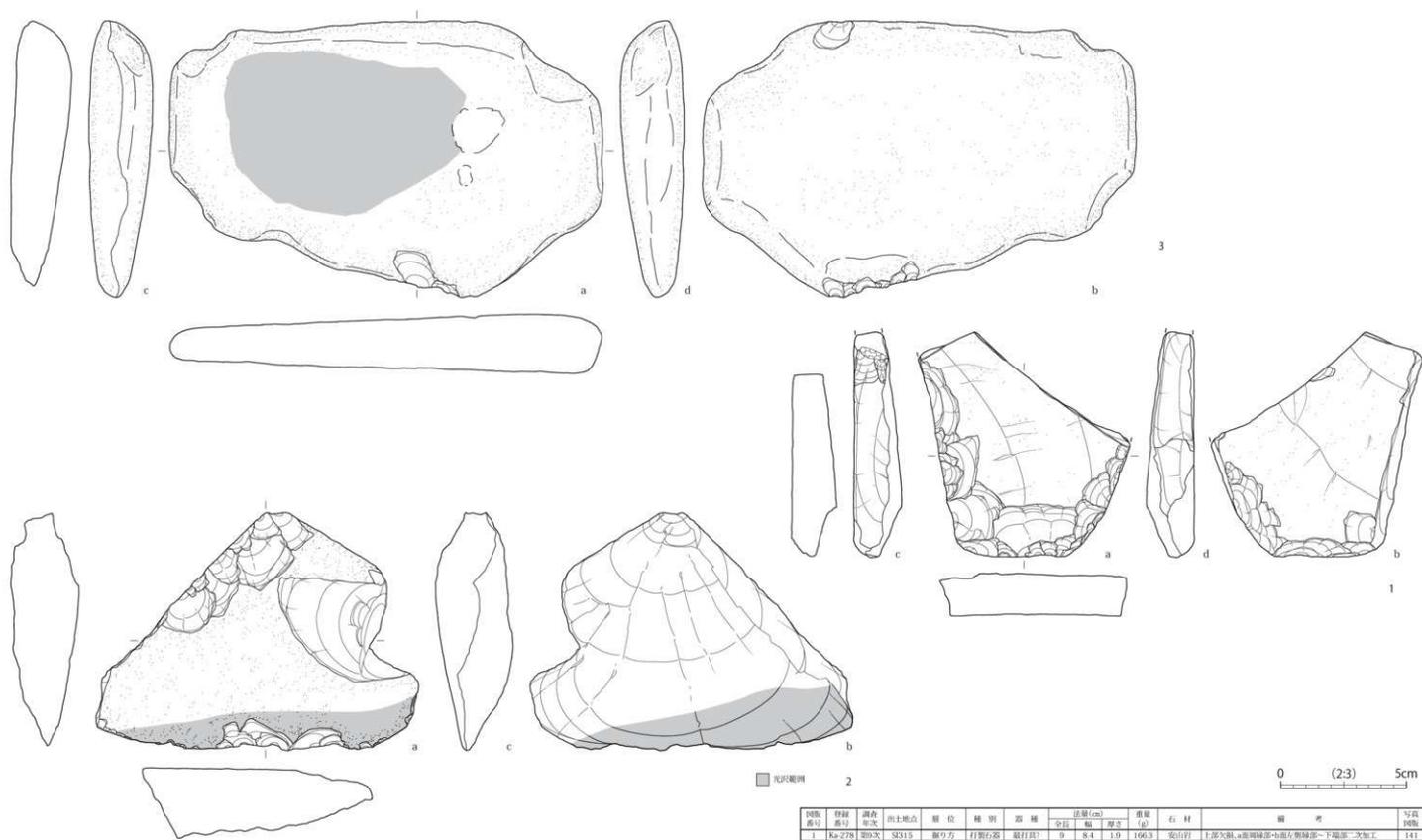
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-275	第9次	41・45G	輸出面	打製石器	削器	6.4	3.2	1.4	25.1	流紋岩	一側縁部~下端部内面二次加工, 下端部自然面	138
2	Ka-276	第9次	S1316	掘り方	打製石器	削器	4.4	3	1.1	11.6	頁岩	一側縁部内面二次加工, a面左側縁部微細削磨	139
3	Ka-277	第9次	SM393-10	埋藏土	打製石器	削器	5.2	5.3	2.3	62.1	流紋岩	a面右側縁部二次加工, 上下端部自然面	139
4	Ka-291	第9次	SM393-8	埋藏土	打製石器	二次加工のある剥片	1.7	2.6	0.9	3.1	凝灰岩	a面下端部二次加工・左側縁部自然面	139
5	Ka-292	第9次	03・04G	輸出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.2	5.9	1.6	35	流紋岩	a面右側縁部・b面内側縁部一部二次加工	138
6	Ka-293	第9次	29C	輸出面	打製石器	二次加工のある剥片	2.8	1.4	1.1	4.1	玉髓	両面入念な二次加工・縁辺調整, a面一部自然面	139
7	Ka-295	第9次	S1351	埋藏土	打製石器	二次加工のある剥片	4.1	2	0.8	5.6	黒色頁岩	上端部~一側縁部内面二次加工, b面右側縁部微細削磨	139

第 248 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (2)



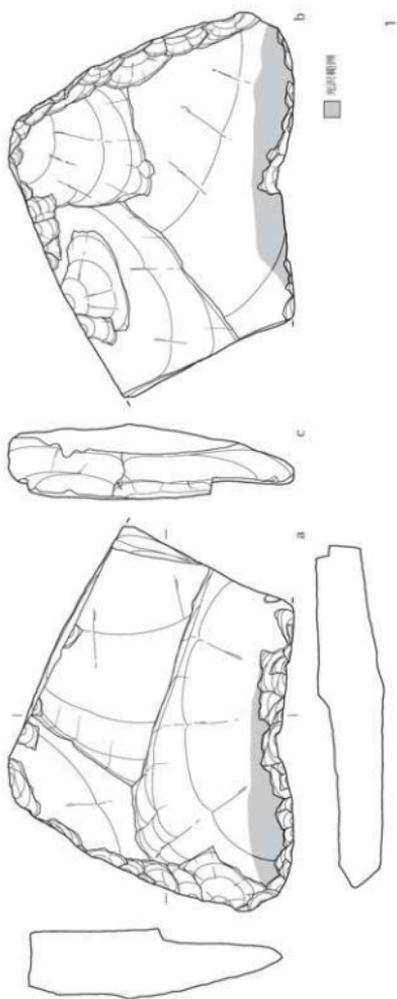
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-294	第9次	SK13	堆積土	打製石器	二次加工のある割片	4	4.9	1.7	31.3	流紋岩	a面上半部・b面側縁部二次加工(a面自然面未加工)	139
2	Ka-296	第9次	SX28	堆積土	打製石器	二次加工のある割片	3.5	1.9	1	6.3	流紋岩	a面右側縁部二次加工(加工部以外自然面),先端部微細磨削	139
3	Ka-297	第9次	SX28	堆積土	打製石器	二次加工のある割片	2.1	4.3	1.1	9.3	珧石英	a・b面下半部両面二次加工,a・b面二重「フイ」(加熱処理)	139
4	Ka-298	第9次	SM393-2	堆積土	打製石器	二次加工のある割片	4.5	3.2	1.5	19.9	流紋岩	一側縁部両面二次加工,a面右側縁部自然面	139
5	Ka-299	第9次	Z3C	礫出面	打製石器	二次加工のある割片	7.9	4.7	2.2	61.5	流紋岩	a面右側縁部・b面打点部付近二次加工(a面加工部以外自然面)	139
6	Ka-300	第9次	SK321	掘り方	打製石器	二次加工のある割片	5	3.4	1.7	28.3	流紋岩	a面打点部付近一左側縁部・b面全体二次加工(a面加工部以外自然面),b面縁部磨削	139

第249図 第9次調査(層位不明)出土石器(3)



図版番号	発掘番号	調査年次	出土地点	層位	種類	器種	長さ(m)		重量(g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅				
1	Ka-278	2009年	SE315	掘り方	打製石器	扇打片	9	8.4	1.9	166.3	灰打片。上部欠損。a面地味部→b面左側縁部→下端部二次加工。	141
2	Ka-279	2009年	SK110	床面西上	打製石器	大穿	0.6	12.8	3.1	334.5	灰打片。a面上下端部二次加工(加工部以外自然面)。片原光の端。	140
3	Ka-281	2009年	SK321	溝縁上	磨石	磨石	11.1	17.3	2.5	606.5	灰打片。a面磨。a+b面下端部磨。b面右側縁部未確認(配用?)。	141

第 250 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (4)



第 251 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (5)

図名	図例	調査 番号	調査 年度	出土地点	層位	植物	打製石部	磨製石部	部 種	質量 (g)		容積 cm^3	G 材	備 考	写真 NO.
										全長	幅				
1	18a-20a	1952.3	3A.2B	山土地区	埋藏土	打製石部	磨製石部	8.2	1.1.8	2.3	2.0	50.0	1.7	山土地区 1.7	1.03

第247図-15・16、第248図-1～3は削器である。第247図-15はa・b面の周縁部に細かな二次加工を施し、a面には自然面を残す。16は一側縁部の両面とa面上部にかけて二次加工を施す。a面の右側縁部両面には使用痕とみられる微細剥離が認められる。a面には自然面を残す。第248図-1は一側縁部から下部にかけての両面に二次加工を施す。a面の左側縁部には二次加工後、さらに細かな調整を重ねている。a面には自然面を残す。2は一側縁部の両面とa面上部部に二次加工を施し、a面上部部にはさらに細かな調整を重ねる。a面の左側縁部には微細剥離が認められ、下部には自然面を残す。3はa面の右側縁部に二次加工を施す。b面は素材のみで、二次加工は施されていない。素材の剥離は自然面を打面とし、下部にも自然面を残す。石材は第247図-15・第248図-2が頁岩、16が黒色頁岩、第248図-1・3が流紋岩である。

第248図-4～7および第249図の6点は二次加工のある剥片である。第248図-4は楔のような形状を呈する。a面の下部に二次加工を施し、左側縁部に自然面を残す。右側縁部の上部にも自然面が認められる。5はa面の右側縁部とb面の両側縁部の一部に二次加工を施す。6はa・b面のほぼ全体に入念な二次加工を施すが、a面の一部には自然面を残す。縁辺には細かな調整を施す。7は上部部から一側縁部にかけての両面に二次加工を施し、切出刀のような形状に加工されている。b面の右側縁部には微細剥離が認められる。第249図-1はa面上部とb面の周縁部に二次加工を施す。加工は粗く、特にa面の剥離面は広い。a面は自然面を直接加工している。2はa面の右側縁部に二次加工を施し、加工部以外には自然面を残す。先端部には使用によるとみられる微細剥離が認められる。3は下半部の両面に二次加工を施し、a面では下部に細かな調整を重ねる。a・b面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。4は一側縁部の両面を中心に二次加工を施し、a面の右側縁部には自然面を残す。5は大型の剥片が素材である。a面の両側縁部とb面の打点部付近に二次加工を施し、a面の加工部以外には自然面を残す。加工は粗く、それぞれの剥離面は広いものが多い。6はa面の打点部付近から左側縁部にかけて、b面の全体に二次加工を施す。b面では縁辺調整も一部認められる。b面の加工は入念であり、素材をあまり残していない。全体的に楕円形の整った形状を呈する。石材は第248図-4が凝灰岩、6が玉髄、7が黒色頁岩、第249図-3が鉄石英、その他は流紋岩である。

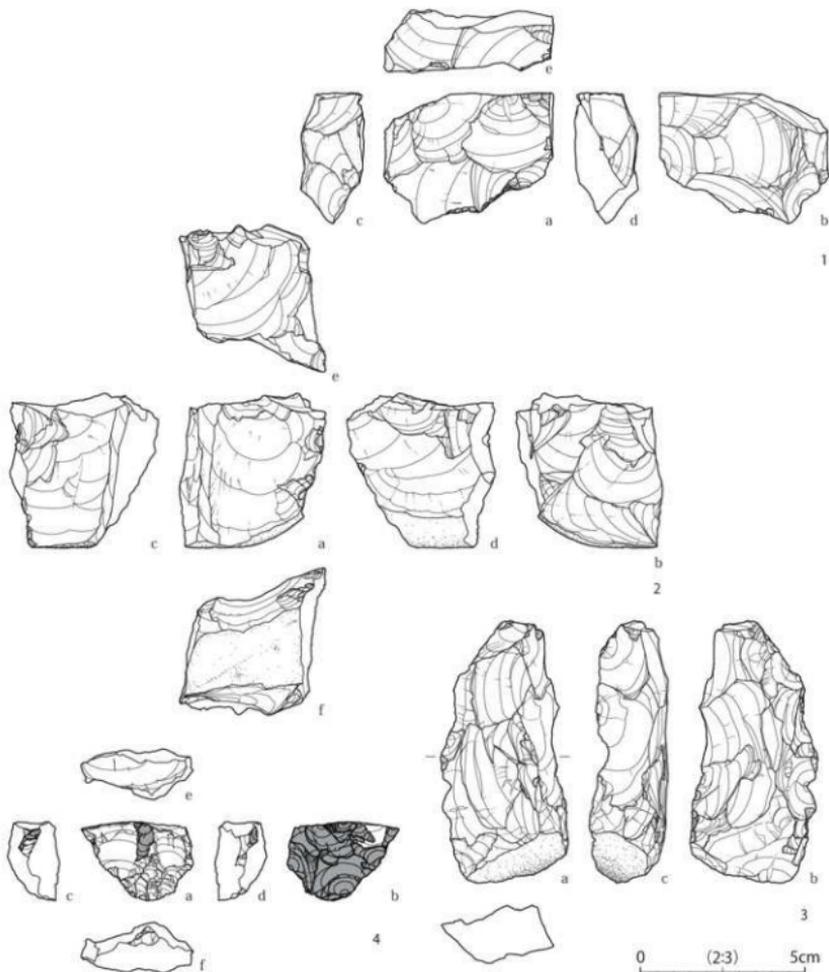
第250図-1は敲打具と思われる。上部を欠損し、a・b面に二次加工を施す。a面の加工は残存部では周縁部の全体におよび、刃部にはさらに細かな調整を重ねる。石材は安山岩である。

第250図-2は大型直縁刃器、第251図-1は板状石器である。第250図-2はa面に粗い二次加工を施し、加工部以外には自然面を残す。刃部には使用による光沢が認められる。第251図-1は1/3程を欠損し、周縁部の両面に細かい二次加工を連続して施す。刃部には使用による光沢が認められる。石材はともに安山岩である。

第250図-3は磨石である。a面には広い範囲で磨面が認められ、a・b面の下部には剥離している。石材は安山岩である。板状石器の未成品を転用している可能性もあるため打裂石器として登録し、板状石器と同時掲載した。

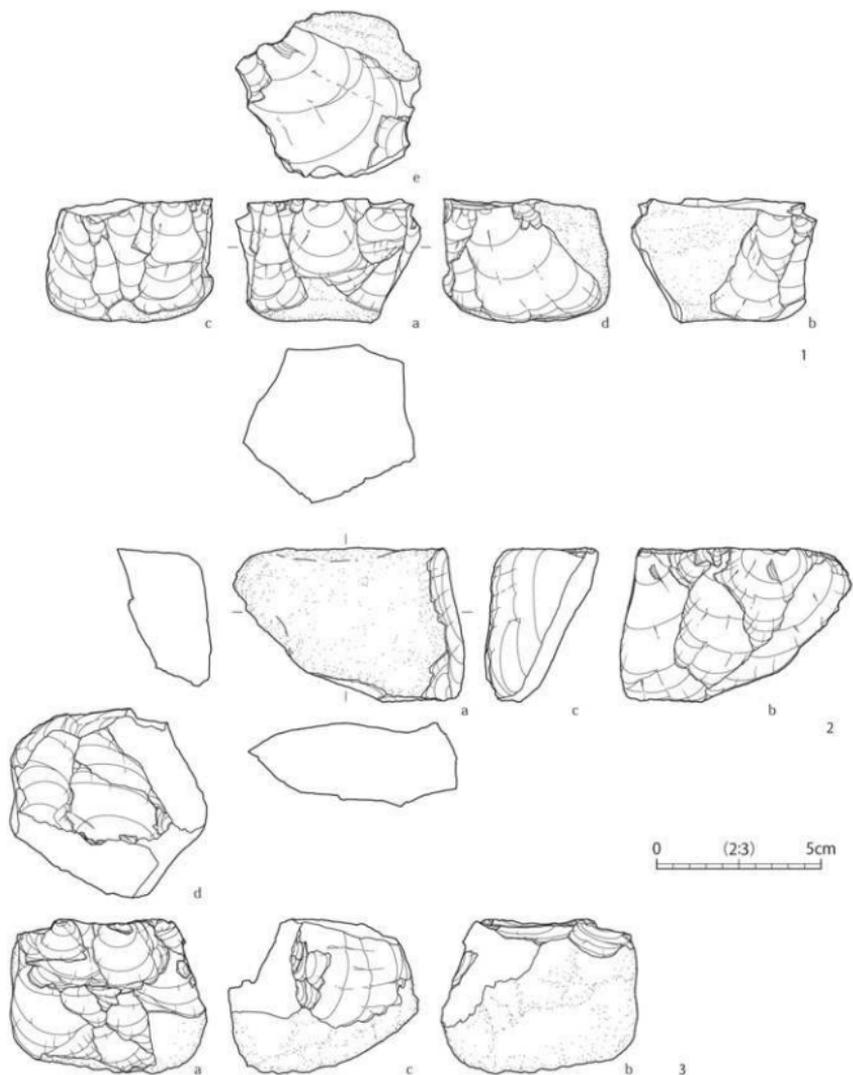
第252～254図は石核である。第252図-1は剥片素材を用い、打面転移をくり返ししながら剥離作業を行う。右側面(c面)の一部には自然面を残し、a面の下部には微細剥離が認められる。2は打面を90°転移させながら剥離作業を行い、下面(f面)には自然面を残す。c面の左側縁部下方には微細剥離が認められる。3は縦長の大型剥片素材を用い、剥離作業は短軸方向から行われる。下面には自然面を残す。4は小型の石核で、a・b面に多方向から剥離作業を行い、加熱処理による二重パティナが認められる。第253図-1は単設打面で、原石を半分割したその分割面を打面とする。剥離作業は打面の周縁部にて行うが全周はせず、b面から下面にかけて自然面を残す。2は分割面を素材とし、自然面を打面に一方からの剥離作業を行うが、作業回数は少ない。このためa面から上面にかけて自然面を残す。3は原石に剥離による打面を作出し、a面を中心に剥離作業を行う。作業途中で打面を90°転移している。打面およびa・c・d面以外は自然面となっている。第254図-1は打面を様々な角度に転移させながら剥離作業を行う。剥離作業は全ての面におよび、自然面を残さない。2は打面を様々な角度

に転移させながら剥離作業を行い、下面（e面）の一部には自然面を残す。石材は第252図-4が玉髓であるほかは、全て流紋岩である。



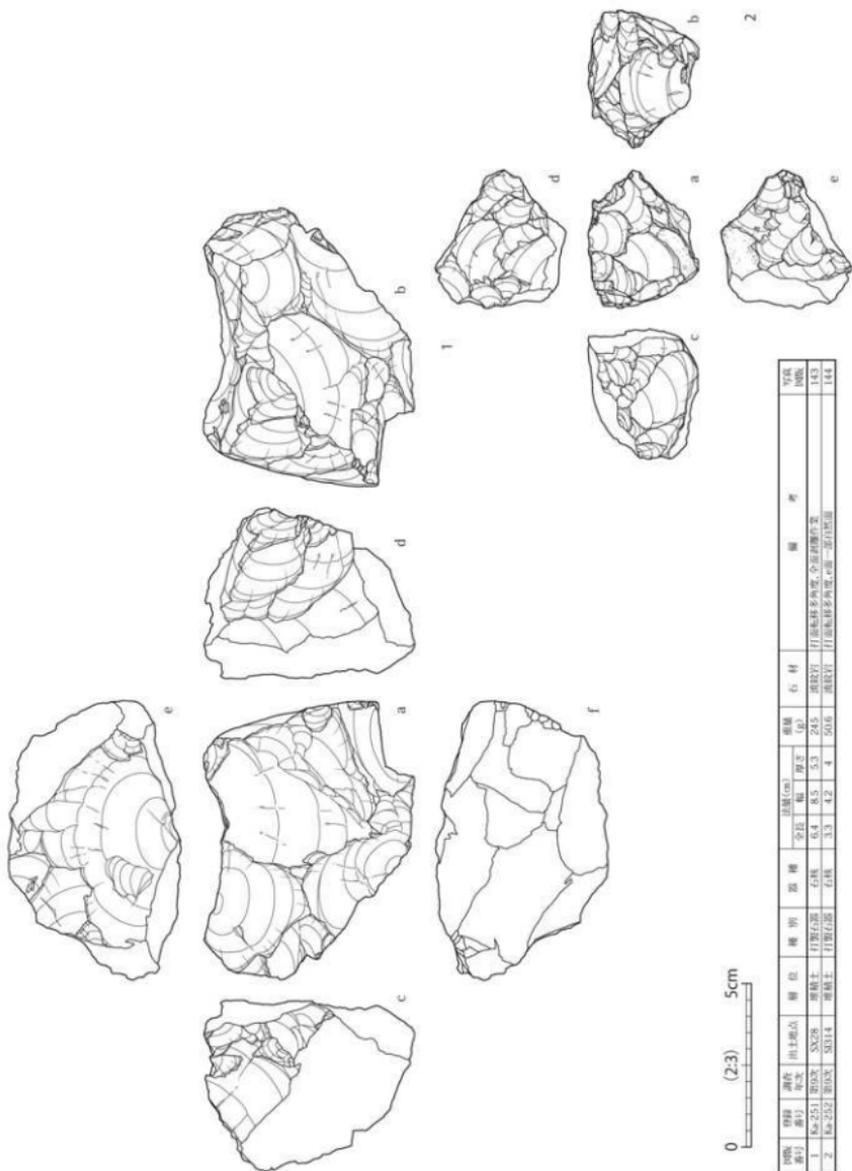
図版 番号	発掘 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-244	第9次	SI316	埋積土	打製石器	石核	4	5.1	2	36.7	流紋岩	剥片素材, 打面転移多角度, c面一部自然面, a面下端部微細剥離	141
2	Ka-245	第9次	SI314	埋積土	打製石器	石核	4.7	4.5	4.5	94	流紋岩	打面転移90°, c面自然面, c面左側下部微細剥離	142
3	Ka-246	第9次	SI345	掘り方	打製石器	石核	8	3.9	2.4	60.2	流紋岩	大型剥片素材, 剥離軸方向, 下端部自然面	142
4	Ka-248	第9次	33G	掘出面	打製石器	石核	2.4	3.4	1.6	9.8	玉髓	a-c面剥離作葉多方向, 二重パテ・イナ(加熱処理)	142

第252図 第9次調査（層位不明）出土石器（6）



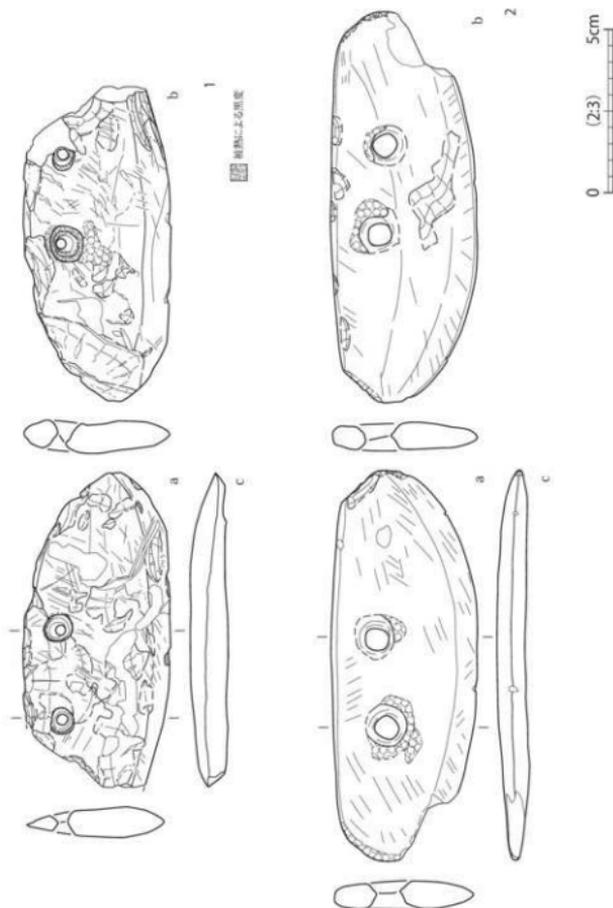
編號 器号	登錄 番号	調査 年度	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-247	第10次	SD7	埋藏土	打製石器	石核	3.8	5.6	5.1	128.6	流紋岩	早期打製(原石分断面), 打面周辺部の磨作面, b面~下面自然面	142
2	Ka-249	第10次	SK28	埋藏土	打製石器	石核	4.7	7	3.4	102.5	流紋岩	打面自然面, 磨作面一方向, a面~上面自然面	143
3	Ka-250	第10次	SK24	埋藏土	打製石器	石核	4.8	6	5.8	170.3	流紋岩	磨作面a面中心, 打面軸線90°, a+c-d面以外自然面	143

第 253 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (7)



第254図 第9次調査(層位不明)出土石器(8)

図番	標本 番号	遺体 名称	出土 地点	層位	種別	器種	石種	備考
1	80-251 8025X	300X	山土地区	埋藏土	打製石部	石核	全長 6.4 幅 8.5 厚さ 24.5	打製体跡多角型、全周打製片堂
2	80-252 8025X	3314	山土地区	埋藏土	打製石部	石核	全長 3.3 幅 4.2 厚さ 50.0	打製体跡多角型、一部打製



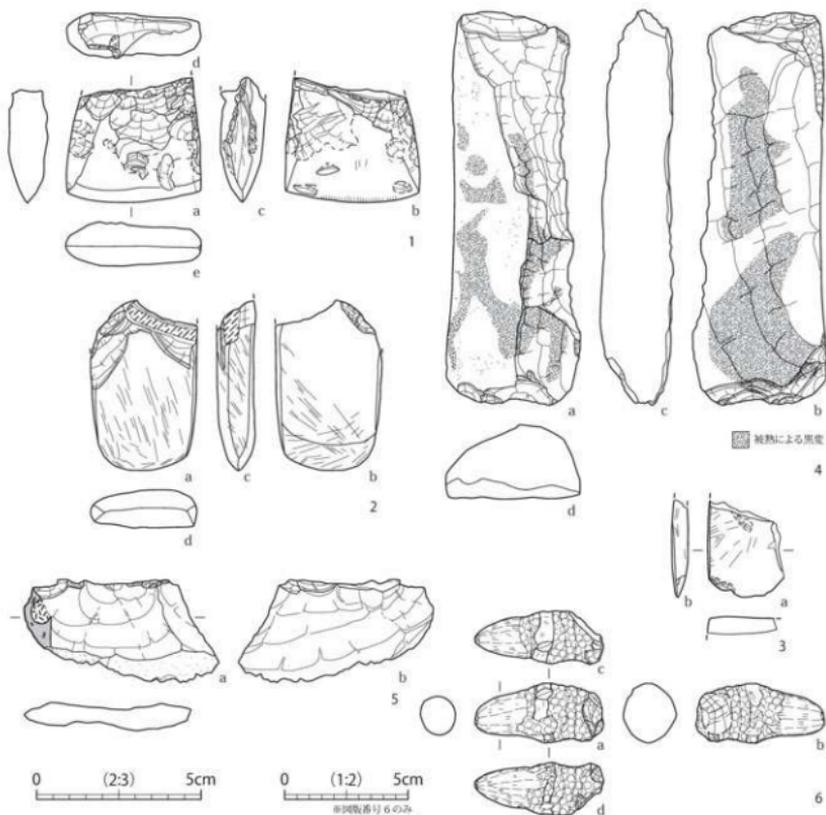
第 255 図 第 9 次調査（層位不明）出土石器（9）

第 255 図-1・2 は石庖丁である。1 は一部を欠損する。板状節理によって得られた素材の周縁部を剥離・敲打し、その後研磨整形される。紐孔は 2 箇所あり、紐擦れの痕跡が認められる。孔部分は両面からの回転穿孔である。2 も同様に剥離・敲打・研磨によって製作され、やはり紐孔は 2 箇所ある。孔は両面を敲打後、回転穿孔にて穿たれる。石材は 1 が片岩、2 が砂岩とみられる。

第 256 図-1～5 は磨製石斧で、4・5 は未完成品である。他の 3 点は刃部のみが残存する。1 は上半部を欠損後、折れ部分からの剥離が行われる。剥離は一部刃部にまで達している。2 は扁平片刃石斧である。上部は欠損後、折れ部分からの剥離が行われる。残存する各面には、研磨時の多数の線状痕が認められる。3 は小型品で、各残存面

発掘 層位	発掘 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	材質	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考	図 番
1	Kb-009	昭和33	S310	不明	石斧	片岩	片岩	37.2	4.5	9.0	1.1	板状節理による剥離・敲打・研磨による。紐孔は2箇所あり。回転穿孔による。	143
2	Kb-010	昭和33	S321	不明	石斧	砂岩	砂岩	71.4	4.5	11.9	1.1	板状節理による剥離・敲打・研磨による。紐孔は2箇所あり。回転穿孔による。	144

には弱い線状痕が認められる。4は大型の横長剥片を剥離後、上下端部の両面とa面の右側面に粗い二次加工を施す。被熱のため、部分的に黒変する。5はa面の右側縁部に僅かに磨面が残存する。同面の下端部には自然面が認められ、未成品の破片であると思われる。石材は1・3が黒色片岩、2が凝灰岩、3が片岩、5が安山岩とみられる。6は独站石である。全面を敲打で粗く整形し、その後研磨する。石材は凝灰岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Kb-002	第9次	S1316	P10堆積土	磨製石器	扁平片状石斧	(3.9)	(4.1)	(1.4)	29.3	黒色片岩	片部、折削→磨製,a-c面磨状痕	144
2	Kb-005	第9次	S1320	堆積土	磨製石器	扁平片状石斧	(5.2)	(3.2)	(1.3)	15.3	凝灰岩	片部、折削→磨製,a-c面磨状痕	144
3	Kb-006	第9次	SM303-8	堆積土	磨製石器	扁平片状石斧	(3)	(2.3)	(0.5)	3.7	黒色片岩	片部破片,a,b面磨状痕	144
4	Kb-004	第9次	S1321	方下層遺部	磨製石器	石斧未成品	12.1	4.1	2.2	129.1	片岩	a面右側縁部・上下端部二次加工、部分的に黒変(被熱)	144
5	Kb-007	第9次	S1268	堆積土	磨製石器	石斧破片	(3.2)	(6)	(0.9)	12.8	安山岩	未成品破片(欠片),a面右側縁部磨面残存・下端部自然面	145
6	Kd-009	第9次	S1319	層の方	独站石	独站石	(5.2)	2.5	2.1	29.2	凝灰岩	1/3程度残存,全面敲打→研磨整形	145

第 256 図 第 9 次調査 (層位不明) 出土石器 (10)

接合資料 (第 257～276 図)

接合資料については調査年次をまたぐ接合例や、包含層出土の石器と遺構堆積土出土の石器どうしが接合するなどの例があり、ここに一括して報告する。70 点を掲載し、このうち接合資料 19～28 は、基本層Ⅳ層出土石器との接合関係をもつ資料である。中でも接合資料 19 (第 263 図-1) と接合資料 20 (同図-2) は、第 2 次調査 (2001 年度実施) の出土石器との接合関係をもつ。なお第 259 図は、基本層Ⅳ層中の石器出土状況のみを示した。

【接合資料 1】 (第 257 図-1)

剥片 4 点の接合資料である (Ka-1～4)。同一方向から剥離され、Ka-1 の観察から打面を 180° 転移させていることが判る。Ka-1～3 は第 6 次調査区 04・06 グリッド、Ka-4 は SI286 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 2】 (第 257 図-2)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-5・6)。打面は自然面を利用しており、同一方向から剥離される。Ka-5 は第 6 次調査区 04 グリッド、Ka-6 は SI287 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 3】 (第 257 図-3)

二次加工のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-7・Ka-8)。同一方向から剥離され、a 面は全て自然面である。Ka-7 は第 6 次調査区 07 グリッド、Ka-8 は SD205 堆積土から出土した。石材は凝灰岩である。

【接合資料 4】 (第 257 図-4)

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-9・Ka-10)。同時割れを起こしたものと考えられる。a 面には自然面を残す。Ka-9 は第 6 次調査区 03 グリッド、Ka-10 は SI279 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 5】 (第 258 図-1)

剥片 3 点の接合資料である (Ka-11～13)。Ka-11・13 は同時割れである。Ka-11 は SI279 床面、Ka-12 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-13 は SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 6】 (第 258 図-2)

剥片と碎片の接合資料である (Ka-14・15)。同一方向の加撃で剥離されたものと考えられる。a 面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-14 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-15 は SI283 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 7】 (第 258 図-3)

石核と剥片の接合資料である (Ka-16・17)。Ka-16 はやや大型の剥片を素材とした石核であり、右側縁部に Ka-17 が接合する。a 面には広い範囲で自然面を残す。Ka-16 は SI279 周溝堆積土、ka-17 は第 6 次調査区 06 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

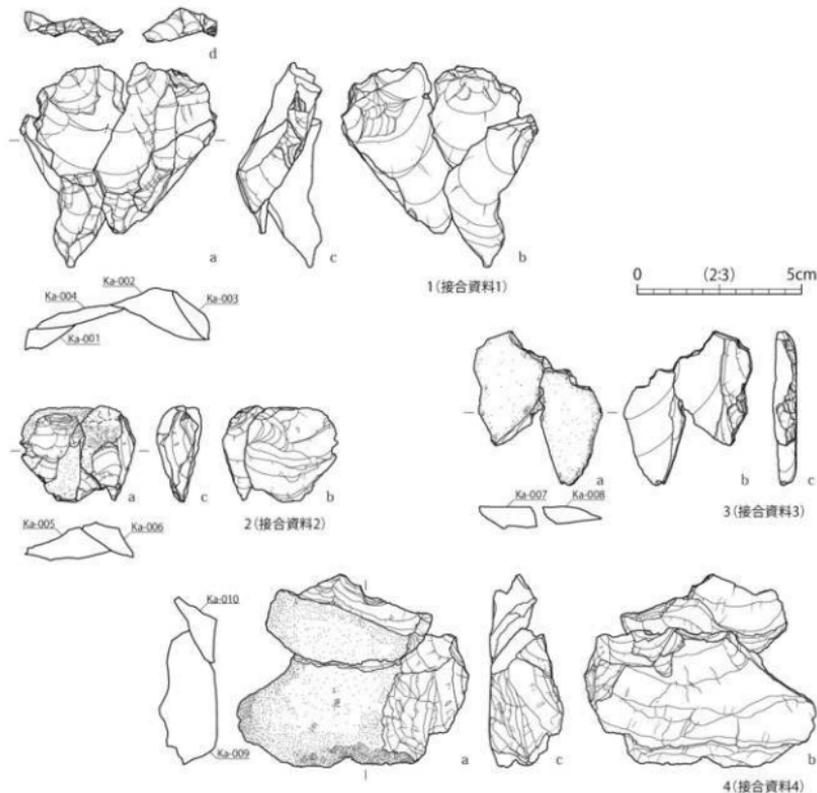
【接合資料 8】 (第 260 図-1)

剥片 4 点の接合資料である (Ka-18～21)。Ka-19～21 は同時割れを起こしたものと考えられ、Ka-18・20・21 は自然面を残す。Ka-18 は第 6 次調査区 03 グリッド、Ka-19～21 は SI281・287・289 堆積土から出土した。

石材は流紋岩である。

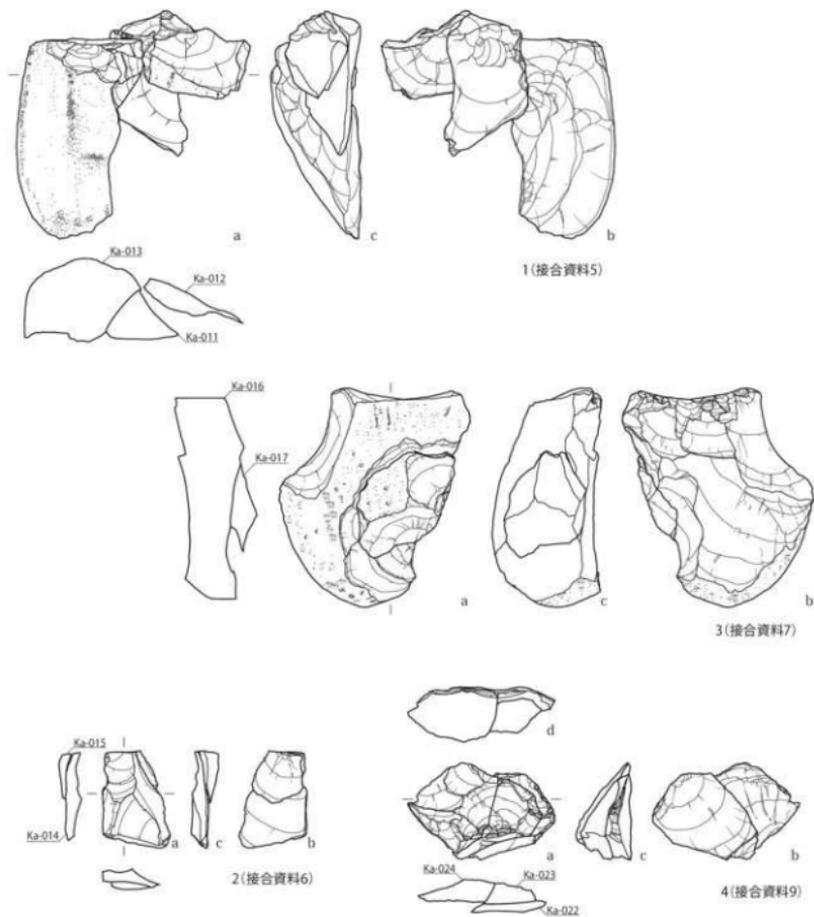
【接合資料9】(第258図-4)

剥片3点の接合資料である(Ka-22~24)。a面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っているのが



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-001	第6次	O4G	輸出面	打製石器	剥片	4.7	2.9	0.7	7.3	流紋岩	接合資料1 剥片4点接合、剥離同一方向、180°打面転移	145
	Ka-002	第6次	O4G	輸出面	打製石器	剥片	5.3	3.8	1.3	14.2			
	Ka-003	第6次	O6G	輸出面	打製石器	剥片	2.8	2.5	0.5	3			
2	Ka-004	第6次	S1286	母礫土	打製石器	剥片	3.7	3	0.6	5.6	流紋岩	接合資料2 剥片2点接合、剥離同一方向、打面自然面利用	145
	Ka-005	第6次	O4C	輸出面	打製石器	剥片	2.9	2.8	1.2	7.2			
	Ka-006	第6次	S1287	掘り方	打製石器	剥片	2.9	1.6	0.8	2.9			
3	Ka-007	第6次	O7G	輸出面	打製石器	二次加工のある剥片	3.5	2.3	0.8	5.5	流紋岩	接合資料3 二次加工のある剥片・剥片接合、剥離同一方向、a面全体自然面残存	145
	Ka-008	第6次	SD205	母礫土	打製石器	剥片	3.6	1.9	0.6	3.8			
	Ka-009	第6次	O3G	輸出面	打製石器	剥片	4.3	7	1.8	50.3			
4	Ka-010	第6次	S1279	母礫土	打製石器	微細剥離のある剥片	2.7	5	1.3	10.1	流紋岩	接合資料4 剥片・母礫剥離のある剥片接合、同時剥離、a面自然面残存	145

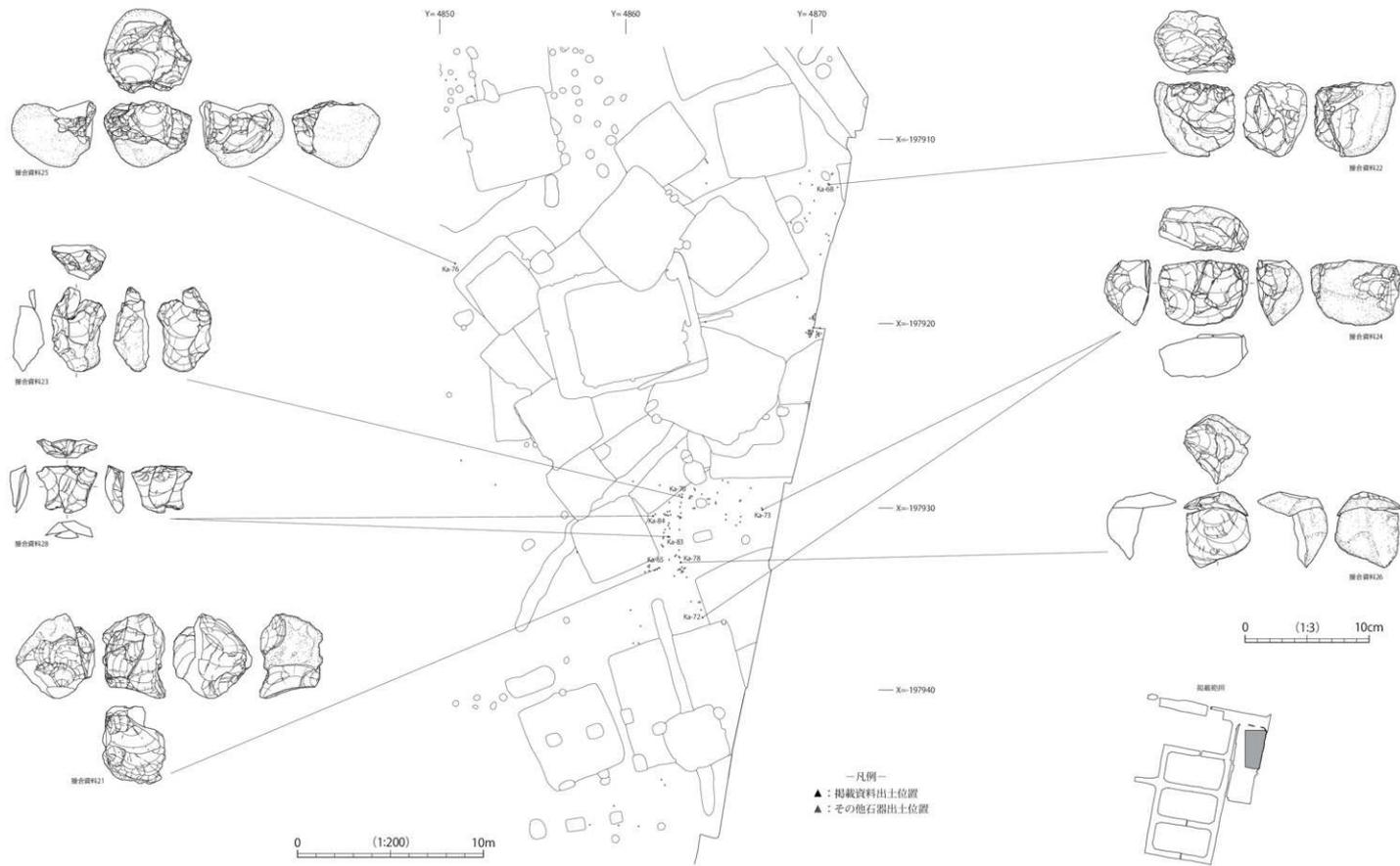
第257図 接合資料1~4



0 (2:3) 5cm

回収番号	登録番号	調査年度	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-011	旧6次	SK279	床面直上	打製石器	刮片	4.4	2.6	1.8	11.7	流紋岩	接合資料5 刮片3点資料, Ka-011+013同層別削	145
	Ka-012	旧6次	06G	検出面	打製石器	刮片	2.7	3.3	0.8	6.8			
	Ka-013	旧6次	SK287	堆積土	打製石器	刮片	6.2	3.9	2.1	50.1			
2	Ka-014	旧6次	06G	検出面	打製石器	刮片	3	2.1	0.5	2.8	流紋岩	接合資料6 刮片+破片接合, 剥離同一方向, 打面転移有	145
	Ka-015	旧6次	SK283	堆積土	打製石器	刮片	1.6	1.7	0.4	0.7			
3	Ka-016	旧6次	SK279	堆積土	打製石器	石核	6.7	5.9	3.3	90.3	流紋岩	接合資料7 石核+刮片接合, 中々大型剥片素材石核, a面自然面残存	146
	Ka-017	旧6次	06G	検出面	打製石器	刮片	3.3	3	0.8	9.6			
	Ka-022	旧6次	SK281	堆積土	打製石器	刮片	2.6	3.2	0.7	4.6			
4	Ka-023	旧6次	06G	検出面	打製石器	刮片	2.4	1.8	0.8	3.2	流紋岩	接合資料9 刮片3点接合, 打面転移多角度	146
	Ka-024	旧6次	SK287	堆積土	打製石器	刮片	2.8	2.7	0.8	4.7			

第258図 接合資料5～7・9



第 259 図 接合資料 (IV層) 出土状況図

判る。Ka-22はSI281堆積土、Ka-23は第6次調査区06グリッド、Ka-24はSI287堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料10】(第260図-2)

石核と剥片の接合資料である(Ka-25・26)。同一方向から剥離され、Ka-25は一部に自然面を残す。Ka-25は第6次調査区07グリッド、Ka-26はSI276-P7堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料11】(第260図-3)

剥片2点、微細剥離のある剥片1点の接合資料である(Ka-27~29)。同一方向から剥離され、剥離工程はKa-28→Ka-27→Ka-29の順である。いずれも自然面を残す。Ka-27・28はSI283堆積土、Ka-29は第6次調査区04グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料12】(第261図-1)

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である(Ka-30・31)。同一剥片の折れ面で接合する。Ka-31は折れ面からa・b両面に二次加工を施す。上部には微細剥離も認められる。第6次調査区03・04グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料13】(第261図-2)

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である(Ka-32・33)。ともに自然面を残し、剥離面の観察から、打面を90°ずつ転移させていることが判る。ともに第6次調査区04グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料14】(第261図-3)

剥片3点、二次加工のある剥片1点の接合資料である(Ka-34~37)。同一方向から剥離される。Ka-36の両側縁部には二次加工が認められ、Ka-35の一部には自然面が残る。Ka-34はSI283堆積土、Ka-35は第6次調査区06グリッド、Ka-36・37はSI289掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料15】(第262図-1)

剥片2点の接合資料である(Ka-38・39)。同一剥片が、剥離時の衝撃によって同時割れを起こしたものと考えられる。打面は自然面打面である。第6次調査区04・06グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料16】(第262図-2)

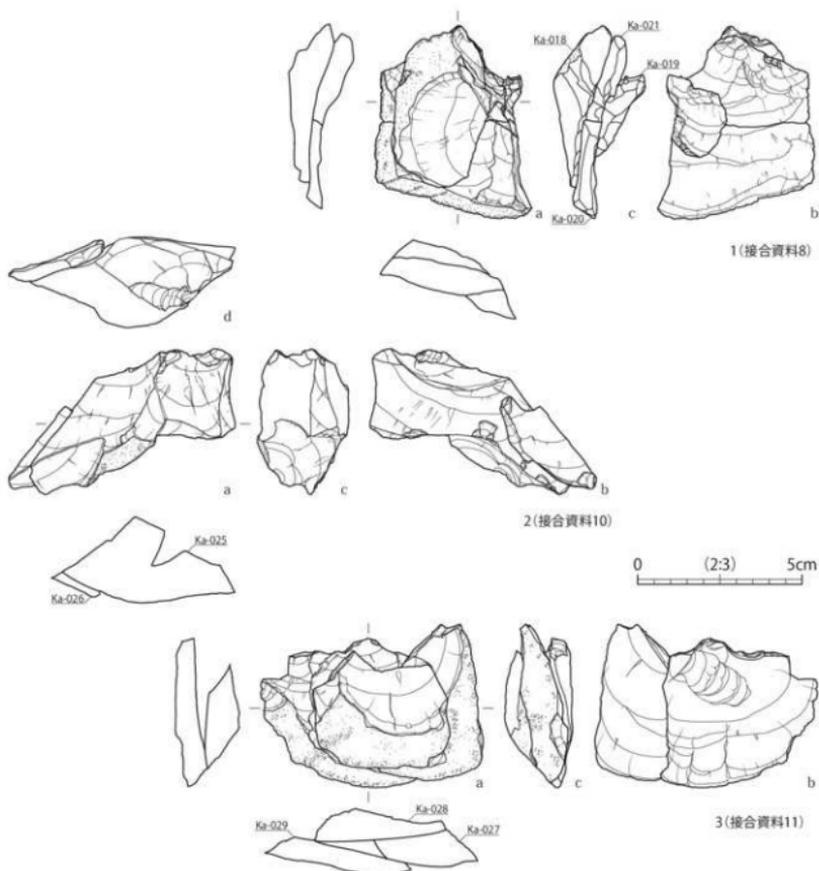
剥片2点の接合資料である(Ka-40・41)。2点とも一部に自然面を残す。a面の観察から、180°の打面転移が考えられる。Ka-40はSM378-2堆積土、Ka-41は第6次調査区06グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料17】(第262図-3)

剥片3点の接合資料である(Ka-42~44)。剥離工程はKa-42を剥離したのち、打面を90°転移させてKa-44→Ka-43の順で剥離している。Ka-42・43には一部に自然面が残る。Ka-42は第6次調査区06グリッド、Ka-43はSI287堆積土、Ka-44はSI289堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

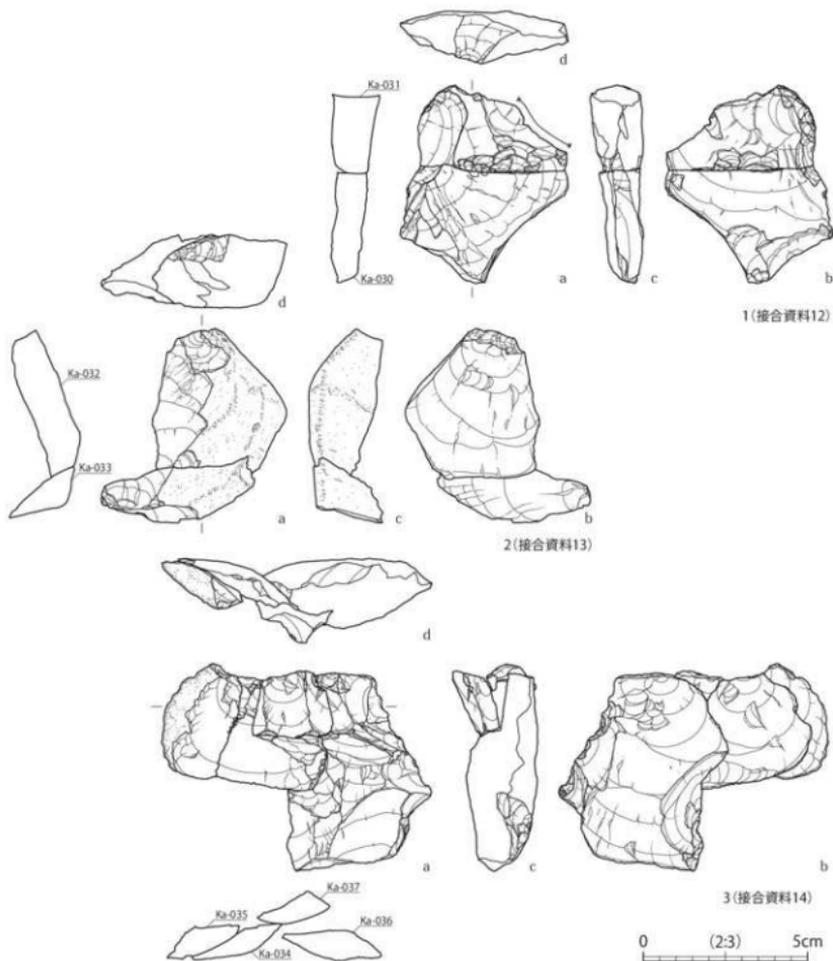
【接合資料 18】(第 262 図-4)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-45・46)。同一方向から剥離されるが、打面側がともに折れているため、打面



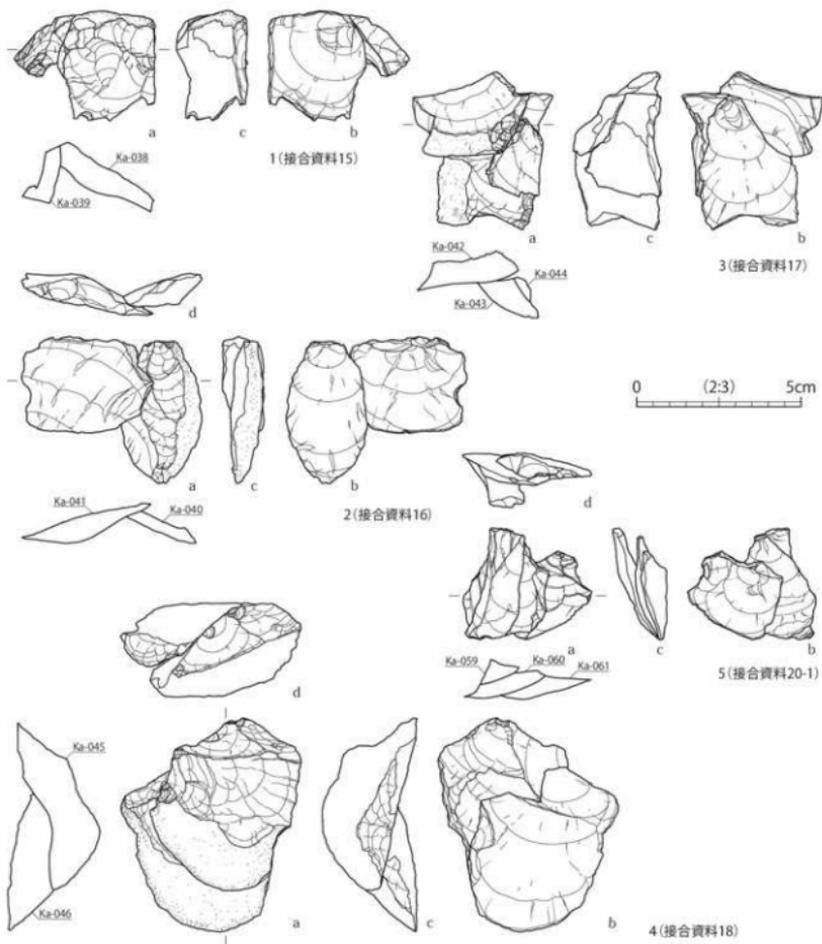
回収番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石 材	備 考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-018	第6次	03G	検出面	打製石器	剥片	4.9	3	1.1	11.5	流紋岩	接合資料8 剥片4点接合, Ka-019~021(同時剥片), Ka-018-020-021 自然面残存	146
	Ka-019	第6次	SE281	堆積土	打製石器	剥片	2.5	1.8	0.8	2.4			
	Ka-020	第6次	SE287	堆積土	打製石器	剥片	3	4.8	0.8	10.1			
	Ka-021	第6次	SE280	堆積土	打製石器	剥片	2.8	3.9	0.8	8.7			
2	Ka-025	第6次	07C	検出面	打製石器	小槌	4.5	6.2	2.8	38.5	流紋岩	接合資料10 右縁・剥片接合, 剥離同一方向, Ka-025一部自然面残存	146
	Ka-026	第6次	SE276	P7堆積土	打製石器	剥片	2.8	3	0.4	2.5			
	Ka-027	第6次	SE283	堆積土上層	打製石器	剥片	4.3	3.3	1.1	16.7			
	Ka-028	第6次	SE283	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	3.6	4.1	1	14.3			
3	Ka-029	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	4.5	4.7	0.7	18.2	流紋岩	接合資料11 剥片2点・微細剥離のある剥片1点接合, 剥離同一方向, 剥離工程Ka-028→Ka-027→Ka-029, 全て自然面残存	146

第 260 図 接合資料 8・10・11



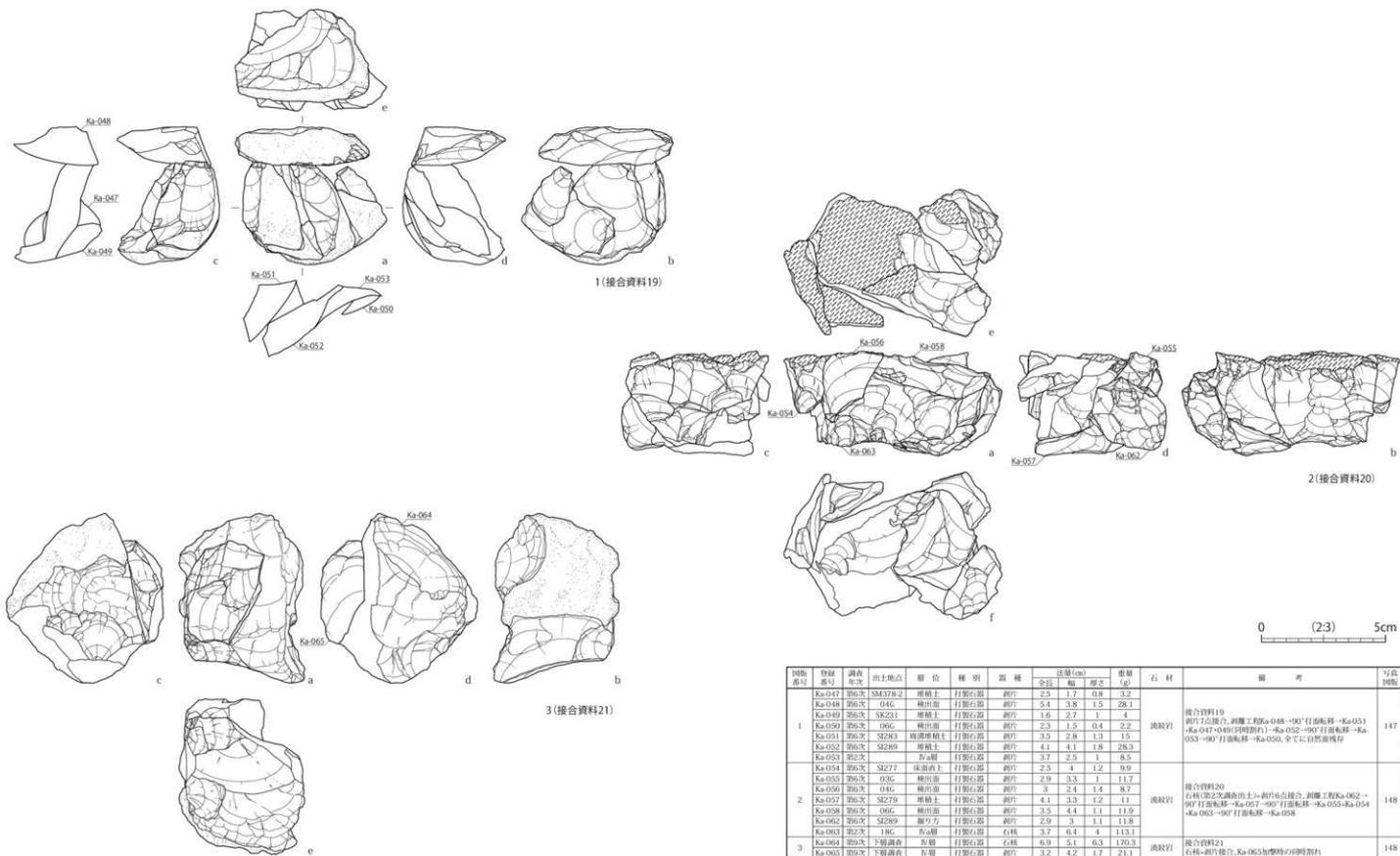
図版番号	器物番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法原(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-030	第6次	O3G	検出面	打製石器	削片	3.6	4.5	1	14.9	接合資料12 削片・二次加工のある削片接合、同一削片の折れ面で接合、Ka-033折れ面からa-b向面に二次加工痕、上部に微細刻線	146	
	Ka-031	第6次	O4G	検出面	打製石器	二次加工のある削片	2.7	5.1	1.4	18.6			
2	Ka-032	第6次	O4G	検出面	打製石器	二次加工のある削片	4.6	4.1	2.2	33.2	接合資料13 削片・二次加工のある削片接合、90°方向転換、ともに自然面残存	146	
	Ka-033	第6次	O4G	検出面	打製石器	削片	4.7	2.1	1	9			
	Ka-034	第6次	SI283	摩耗土上層	打製石器	削片	3.6	4.1	0.8	10.8			
3	Ka-035	第6次	O6G	検出面	打製石器	削片	3.5	2.4	0.8	5.7	接合資料14 削片3点・二次加工のある削片1点接合、剥離同一方向、Ka-036向側縁部二次加工、Ka-035一部自然面残存	147	
	Ka-036	第6次	SI289	掘り方	打製石器	削片	6.1	5.2	2.2	50			
	Ka-037	第6次	SI289	掘り方	打製石器	削片	2	2.4	0.8	3.4			

第 261 図 接合資料 12～14



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-038	206次	O46	検出面	打製石器	刮片	3.3	3	0.8	9.5	流紋岩 接合資料15 刮片2点接合、同一面内の同時期れ、打面自然面利用	146	
	Ka-039	206次	O66	検出面	打製石器	刮片	2.3	1.2	0.8	2.9			
2	Ka-040	206次	SM578-2	埴輪土	打製石器	刮片	4.3	3	0.7	7	流紋岩 接合資料16 刮片2点接合、180°打面転移、ともに一部自然面残存	147	
	Ka-041	206次	O66	検出面	打製石器	刮片	3	4	1	8.8			
3	Ka-042	206次	O66	検出面	打製石器	刮片	2.6	3.5	1.1	8.7	流紋岩 接合資料17 刮片3点接合、剥離同一方向、剥離工程Ka-042→90°打面転移→Ka-044→Ka-043、Ka-042-043一部自然面残存	147	
	Ka-043	206次	SI287	埴輪土	打製石器	刮片	4.1	1.8	1	9.5			
	Ka-044	206次	SI289	埴輪土	打製石器	刮片	3.2	2.3	1.3	4.6			
4	Ka-045	206次	O46	検出面	打製石器	刮片	5.3	4.6	1.9	37.3	流紋岩 接合資料18 刮片2点接合、剥離同一方向、ともに打点部附れ自然面残存	147	
	Ka-046	206次	SI279	周溝埴輪土	打製石器	刮片	5	4.6	1.4	29.5			
5	Ka-059	206次	O66	検出面	打製石器	刮片	3.4	1.8	0.7	2.5	流紋岩 接合資料20-1 刮片3点接合、剥離ほぼ同一方向、接合資料20同一母岩	147	
	Ka-060	206次	SI276	埴輪土	打製石器	刮片	3.1	2.5	0.6	3.8			
	Ka-061	206次	SI287	埴輪土	打製石器	刮片	2.3	2.7	0.6	3.3			

第 262 図 接合資料 15 ~ 18・20-1



第 263 図 接合資料 19～21

の状態は不明である。2点とも自然面が残る。Ka-45は第6次調査区04グリッド、Ka-46はSI279周溝から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 19】(第 263 図-1)

剥片7点の接合資料である(Ka-47～53)。うち1点は第2次調査で出土したものである。いずれの剥片も自然面を残す。剥離工程はKa-48を剥離したのちに打面を90°転移させてKa-51、同時割れしたKa-47・49、Ka-52を剥離する。再び打面を90°転移、Ka-53を剥離したのちに90°戻してKa-50を剥離する。Ka-47はSM378-2堆積土、Ka-48・50は第6次調査区04・06グリッド、Ka-49はSK231堆積土、Ka-51はSI283周溝堆積土、Ka-52はSI289堆積土、Ka-53は第2次調査区基本層IVa層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 20】(第 263 図-2)

石核と剥片6点の接合資料である(Ka-54～58・62・63)。石核は第2次調査で出土した。剥離工程はKa-62を節理面方向から剥離したのちに打面を90°転移させてKa-57を剥離、もう一度90°転移させてKa-55を剥離する。Ka-54・63も節理面の平坦打面から剥離される。Ka-58はKa-55を剥離したのち、打面を90°転移させて剥離される。Ka-54はSI277床面、Ka-55・56・58は第6次調査区03・04・06グリッド、Ka-57はSI279堆積土、Ka-62はSI289掘り方、Ka-63は第2次調査区基本層IVa層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 20-1】(第 262 図-5)

剥片3点の接合資料である(Ka-59～61)。接合資料20と同一母岩と考えられ、このため枝番を付した。ほぼ同一方向から剥離される。Ka-59は第6次調査区06グリッド、Ka-60はSI276堆積土、Ka-61はSI287堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 21】(第 263 図-3)

石核と剥片1点の接合資料である(Ka-64・65)。Ka-65は加撃の際に、同時割れを起こしたものと考えられる。ともに基本層IV層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 22】(第 264 図-1)

石核と剥片2点の接合資料である(Ka-66～68)。Ka-66・67は加撃の際に同時割れしたものである。Ka-66・67はSI289堆積土、Ka-68は基本層IV層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 23】(第 265 図-1)

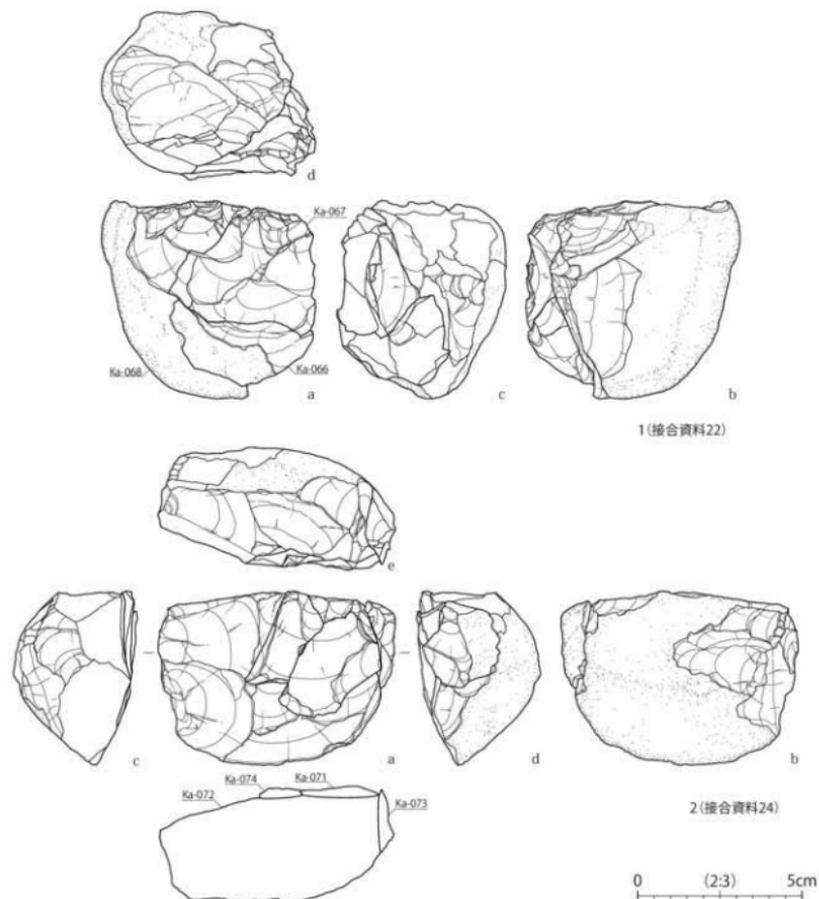
石核と微細剥離のある剥片1点の接合資料である(Ka-69・70)。Ka-69はやや大型の剥片を素材とした石核である。Ka-69の背面の先端部には、被熱のためやや黒色化した痕跡が確認される。Ka-69は第9次調査区33グリッド、Ka-70は基本層IV層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 24】(第 264 図-2)

石核と剥片3点の接合資料である(Ka-71～74)。石核はやや大振りの剥片を素材とし、自然面を残している。剥片はほぼ同一方向から剥離される。Ka-71はSI339堆積土、Ka-72・73は基本層IV層、Ka-74は第9次調査区25グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

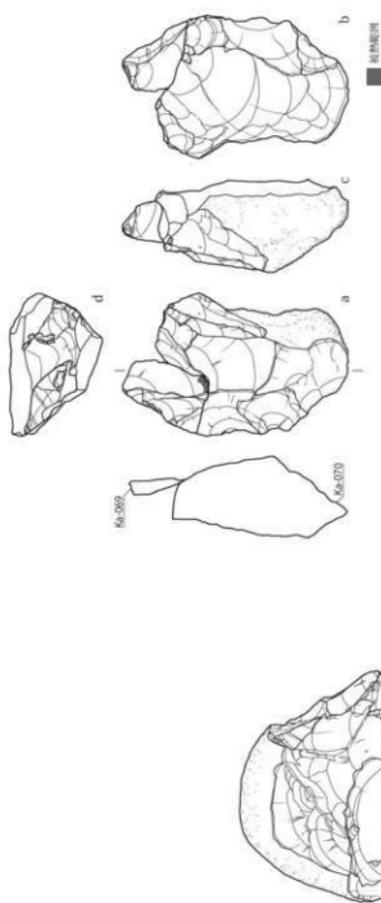
【接合資料 25】(第 265 図-2)

石核と剥片 1 点の接合資料である (Ka-75・76)。亜角礫素材の石核であり、90°の打面転移が認められる。Ka-75 は第 9 次調査区 13 グリッド、Ka-76 は基本層 IV 層から出土した。石材は流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年度	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-066	第 6 次	SI289	堆積土	打製石核	剥片	2.8	4.3	0.7	18.2	流紋岩	接合資料 22 石核・剥片 2 点接合。Ka-066・067 同時期。	149
	Ka-067	第 6 次	SI289	堆積土	打製石核	剥片	4	4.4	1.7	26.5			
	Ka-068	第 9 次	下層調査	IV 層	打製石核	石核	6.1	5.8	5	165.7			
	Ka-071	第 9 次	SI339	堆積土	打製石核	剥片	3.3	3	0.3	3.5			
	Ka-072	第 9 次	下層調査	IV 層	打製石核	石核	5.3	6.8	3.7	140.3			
2	Ka-073	第 9 次	下層調査	IV 層	打製石核	剥片	2.6	3.6	0.5	4.3	流紋岩	接合資料 24 石核・剥片 3 点接合。剥片は同一方向。Ka-072 自然崩壊存	149
	Ka-074	第 9 次	25C	横出面	打製石核	剥片	2.9	2.4	0.7	7			

第 264 図 接合資料 22・24



1(接合資料23)

2(接合資料25)

図版 番号	層位 番号	調査 年度	出土地点	層位	種別	器種	材質	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石種	写真 掲載
1	Ka-070	昭和52年	33C 下層調査	A層	打製石器	磨製石器 石核	接合部	2.8	2.3	0.5	3.2	横紋石	接合資料23 石核・接合部(磨製石器)・石核片(打石・Ka-066の先端部)
					打製石器	磨製石器 石核							
2	Ka-076	昭和52年	13C 下層調査	A層	打製石器	磨製石器 石核	接合部	3.6	4.4	0.7	7	横紋石	接合資料25 石核・磨製部(打石・重内層部材・007打製部)
					打製石器	磨製石器 石核							



第 265 図 接合資料 23・25

【接合資料 26】(第 266 図-1)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-77・78)。Ka-77 を剥離した後作業面を 90° 転移させ、Ka-77 の剥離によって形成された剥離面を打面として Ka-78 を剥離している。ともに自然面を残す。Ka-77 は SX28 堆積土、Ka-78 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 27】(第 266 図-2)

石核と剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-79～81)。Ka-79 の観察から、作業面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-79 は SI315 掘り方、Ka-80 は第 9 次調査区 33 グリッド、Ka-81 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 28】(第 267 図-1)

剥片 3 点の接合資料である (Ka-82～84)。同一方向からの連続した剥片剥離である。a 面の観察から、打面を 180° 転移させていることが判る。Ka-82 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 29】(第 267 図-2)

石核と剥片の接合資料である (Ka-85・86)。Ka-86 の下端には自然面を残す。各剥離面の観察から、打面を約 90° ずつ転移させていることが判る。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 30】(第 267 図-3)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-87・88)。Ka-87 を剥離後、同時割れによって Ka-88 が剥離されたものと考えられる。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 31】(第 267 図-4)

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-89・90)。同一剥片の折れ面での接合である。Ka-89 は SI272 堆積土、Ka-90 は SK230 堆積土から出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 32】(第 268 図-1)

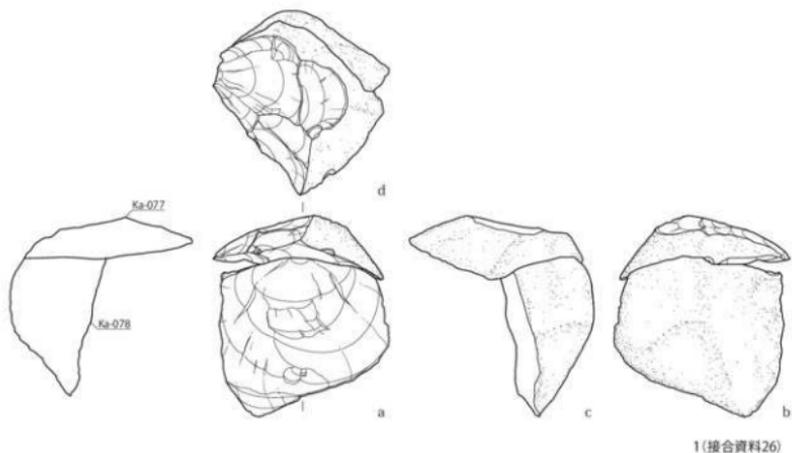
二次加工のある剥片の接合資料である (Ka-91・92)。同一剥片の折れ面での接合である。著しく風化し、二重パティナが認められる。Ka-92 の一部には自然面を残す。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 33】(第 268 図-2)

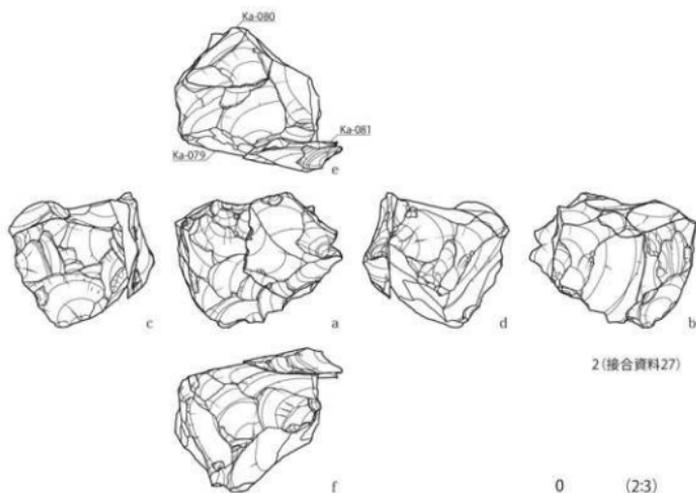
石核と二次加工のある剥片の接合資料である (Ka-93・94)。Ka-93 剥離後に打面を約 90° 転移させ、剥離作業を行う。a・c 面は自然面となっている。Ka-93 は SK230 堆積土、Ka-94 は SI279 床面から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 34】(第 268 図-3)

石核と剥片の接合資料である (Ka-95・96)。ともに自然面を残し、Ka-95 の剥離面の観察から、90° もしくは 180° 打面転移させながら剥離作業を行っているのが判る。Ka-95 は SK223 堆積土、Ka-96 は SD182 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。



1(接合資料26)

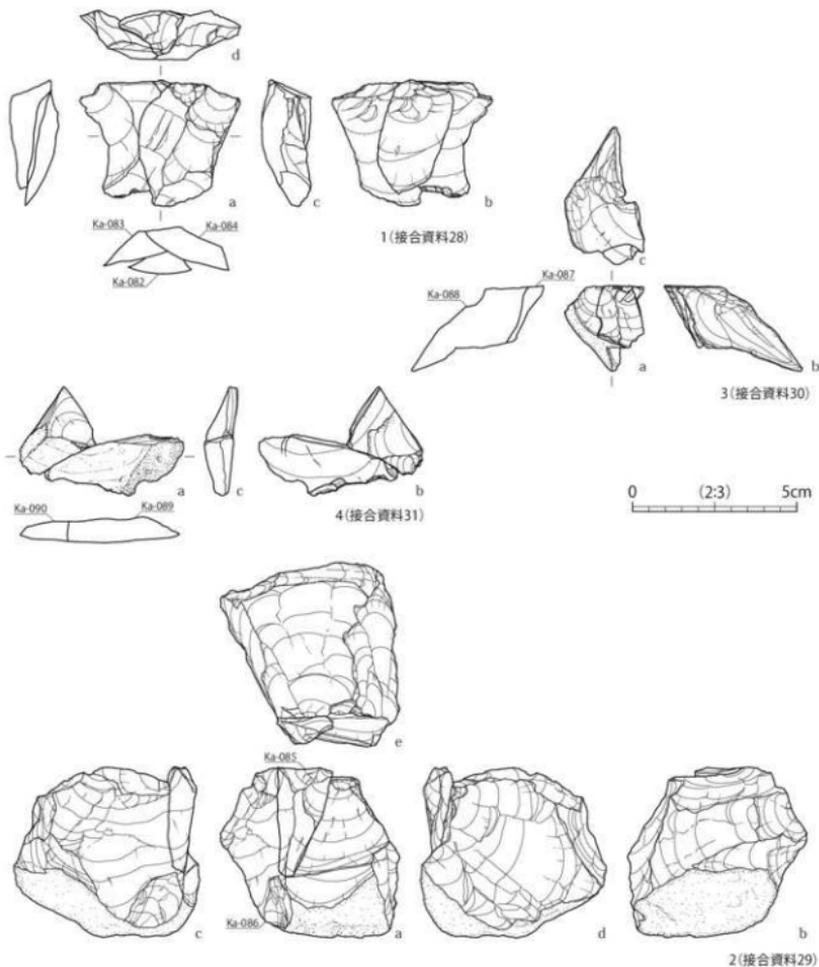


2(接合資料27)



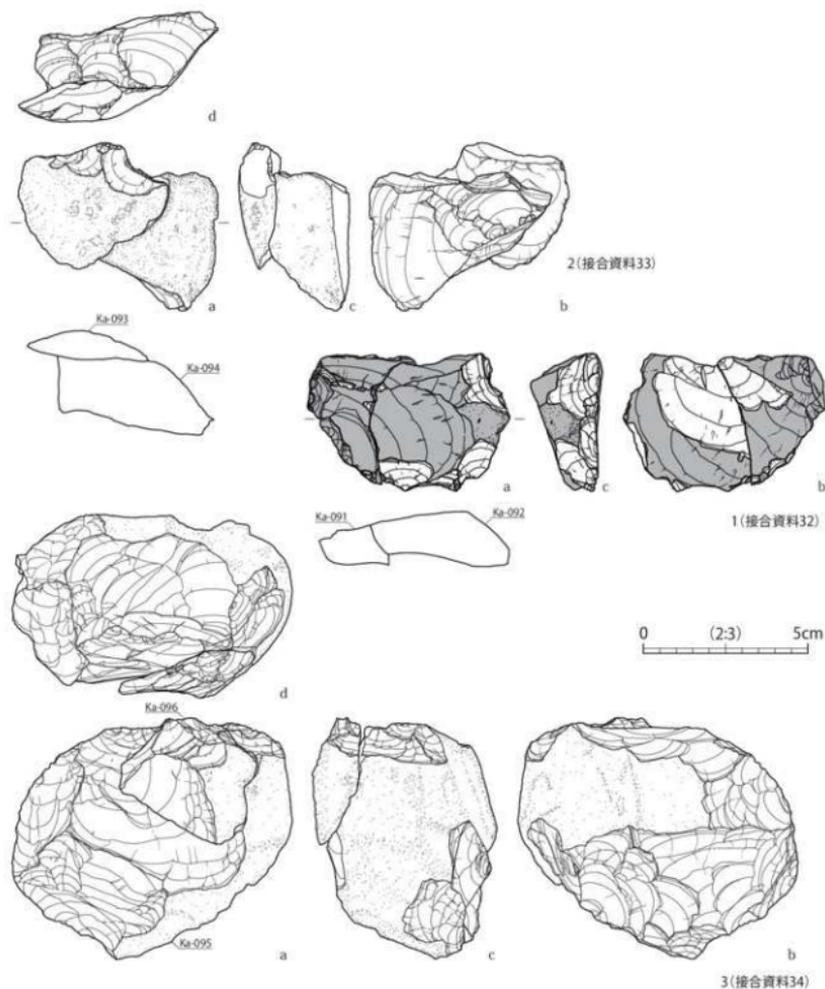
図版 番号	作跡 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-077	第9次	5X28	埋積土	打製石器	削片	5.2	5.6	1.3	25.3	接合資料26 削片2点接合、Ka-077削片→90°作業面転移→削片剥離。 ともに自然面残存	149	
	Ka-078	第9次	下層調査	IV層	打製石器	削片	4.9	5.2	2.7	61.4			
	Ka-079	第9次	SI315	掘り方	打製石器	石核	4	4.4	3.9	59			
2	Ka-080	第9次	33G	掘り出し	打製石器	側縁剥離の ある削片	1.8	2.6	0.9	2.8	接合資料27 石核・側縁剥離のある削片+削片接合、作業面転移	150	
	Ka-081	第9次	下層調査	IV層	打製石器	削片	3.2	3	0.9	5			

第266図 接合資料26・27



回収番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真 00%
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-082	旧5次	336	横川面	打製石器	剥片	3.5	2.4	1.1	5.3	流紋岩	接合資料28 剥片3点接合、剥離同一方向、180°打面転移	150
	Ka-083	旧5次	下層調査	IV層	打製石器	剥片	3.5	2.7	0.9	6.1			
	Ka-084	旧5次	下層調査	IV層	打製石器	剥片	3.8	3.4	0.9	9			
2	Ka-085	旧5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	3.4	1.7	0.9	4	流紋岩	接合資料29 石核・剥片接合、約90°打面転移、Ka-086下端自然面残存	151
	Ka-086	旧5次	SK230	堆積土上層	打製石器	石核	5.2	5.7	5.4	142.8			
3	Ka-087	旧5次	SK230	堆積土上層	打製石器	剥片	2	1.5	0.6	1.1	流紋岩	接合資料30 剥片2点接合、剥離工程Ka-087→Ka-088(同時割付)	150
	Ka-088	旧5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	2.6	3.8	1.8	10			
4	Ka-089	旧5次	SE272	堆積土上層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.9	4.2	0.9	5.5	黒色頁岩	接合資料31 剥片・微細剥離のある剥片接合、同一剥片の折れ面で接合	150
	Ka-090	旧5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	2.7	2.3	0.7	3.5			

第 267 図 接合資料 28 ~ 31



図版 番号	登録 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-091	第5次	SK230	埋積土	打製石器	二次加工の ある削片	3	4	1.7	15.8	燧岩質 接合資料32 二次加工のある削片2点接合、同一削片の折れ面での接合、 二重パティナ(風化)、Ka-092一部自然面残存	151	
	Ka-092	第5次	SK230	埋積土	打製石器	二次加工の ある削片	4.2	4.3	2.1	31.2			
2	Ka-093	第5次	SK230	埋積土	打製石器	二次加工の ある削片	3.9	4.5	1.3	16.5	燧岩質 接合資料33 右柄へ二次加工のある削片接合、Ka-093→約90°打面転移、 a+c面自然面残存	151	
	Ka-094	第6次	S1279	床面直土	打製石器	石核	5.6	4.2	2.2	43.9			
	Ka-095	第5次	SK223	埋積土下層	打製石器	石核	7.4	8.6	5.2	341.5			
3	Ka-096	第6次	SD182	埋積土	打製石器	削片	3.9	4.2	1.4	14.5	燧岩質 接合資料34 右柄・削片接合、00°～180°打面転移、ともに自然面残存	151	
	Ka-095	第6次	SD182	埋積土	打製石器	削片	3.9	4.2	1.4	14.5			

第 268 図 接合資料 32～34

【接合資料 35】(第 269 図-1)

石核と剥片 3 点の接合資料である (Ka-97 ~ 100)。Ka-98、Ka-99 は同一方向から剥離され、剥離後に打面を 90° 転移させて Ka-97 を剥離する。Ka-97 は SK321 堆積土、Ka-98 は SI283 堆積土、Ka-99 は SI287 堆積土、Ka-100 は SK285 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 36】(第 269 図-2)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-101・102)。Ka-101 を剥離後、打面を約 90° 転移させて Ka-102 を剥離する。Ka-101 は SM377 堆積土、Ka-102 は SI339 - P3 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 37】(第 269 図-3)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-103・104)。同一剥片の折れ面での接合である。b 面の観察から、打面を 90° 転移させていることが判る。ともに SI275 - P3 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 38】(第 269 図-4)

剥片 3 点の接合資料である (Ka-105 ~ 107)。Ka-106・107 は一部節理面を残し、剥離の際に同時割れを起こしたものと考えられる。3 点いずれも SI283 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 39】(第 270 図-1)

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-108・109)。同一方向から剥離される。Ka-108 は SI279 周溝堆積土、Ka-109 は SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 40】(第 270 図-2)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-110・111)。a 面の観察から、打面を 90° 転移させていることが判る。ともに SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 41】(第 270 図-3)

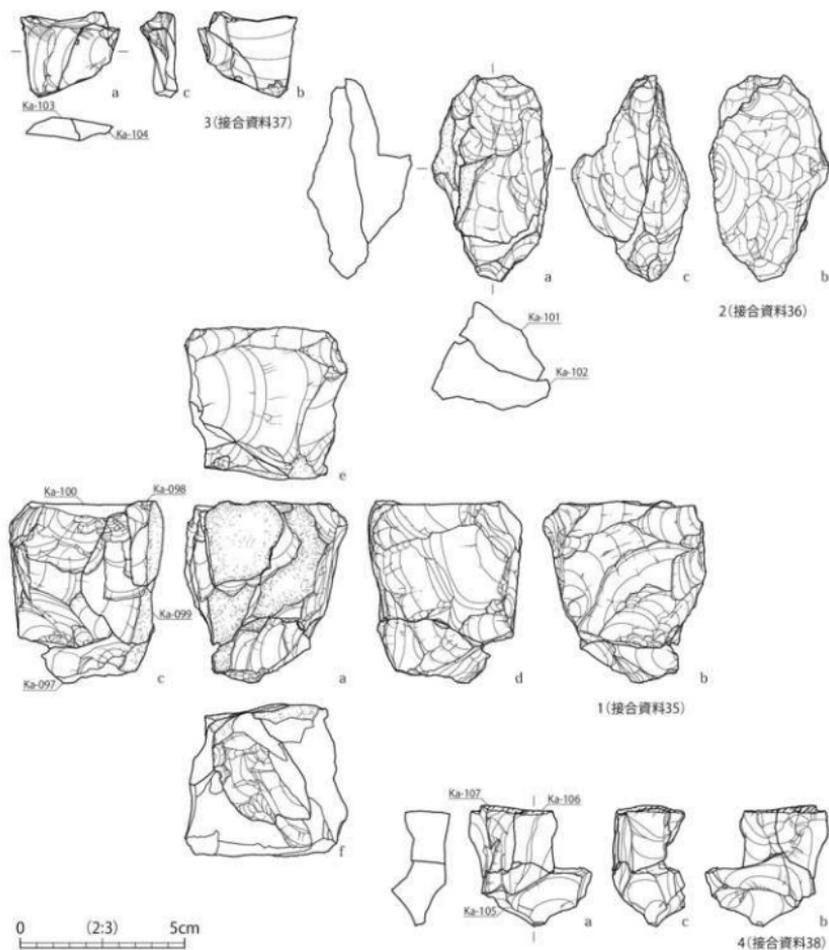
剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-112・113)。同一方向から剥離され、a 面の観察から打面を 180° 転移させていることが判る。ともに SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 42】(第 270 図-4)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-114・115)。垂直方向の同時割れを起こした剥片の接合資料である。ともに SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

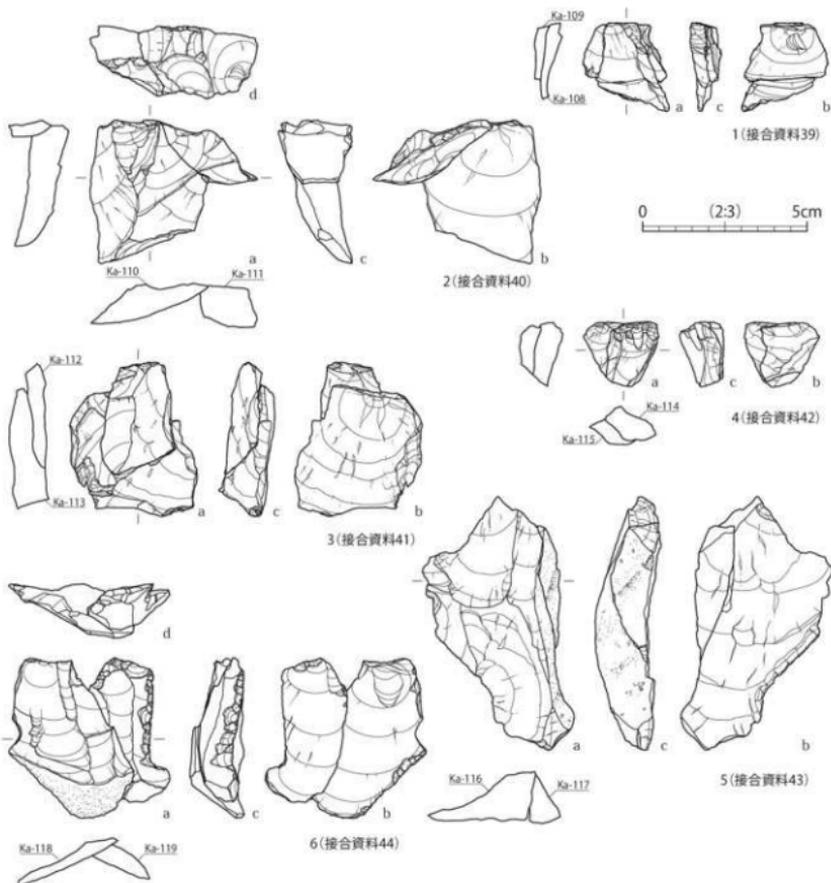
【接合資料 43】(第 270 図-5)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-116・117)。垂直方向の同時割れを起こしている。打面部は折損して不明である。c 面には自然面を残している。2 点ともに SI283 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-007	第6次	SK321	埋積土	打製石器	削片	3.9	2.4	1.3	12.1	燧石	接合資料35 石核・削片3点接合, 剥離工程Ka-098-099→90°打面転移→Ka-097	152
	Ka-098	第6次	SI283	埋積土	打製石器	削片	2.7	2.4	0.8	4.7			
	Ka-099	第6次	SI287	埋積土	打製石器	削片	4	3	1.1	9.3			
2	Ka-100	第6次	SK285	埋積土	打製石器	石核	4.5	4.9	4.6	110.3	燧石	接合資料36 削片2点接合, 剥離工程Ka-101→約90°打面転移→Ka-102	152
	Ka-101	第6次	SM577	埋積土	打製石器	削片	5.2	2.7	1.7	32.8			
3	Ka-102	第6次	SI339	P3埋積土	打製石器	削片	6.3	3.7	2	18.2	燧石	接合資料37	152
	Ka-103	第6次	SI275	P3埋積土	打製石器	削片	2.6	2.7	1.1	4			
4	Ka-104	第6次	SI275	P3埋積土	打製石器	削片	2	1.9	0.7	1.5	燧石	接合資料38 削片3点接合, 同一削片の折れ面で接合, 90°打点転移	152
	Ka-105	第6次	SI283	埋積土	打製石器	削片	2.3	3.4	1.7	7.8			
4	Ka-106	第6次	SI283	埋積土	打製石器	削片	1.9	1.4	1.5	3.3	燧石	接合資料38 削片3点接合, Ka-106-107同時割れ	152
	Ka-107	第6次	SI283	埋積土	打製石器	削片	2.2	1.7	2.2	5.5			

第 269 図 接合資料 35 ~ 38



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-108	1963次	SK279	縄遺	打製石器	微細割縁のある剥片	2.8	2.2	0.7	2.1	流紋岩	接合資料39 剥片・微細割縁のある剥片接合、割縁同一方向	152
	Ka-109	1963次	SK280	堆積土	打製石器	剥片	(1.8)	2.5	0.5	1.7			
2	Ka-110	1963次	SK280	堆積土	打製石器	剥片	4.4	3.5	1.1	15.4	流紋岩	接合資料40 剥片2点接合、90°打面転移	152
	Ka-111	1963次	SK280	堆積土	打製石器	剥片	2	3.6	1.4	8.7			
3	Ka-112	1963次	SK287	堆積土	打製石器	微細割縁のある剥片	3.4	2.4	0.9	4.9	流紋岩	接合資料41 剥片・微細割縁のある剥片接合、割縁同一方向、180°打面転移	152
	Ka-113	1963次	SK287	堆積土	打製石器	剥片	4	3.9	1.4	16.7			
4	Ka-114	1963次	SK289	堆積土	打製石器	剥片	2	1.5	0.8	2.9	流紋岩	接合資料42 剥片2点接合、垂直方向の同時割削	152
	Ka-115	1963次	SK289	堆積土	打製石器	剥片	1.8	1.9	0.6	1.8			
5	Ka-116	1963次	SK283	堆積土	打製石器	剥片	7.8	4.6	1.5	38.4	流紋岩	接合資料43 剥片2点接合、垂直方向の同時割削、打面部折損、C面自然面	153
	Ka-117	1963次	SK283	堆積土	打製石器	剥片	3.8	1.2	1.5	4.2			
6	Ka-118	1993次	SK296	堆積土	打製石器	微細割縁のある剥片	4.9	3.8	0.8	10.3	流紋岩	接合資料44 微細割縁のある剥片2点接合、割縁同一方向、ともに自然面残存、取刃打面、Ka-119同層第二次加工連続	153
	Ka-119	1993次	246	横出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.4	2.5	0.8	7.2			

第 270 図 接合資料 39 ~ 44

【接合資料 44】(第 270 図-6)

二次加工のある剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-118・119)。同一方向から剥離され、ともに自然面を残す。a 面の観察から、単設の打面であることが判る。Ka-119 の二次加工は、周縁部に連続して施される。Ka-118 は SK296 堆積土、Ka-119 は第 9 次調査区 24 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 45】(第 271 図-1)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-120・121)。剥離の際に同時割れを起こしたうちの 2 個体の接合資料である。ともに自然面を残す。Ka-120 は SI339 掘り方、Ka-121 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 46】(第 271 図-2)

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である (Ka-122・123)。同一方向から剥離され、Ka-122 は下端部に自然面を残す。Ka-122 は SM393-2 堆積土、Ka-123 は SM397-7 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 47】(第 271 図-3)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-124・125)。同一方向からの剥離である。ともに打面は節理面であり、Ka-124 の下端部には自然面を残す。Ka-124 は SD276 堆積土、Ka-125 は SI339 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 48】(第 272 図-1)

石核と剥片 2 点の接合資料である (Ka-126～128)。このうち、Ka-126・127 は同一剥片が同時割れを起こしたものである。Ka-126 は SM400-3 堆積土、Ka-127 は SI316 堆積土、Ka-128 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は黒色安山岩である。

【接合資料 49】(第 271 図-4)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-129・130)。同一方向から剥離され、a 面はともに自然面となっている。Ka-129 は SI316 堆積土、Ka-130 は SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 50】(第 271 図-5)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-131・132)。同一方向から剥離され、ともに自然面を残す。ともに SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 51】(第 271 図-6)

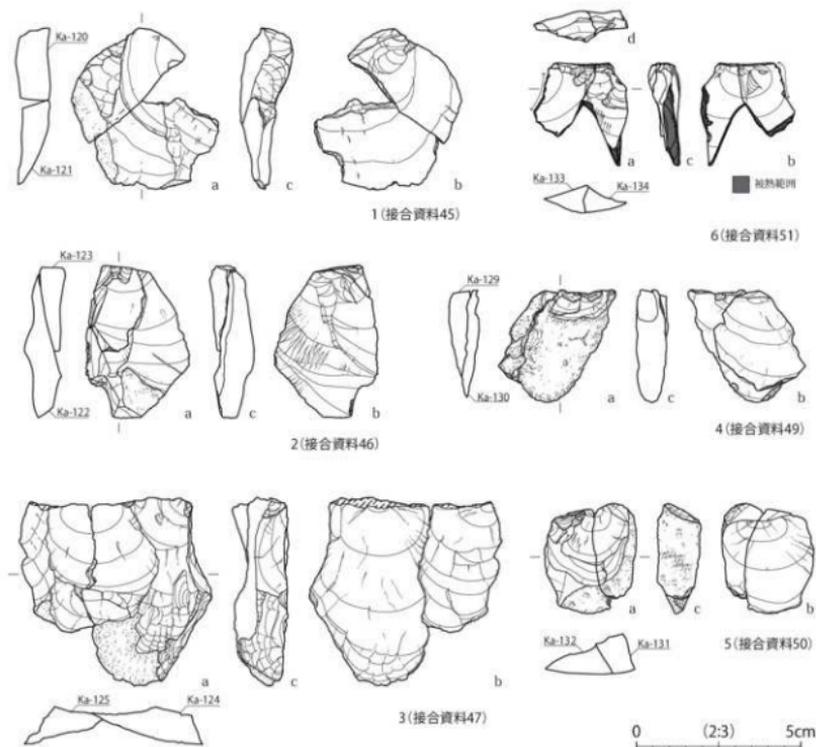
微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-133・134)。垂直方向の同時割れを起こしている。Ka-133 は第 9 次調査区 37 グリッド、Ka-134 は SD266 堆積土から出土した。石材はメノウである。

【接合資料 52】(第 272 図-2)

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である (Ka-135・136)。同一方向から剥離され、被熱による割れの痕跡が残る。Ka-135 は第 9 次調査区内、Ka-136 は第 9 次調査区 32 グリッドから出土した。石材は頁岩である。

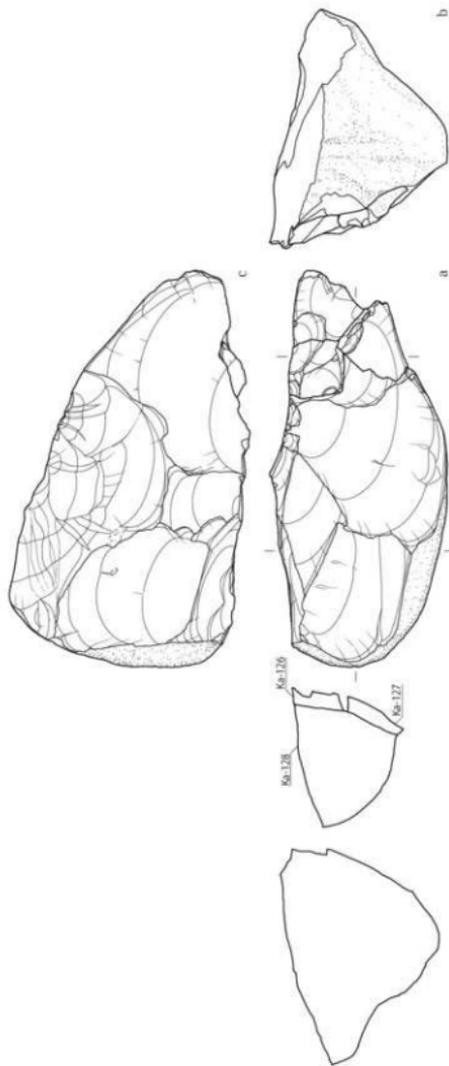
【接合資料 53】(第 273 図-1)

微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-137・138)。概ね同一方向から剥離される。Ka-137 は S1268 堆積土、Ka-138 は第 9 次調査区 32 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。



図記番号	登録番号	調査年度	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-120	第9次	SI330	掘り方	打製石器	剥片	3.6	3.4	1.1	11.8	流紋岩	接合資料45 剥片2点接合、同時割れ、ともに自然面残存	153
	Ka-121	第9次	33C	横出面	打製石器	剥片	2.8	3.3	0.8	8.3			
	Ka-122	第9次	SM393-2	埋積土	打製石器	剥片	4.5	3.2	1.2	11			
2	Ka-123	第9次	SM397-7	埋積土	打製石器	剥片	2.6	1.6	0.8	2.4	頁岩	接合資料46 微細剥離のある剥片2点接合、剥離同一方向、Ka-122下層部自然面残存	153
	Ka-124	第9次	SD276	埋積土	打製石器	剥片	5.8	4	1.3	28.8			
3	Ka-125	第9次	SI330	掘り方	打製石器	剥片	4	2.5	1.2	10	流紋岩	接合資料47 剥片2点の接合資料、剥離同一方向、打面側面利用、Ka-124下層部自然面残存	153
	Ka-129	第9次	SI316	埋積土	打製石器	剥片	3.1	2.8	0.9	4.2			
4	Ka-130	第9次	SX28	埋積土	打製石器	剥片	3.4	3	0.5	3.5	流紋岩	接合資料49 剥片2点接合、剥離同一方向、a面自然面	153
	Ka-131	第9次	SX28	埋積土	打製石器	剥片	3.2	2.1	1.3	5.2			
5	Ka-132	第9次	SX28	埋積土	打製石器	剥片	2.9	1.3	0.9	5.4	流紋岩	接合資料50 剥片2点接合、剥離同一方向、ともに自然面残存	153
	Ka-133	第9次	37C	横出面	打製石器	剥片	2.3	1.9	0.6	2.4			
6	Ka-134	第9次	SD266	埋積土	打製石器	剥片	3.2	1.4	0.9	2.2	メノウ	接合資料51 微細剥離のある剥片・剥片接合、垂直方向の同時割れ	154

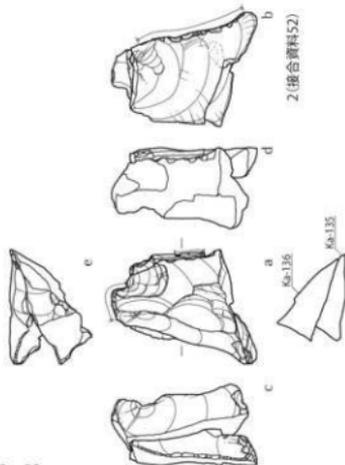
第 271 図 接合資料 45 ~ 47・49 ~ 51



1 (接合資料48)

0 (2:3) 5cm

図版番号	図名	出土地点	層位	種類	用途	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石材	備考	写真掲載
1	6a-126 100次	335c	掘出層	打製石皿	46%	5.4	12.2	7.3	416.5	黒色砂岩質	接合資料48 接合資料49 127-133	133
2	6a-135 100次	-	掘出層	打製石皿	表面磨削	3.9	3.4	0.8	7.3	頁岩	接合資料48 接合資料49 134-135	134
	6a-136 100次	335c	掘出層	打製石皿	表面磨削	4.2	3.5	1.2	133.5	頁岩	接合資料48 接合資料49 134	134



2 (接合資料52)

【接合資料 54】(第 273 図-2)

二次加工のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-139・140)。同一方向から剥離される。a 面と打面は自然面である。Ka-139 は SK285 堆積土、Ka-140 は SI315 掘り方から出土した。石材は緑色凝灰岩である。

【接合資料 55】(第 273 図-3)

微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-141・142)。同一剥片の折れ面での接合である。Ka-141 は打点部付近に一部自然面を残す。Ka-141 は第 9 次調査区 19 グリッド、Ka-142 は SI333 堆積土から出土した。石材は緑色凝灰岩である。

【接合資料 56】(第 273 図-4)

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である (Ka-143・144)。概ね同一方向から剥離される。ともに第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 57】(第 273 図-5)

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である (Ka-145・146)。同一方向から剥離され、ともに a 面に自然面を残す。Ka-145 は第 9 次調査区 05 グリッド、Ka-146 は同 14 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 58】(第 274 図-1)

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である (Ka-147・148)。a 面の右側縁部に連続する微細剥離が確認されるため、使用中に折損したものと考えられる。Ka-147 は SI320 堆積土、Ka-148 は SI319 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 59】(第 274 図-2)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-149・150)。概ね同一方向から剥離され、a・b 面の観察から打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-149 は SD276 堆積土、Ka-150 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 60】(第 274 図-3)

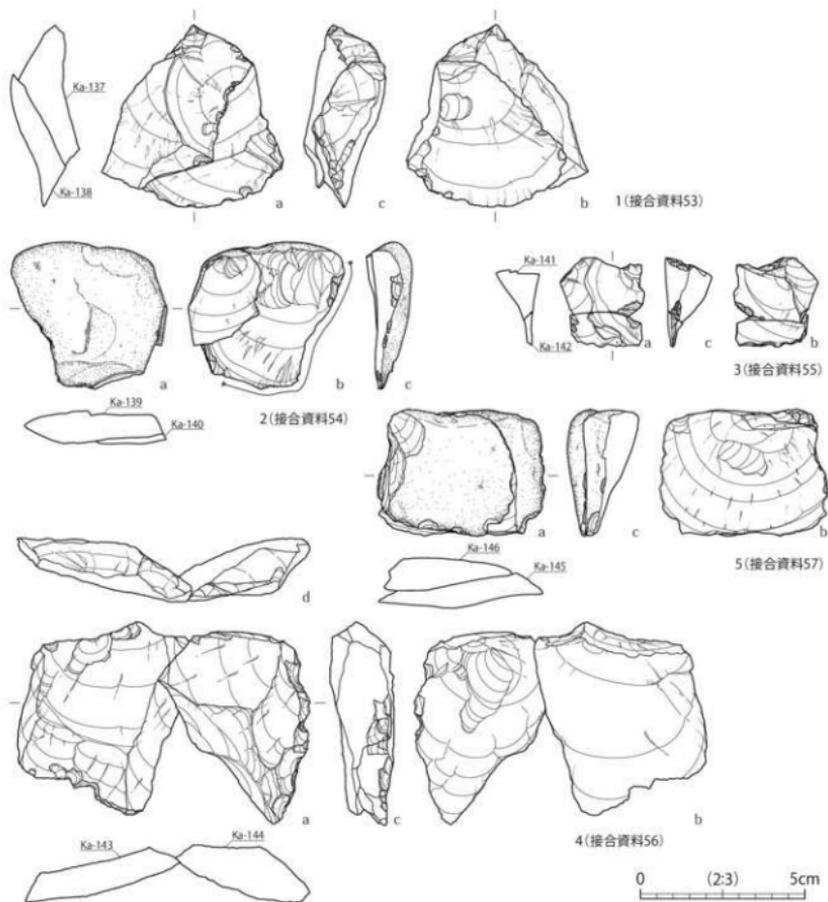
二次加工のある剥片と剥片の接合資料である (Ka-151・152)。同一方向から剥離され、a 面は自然面である。Ka-151 は SI330 堆積土、Ka-152 は SI332 - P3 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 61】(第 274 図-4)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-153・154)。同一剥片が同時割れを起こしたものである。a 面は自然面である。Ka-153 は SX28 堆積土、Ka-154 は SI333 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

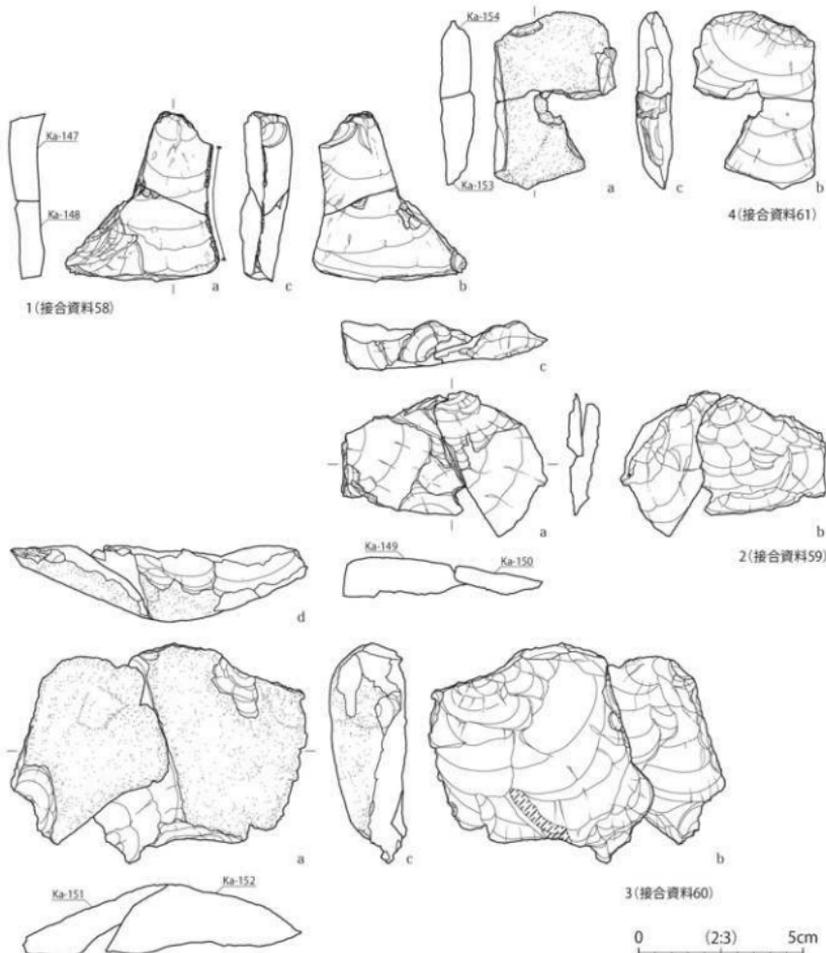
【接合資料 62】(第 275 図-1)

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である (Ka-155・156)。折れ面で接合する。a 面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。ともに自然面を残す。Ka-155 は SD7 堆積土、Ka-156 は SI325 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。



図版 番号	登録 番号	調査 年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量 (g)	石材	備考	写真 図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-137	第9次	SI268	埋藏土	打製石器	微細刻線のある剥片	5	4.6	1.9	20.6	緑凝岩	接合資料53 微細刻線のある剥片・剥片接合、剥離面同一方向	154
	Ka-138	第9次	32G	検出面	打製石器	剥片	4.5	4.9	1	24.9			
2	Ka-139	第9次	SK285	埋藏土	打製石器	二次加工のある剥片	4.7	4.5	1.2	22.6	緑色凝灰岩	接合資料54 二次加工のある剥片・剥片接合、剥離面同一方向、a面・打面自然面	154
	Ka-140	第9次	SI315	掘り方	打製石器	剥片	2.2	3	0.7	2.8			
3	Ka-141	第9次	19G	検出面	打製石器	剥片	1.9	2.6	1.5	5.1	緑色凝灰岩	接合資料55 微細刻線のある剥片・剥片接合、同一面の折れ面での接合、Ka-141打点部付近一部自然面残存	154
	Ka-142	第9次	SI333	埋藏土	打製石器	微細刻線のある剥片	1.1	2.2	0.5	0.8			
	Ka-143	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	5.9	5.3	1.5	35.3			
4	Ka-144	第9次	33G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	5.9	4.6	1.6	34.1	緑凝岩	接合資料56 剥片・二次加工のある剥片接合、剥離面同一方向	154
	Ka-145	第9次	05G	検出面	打製石器	剥片	3.9	3.8	1.4	22.2			
5	Ka-146	第9次	14G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4	5.1	1	15.3	緑凝岩	接合資料57 剥片・二次加工のある剥片接合、剥離面同一方向、ともに背面自然面残存	154

第 273 図 接合資料 53～57



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(m)			重量(g)	石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-147	199次	SK320	堆積土	打製石器	微細剥離のある刮片	3.2	2.4	1.5	7.7	流紋岩	接合資料58 微細剥離のある刮片2点接合、使用中に折損	154
	Ka-148	199次	SK319	掘り方	打製石器	微細剥離のある刮片	3	4.7	1.4	14.9			
2	Ka-149	199次	SK276	堆積土	打製石器	刮片	3.7	4	0.9	19.5	流紋岩	接合資料59 刮片2点接合、剥離面同一方向、打面転斜多角度	155
	Ka-150	199次	33C	換出面	打製石器	刮片	2.8	4.3	1.4	8.7			
3	Ka-151	199次	SK330	堆積土	打製石器	二次加工のある刮片	5.8	4.8	1.2	26.5	流紋岩	接合資料60 二次加工のある刮片・刮片接合、剥離同一方向、a面自然面	155
	Ka-152	199次	SK32	P3堆積土	打製石器	刮片	6.7	6.8	2.1	84.2			
4	Ka-153	199次	SX28	堆積土	打製石器	刮片	3.1	2.7	1	8	流紋岩	接合資料61 刮片2点の接合資料、同一刮片の同時別削、a面自然面残存	155
	Ka-154	199次	SK333	堆積土	打製石器	刮片	2.8	3.7	1	12			

第 274 図 接合資料 58 ～ 61

【接合資料 63】(第 275 図-2)

剥片 2 点の接合資料である (Ka-157・158)。同一剥片の垂直割れを起こしたものである。Ka-158 は a 面の左側縁部に自然面を残す。ともに第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 64】(第 275 図-3)

微細剥離のある剥片と石核の接合資料である (Ka-159・160)。Ka-160 には節理面が残り、各面の剥離面の観察から、打面を頻りに転移させて剥離作業を行っていることが判る。ともに SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 65】(第 276 図-1)

石核と剥片の接合資料である (Ka-161・162)。Ka-161 の剥離面の観察から、打面を頻りに転移させて剥離作業を行っていることが判る。ともに自然面を残す。Ka-161 は第 9 次調査区 14 グリッド、Ka-162 は同 20 グリッドから出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 66】(第 276 図-2)

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である (Ka-163・164)。Ka-163 は打点部付近に自然面を残す。Ka-164 を剥離後、打面を 180°転移させて Ka-163 を剥離する。Ka-163 は第 9 次調査区 37 グリッド、Ka-164 は同 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 67】(第 276 図-3)

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-165・166)。同一剥片の垂直割れを起こしたものである。Ka-165 の右側縁部は折れ面であり、Ka-166 の側縁部には使用に伴う微細剥離が確認される。Ka-165 は SX28 堆積土、Ka-166 は第 9 次調査区 37 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 68】(第 276 図-4)

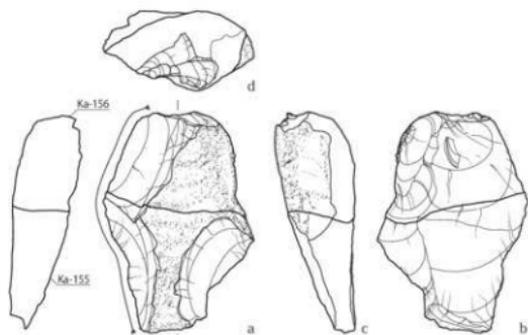
剥片 3 点の接合資料である (Ka-167・168・169)。3 点とも a 面に自然面を残す。同一剥片の同時割れと考えられる。Ka-167 は SM393-10 堆積土、Ka-168 は SI7 堆積土、Ka-169 は第 9 次調査区 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 69】(第 276 図-5)

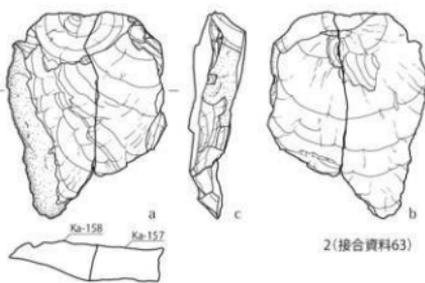
剥片 2 点の接合資料である (Ka-170・171)。Ka-171 を剥離したのち、形成された剥離面を打面として打面を 90°転移させて Ka-170 を剥離している。いずれも a 面は自然面である。Ka-170 は SI321 掘り方、Ka-171 は SI339 掘り方から出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 70】(第 276 図-6)

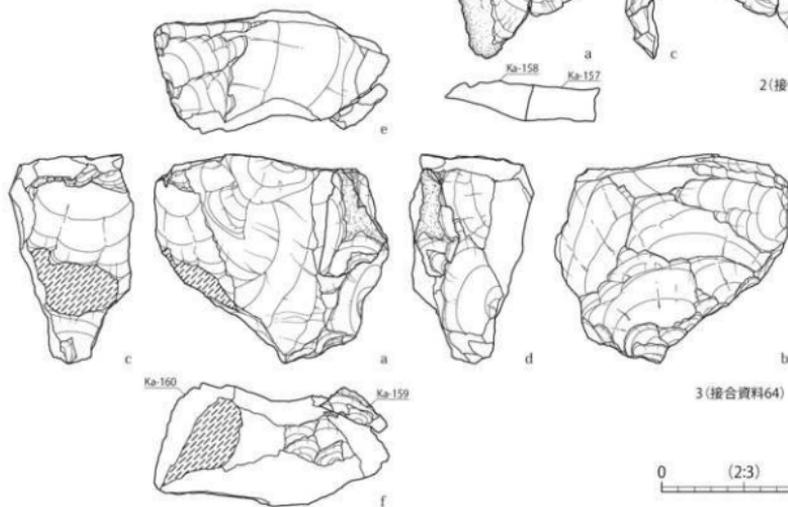
剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である (Ka-172・173)。同一方向から剥離され、いずれも a 面に自然面を残す。Ka-172 の b 面右側縁部には、使用に伴う微細剥離が観察される。ともに第 9 次調査区 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。



1(接合資料62)



2(接合資料63)

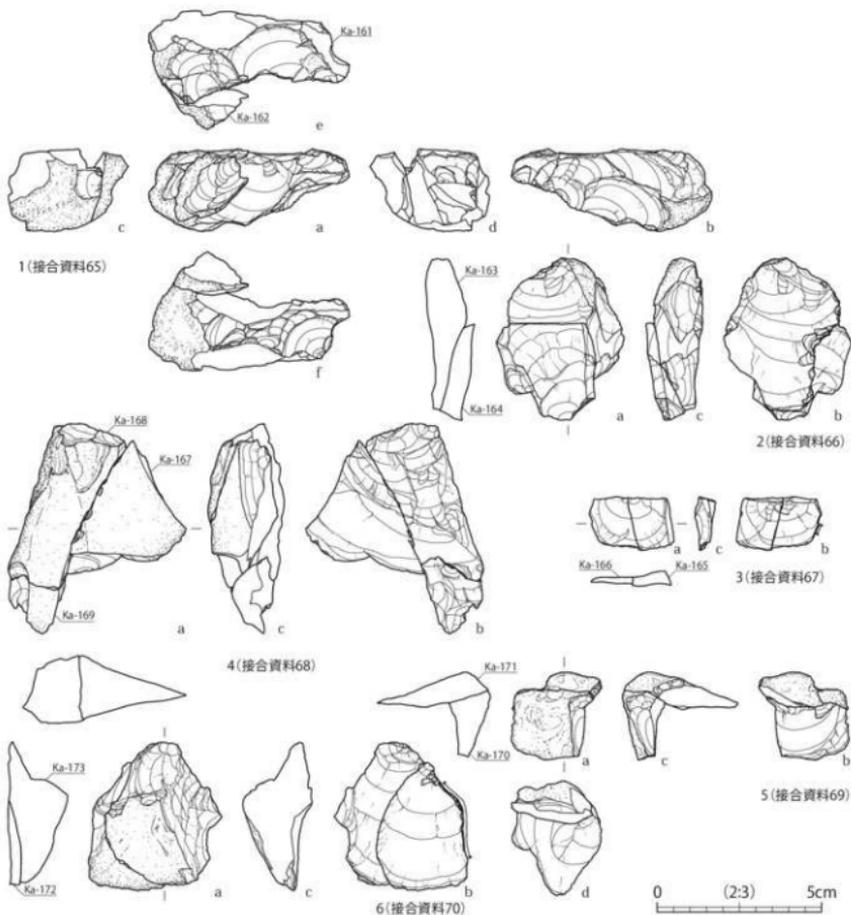


3(接合資料64)

0 (2:3) 5cm

図説番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	写真掲載
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-155	旧3次	SD7	埋積土	打製石器	刮片	4.4	4.6	1.9	26.5	流紋岩	接合資料62 刮片2点接合、同一刮片の折れ面での接合、打面転移多角度、ともに自然面残存	155
	Ka-156	旧3次	SK25	掘り方	打製石器	刮片	3.5	4.3	2.3	31.1			
2	Ka-157	旧3次	33G	検出面	打製石器	刮片	5.1	2.4	1.2	17.5	流紋岩	接合資料63 刮片2点接合、同一刮片の垂直割れ、Ka-158自然面残存	156
	Ka-158	旧3次	33G	検出面	打製石器	刮片	6.3	2.8	1.3	18.3			
3	Ka-159	旧3次	SX28	埋積土	打製石器	微細割縁のある刮片	1.8	3.4	0.9	3.9	流紋岩	接合資料64 微細割縁のある刮片・石核接合、打面転移頻繁	155
	Ka-160	旧3次	SX28	埋積土	打製石器	石核	6.2	7.2	3.6	155.7			

第 275 図 接合資料 62 ~ 64



図版番号	登録番号	調査年度	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			石材	備考	写真図版
							全長	幅	厚さ			
1	Ka-161	第9次	14C	検出面	打製石器	石核	2.5	6.1	0.8	35.7	黒色頁岩	接合資料65 石核・剥片接合・打面転縁部類、ともに自然面残存
	Ka-162	第9次	20C	検出面	打製石器	剥片	2	2.1	2.8	2.0		
2	Ka-163	第9次	37C	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.4	3.7	1.4	16.2	黒色頁岩	接合資料66 剥片・二次加工のある剥片接合・剥離工程Ka-164→180°打面転縁→Ka-163、Ka-163a打面付近自然面残存
	Ka-164	第9次	15C	検出面	打製石器	剥片	3	2.9	0.8	7.4		
3	Ka-165	第9次	SK28	埋藏土	打製石器	剥片	1.6	1.3	0.5	1.3	黒色頁岩	接合資料67 剥片・微細剥離のある剥片接合、同一剥片の垂直剥片、Ka-165の右側縁部折れ面、Ka-166側縁部微細剥離
	Ka-166	第9次	37C	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	1.5	1.5	0.4	0.7		
4	Ka-167	第9次	SM093-10	埋藏土	打製石器	剥片	4.4	3.4	2	15.2	黒色頁岩	接合資料68 剥片3点接合、同一剥片の衝撃割れ、全てa面自然面残存
	Ka-168	第9次	S47	埋藏土	打製石器	剥片	5.8	3.5	2.1	16.9		
	Ka-169	第9次	15C	検出面	打製石器	剥片	3	1.8	1.3	3.4		
5	Ka-170	第9次	S1321	掘り方	打製石器	剥片	2.4	2.2	1.3	5.9	黒色頁岩	接合資料69 剥片2点接合、剥離工程Ka-171→90°打面転縁→Ka-170、a面自然面
	Ka-171	第9次	S1339	掘り方	打製石器	剥片	3.5	2.9	0.9	5.6		
6	Ka-172	第9次	15C	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	4	2.7	0.8	7	黒色頁岩	接合資料70 微細剥離のある剥片・剥片接合、剥離同一方向、Ka-172aのa面右側縁部微細剥離、ともにa面自然面残存
	Ka-173	第9次	15C	検出面	打製石器	剥片	4.4	3.6	1.8	15.1		

第 276 図 接合資料 65 ~ 70

第4節 縄文時代の遺構と遺物

当該期の遺構については、各次調査を通じて検出されなかった。遺物については、第6次調査において基本層IV層から、第9次調査においてIX層およびX層から僅かだが縄文土器が出土している。図化した縄文土器のうち第278図-1は第6次調査の遺構検出時に出土し、2~4は第9次調査の下層調査区から出土した。

第9次下層調査の概要

第9次調査では弥生時代包含層の調査終了後、縄文時代の遺構や遺物の検出を目的として下層調査を行った。調査区は東西15m×南北17mの範囲で設定し、基本層IX層上面まで重機で掘削した後、人力でIX層の掘り下げを行った。IX層上面までの深さは、遺構検出面とした基本層IV層上面から2.5m前後である。IX層中からは第278図-2・3の2点を含む、縄文土器の破片が25点出土した。

基本層X層以下については、下層調査区の中央に東西3m×南北5mのトレンチを設定して掘り下げを行った。最終的に基本層XX層まで掘り下げ、土層断面の記録等を行った。XX層下面までの深さは、X層上面から2m前後である。遺物はX層から第278図-4の縄文土器1点が出土した。

なお、下層調査で観察した基本層序は下記の通りである。

V層：黄色系統の細砂を主体とする層である。a~cの3層に細別される。最下層のVc層はシルト化し、マンガング粒を多量含む。

VI層：褐色シルト層である。a・bの2層に細別される。マンガング粒を含み、部分的に細砂が混じる。

VII層：上半部はくすんだ色調を呈する細砂層で、下半部は明るい黄色系統のシルト層である。a~dの4層に細別される。多量の酸化鉄が含まれ、大半の層が薄いラミナ状を呈する。

VIII層：灰色系統のシルト層で、a~cの3層に細別される。黒色シルトを含み、VIIa・VIIb層は粘性が強い。

IX層：a・bの2層に細別され、黒色粘土質シルトのIXa層が主体である。詳細な時期は不明だが、縄文時代の遺物包含層であり、下層のIXb層はX層の漸移層となっている。

X層：明緑灰色の粘土質シルト層である。

XI層：灰色・明緑灰色のシルト層で、a・bの2層に細別される。下層のXIb層は層相が第X層に近いが、粘性は弱い。

XII層：黒褐色粘土層で、粘性・締まりともに強い。

XIII層：黄灰色粘土質シルト層で、木片を少量含む。木片は緑色に変色・硬化している。

XIV層：緑灰色粘土質シルト層で、XIII層同様の木片を多量含む。

XV層：黄褐色粘土質シルト層で、酸化鉄を多量含む。縄文時代後期前葉の土器が1点だけ出土している。

XVI層：灰色粘土質シルト層で、酸化鉄を少量含む。下半部はやや色調が暗く、a・bの2層に大別した。

XVII層：明緑灰色粘土層で、粘性・締まりともに強い。木片を少量含む。

XVIII層：灰色粘土層で、粘性・締まりともに強い。

XIX層：灰色粘土層で粘性・締まりともに強く、暗灰色シルトを斑状に多量含む。

XX層：黒色粘土層で粘性・締まりともに強く、青灰色シルトを斑状に少量含む。

XXI層：青灰色粘土層で粘性・締まりともに強く、細砂を少量含む。

XXII層：青灰色砂礫層である。直径2~5cm程度の礫と細砂で形成される。

(1) 縄文土器 (第 277・278 図)

縄文土器は各次調査を通じて出土量が少なく、図化できたのは第 278 図に示した 4 点のみである。このうち第 9 次調査の下層調査で出土した第 277 図-2・3 については、周辺から同一個体と思われる破片が若干出土しているもののいずれも接合関係は認められず、比較的残存が良好なこの 2 点を抽出した。

第 6 次調査

遺構検出時に 07 グリッドから出土した 1 点を掲載した。第 278 図-1 は深鉢胴部の破片である。全体的に器壁の磨滅が著しいが、口縁部と胴部の境に横位直線文、胴部に鈎付」字文が施文されている。文様の特徴から縄文時代後期前葉に比定される。

第 9 次調査

① IX 層出土縄文土器

IXa 層出土の 2 点を掲載した。既述の通り 25 点出土したうちの一部であるが、これ以外の縄文土器については図化できなかった。第 278 図-2 は、深鉢口縁部の破片である。口縁部と胴部の境が「く」字状に屈曲する器形を呈し、内外面ともにナデ調整が施されている。第 278 図-3 も深鉢口縁部の破片である。胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形を呈し、地文は無節の L 縄文である。いずれも装飾文様が施されない粗製土器のため、所属時期は不明である。

② XV 層出土縄文土器

XV 層出土の 1 点を掲載した。第 278 図-4 は深鉢胴部の破片である。全体的に器壁の磨滅が著しいが、口縁部と胴部の境に横位直線文、胴部に蕨手状の沈線文が施文され、地文として LR 縄文が施されている。文様の特徴から縄文時代後期前葉に比定される。

第 6 次調査



1 (IVa層)

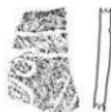
第 9 次調査



2 (IXa層)



3 (IXa層)



4 (XV層)



掲載番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考	写真掲載
1	A-001	第6次	07G	古代遺構検出層	縄文土器	深鉢	体部	沈線		後期前葉 内外面磨滅	156
2	A-002	第9次	下層調査	IXa層	縄文土器	深鉢	口縁	ナデ	ナデ		156
3	A-003	第9次	下層調査	IXa層	縄文土器	深鉢	口縁	L縄文横位・鈎付付板	ナデ		156
4	A-001	第9次	下層調査	XV層	縄文土器	深鉢	体部	沈線-LR縄文?(蕨手状)		後期前葉 内外面磨滅	156

第 278 図 第 6 次 (IV 層)・第 9 次 (IX・XV 層) 調査区出土縄文土器

第6章 自然科学分析

長町駅東遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

東北地方中部に位置する仙台市域とその周辺には、蔵王、肘折、鳴子、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、始良など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、火山灰層が認められた長町駅東遺跡においても、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行うことになった。調査分析の対象となった地点は、第5次調査区の河川跡Cトレンチである。

2. 土層の層序

第5次調査区河川跡Cトレンチでは、下位より黄灰色砂層（層厚7cm, IXd層）、白色軽石混じり黄灰色砂層（層厚16cm, 軽石の最大径3mm, IXc層）、桃白色砂質細粒火山灰層（層厚3cm, IXb層）、砂混じり灰色泥層（層厚4cm）、暗灰色泥層（層厚9cm）、黒泥層（層厚2cm）、黄灰色シルト粒子に富む灰色泥層（層厚2cm）、暗灰色泥層（層厚5cm, 以上VII層）、灰色砂層（層厚4cm）、黒灰色泥層（層厚6cm）、灰色砂層（層厚1cm）、暗灰色粘質土（層厚2cm）、灰色砂層（層厚3cm）、暗灰色粘質土（層厚6cm）、灰色シルト層（層厚5cm, 以上VIIc層）、暗灰色粘質土（層厚18cm, VIIb層）、白色軽石混じり黄灰色砂層（層厚11cm, 軽石の最大径3mm）、白色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚8cm, IIIb層）、黄色砂層（層厚3cm）、砂混じり灰色土（層厚2cm）、黄色砂層（層厚2cm）、砂混じり灰色土（層厚16cm, Ib層）、白色軽石や亜円礫混じり灰色砂質土（層厚12cm, 軽石の最大径2mm, Ia層）が認められる（図1）。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析方法

これらのうち、IXb層の桃白色砂質細粒火山灰層（試料8）を対象として、火山ガラス比分析を行い、火山ガラスの色調・形態別比率を求めた。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図2に、その内訳を表1に示す。試料8に含まれる火山ガラスは、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（6.8%）、透明のバブル型（5.2%）、分厚い中間型（4.8%）、スポンジ状に発泡した軽石型（0.4%）である。

4. 屈折率測定

(1) 測定方法

試料 8 に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製，MAIOT）により、屈折率（ n ）の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定結果と仙台市域に分布する代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率（ n ）を表 2 に示す。試料 8 に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.500-1.509 である。

5. 火山ガラスの主成分化学組成分析

(1) 分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、試料 8 に含まれる火山ガラスについて波長分散型エレクトロンプローブ X 線マイクロアナライザー（以下、WDS 型 EPMA とする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子 JXA8600MWDS 型 EPMA である。加速電圧 15kV、照射電流 0.01 μ A、ビーム径 5 μ m の条件で行った。補正法は Oxide ZAF 法を用いた。

(2) 分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表 3 に示す。さらにこの表には、本遺跡とその周辺に分布するおもな指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成を示した。

6. 考察

試料 8（Ixb 層）に含まれる火山ガラスについては、火山ガラスの形態や屈折率、さらに主成分化学組成から、従来仙台市域とその周辺で知られている代表的なテフラの中では、915 年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田 a 火山灰（To-a, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 1992, 2003）の火山ガラスにもっともよく似ているようである。したがって、Ixb 層については、To-a に同定される可能性が考えられる。

7. まとめ

長町駅東遺跡第 5 次調査区河川跡 C トレンチにおいて地質調査を行って層序の記載を行うとともに、細粒火山灰層（Ixb 層）から採取した試料について、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田 a 火山灰（To-a, 915 年）に非常によく似ていることが明らかになり、To-a に同定される可能性が考えられた。

文献

- 青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖海底コア KH94-3, LM 8 の後期更新世テフラ層序。第四紀研究, 39, p.107-120.
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.

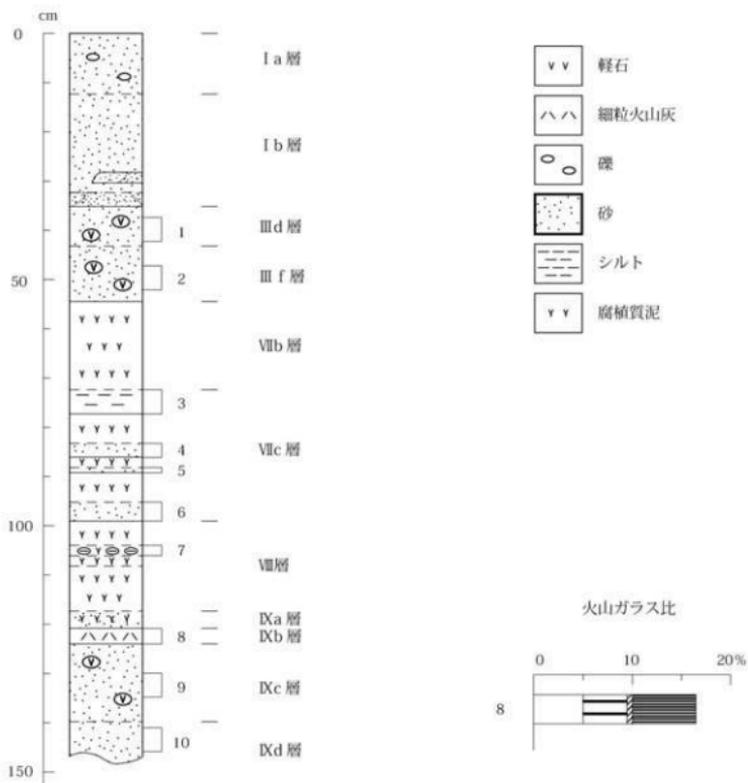


図1 第5次調査区河川跡Cトレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

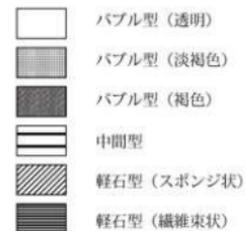


図2 火山ガラス比ダイヤグラム

第279図 第5次調査土層柱状図・火山ガラス比ダイヤグラム

表1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cD)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
53.66-54.00m	13	0	0	12	1	17	207	250

数字は粒子数, bw:バブル型, md:中間型, pm:輝石型, d:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維状

表2 屈折率測定結果

遺跡(テフラ)	試料	火山ガラスの屈折率(n)
長町駅東遺跡	8(Dxb層)	1.502-1.505
十和田a(To-a, AD915)		1.496-1.508(1.500-1.508)
十和田中瓶(To-Cu, 5.5kyBP)		1.508-1.512
射折尾花沢(Hj-O, 10kyBP)		1.499-1.504
十和田八戸(To-H, 12-13kyBP)		1.505-1.509
浅間草津(As-K, 13-14kyBP)		1.502-1.504
始良Tn(AT, 24-25kyBP)		1.499-1.501
鳴子柳沢(Nr-Y, 41-63ka)		1.500-1.503
鳴子荷坂(Nr-N, 90ka)		1.500-1.502
射折北原(Hj-Kth, 90-100ka)		1.499-1.502
洞爺(Toya, 112-115ka)		1.494-1.498

温度変化型屈折率測定装置(MAOT)による。熱標テフラのデータは、町田・新井(1992, 2003)による。KyBP:1,000年前(¹⁴C年代), Ka:1,000年前。

表3 試料と仙台周辺の代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料/テフラ	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	n
8(Dxb層)	77.42	0.37	12.50	1.73	0.09	0.39	2.09	4.00	1.38	0.03	7
	0.50	0.06	0.23	0.06	0.09	0.10	0.09	0.20	0.12	0.02	
十和田a(To-a)	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	-
十和田八戸(To-H)	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30	-	-
浅間草津(As-K)	78.61	0.29	11.97	1.37	0.06	0.24	1.26	3.19	2.97	0.04	-
始良Tn(AT)	78.83	0.12	12.13	1.10	0.04	0.11	0.98	3.33	3.36	-	-
鳴子柳沢(Nr-Y)	79.67	0.16	11.94	1.30	0.06	0.17	1.31	3.62	1.78	-	-
鳴子荷坂(Nr-N)	79.28	0.11	12.09	1.23	0.11	0.11	1.05	4.18	1.83	0.01	-
射折北原(Hj-Kth)	78.63	0.09	12.26	0.70	0.08	0.07	0.68	3.58	3.87	0.03	-
洞爺(Toya)	79.37	0.06	12.48	0.92	0.08	0.03	0.37	3.75	2.94	0.00	-

n:分析ポイント数, 上段が平均値, 下段は標準偏差。熱標テフラのデータは、吉本・新井(2000)および八木(未公表資料)による。

第7章 総括

第1節 古墳時代～古代の出土土器について（第280～294図）

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ80箱以上におよぶ。その大半を占めるのが古墳時代～古代の土師器・須恵器で、登録遺物791点のうち掲載遺物368点を抽出した。本節では「竪穴住居跡」出土の土師器・須恵器を中心に、当時代の土器の特徴について検討を加える。

(1) 時期区分

これまでのあすと長町関係遺跡の時期区分により、1～6期の時期区分が設定された。竪穴住居跡の時期決定については、床面資料を中心として遺構の重複関係を併せて時期区分を行った。

- 1期：5世紀後半、概ね「引田式」に並行する時期である。
- 2期：6世紀代を当期に比定した。当期はさらに2期に細分が可能であり、前半期：初頭～前葉を「2a期」、後半期：中葉～末葉を「2b期」とした。「2b期」は「住社式期」である。
- 3期：7世紀初頭～前葉、「栗園式」古段階に並行する時期である。
- 4期：7世紀中葉～後葉に相当する。郡山Ⅰ期官衙の時期で、その成立から廃絶までの期間を当期に比定した。
- 5期：7世紀末葉～8世紀初頭の時期である。郡山Ⅱ期官衙の時期に並行する。
- 6期：8世紀前葉～末葉に相当する。当期についても8世紀前葉を「6a期」、同中葉～末葉を「6b期」に細分している。

(2) 各期の様相

1期（5世紀後半）

該当する竪穴住居跡として、SI289・SI324・SI328を挙げることができる。このうち、環については全ての竪穴住居跡より出土しており、ここでは最初に当期の環の特徴について取り上げてみたい。

SI289の遺物は、環1点のみである。その特徴をみると体部は半球状を呈し、口縁部と体部との境に明瞭な稜線が残る。底面も平底気味に成形されている。SI324では3点の環を掲載しているが、概ね二つのタイプに分けることができる。一つはこの時期に多くみられる断面半球状を呈するタイプで、口縁部と体部との境に稜線が入り、かつ口縁部は直立気味に立ち上がって端部付近で外反するといった器形である。平底に整形されているC-192と、丸底であるC-195とに細分できる。もう一つは体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部と体部との境に僅かに稜線が入るといったタイプで、底部は高台状を呈するものである。

当期の甕については、4点を掲載した（SI324：2点・SI328：2点）。SI324の甕をみると、大型の甕C-194は胴部が球状を呈し、胴部の中位に最大径を有する。口縁部は「く」字状に外反する。小型の甕C-189は上半部分のみの残存であるため胴部形状は不明であるが、口縁部の反りは弱く、むしろ直線的に外傾する。SI328のC-213は胴部がやや縦長の楕円形を呈し、胴部中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外傾する。C-218は口縁部に最大径をもち、胴部は底部に向かって窄まるタイプである。胴部の内・外面調整としてヘラナデやヘラケズリ、さらにSI328：C-218のように内面にハケメを施すものもみられる。

甕については、SI324において出土した1点を掲載した。底部は単孔で胴部から逆「ハ」字状に窄まり、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で短く外傾するといったタイプである。内・外面ともに胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ調整が施されている。

当期の器種として特徴的なものに、小型壺（埴）がある。SI324・SI328からは、環・甕といった器種と共存

するかたちで出土している。SI324・C-193をみると、口縁部が欠損しているものの胴部は完形に近く、その特徴は胴部最大径が中央より下方に位置するといった下膨れ状を呈し、底部は平底気味に成形されている。一方でSI328・C-217は口縁部が残存する資料であるが、胴部下半は欠損しており、底部形状は不明である。器形の特徴は、最大径を胴部中央に有する球状を呈し、C-193との違いが認められる。口縁部はやや内湾気味に開き、胴部の径に対し口縁部の径が若干小さいといった特徴も併せ持つ。

SI324にみられる環のセットや甗などの類似例として、仙台市所在南小泉遺跡（26次調査）のSI6や、同（30次調査）のSI14、大崎市所在名生館遺跡のSI1315などに求めることができ、これらの報告書によればいずれも5世紀後半と位置付けられている。

2期（6世紀代）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI286・SI287・SI339を2a期、SI283・SI288・SI314・SI349を2b期に比定している。また1期で取り上げたSI289も、2a期にかかると思われる。

2a期に該当する竪穴住居跡出土の土器をみると大半が環で占められており、他の器種としては甗2点・壺1点のみである。環についてみると、SI286以外の竪穴住居跡ではそれぞれ1点ずつの掲載に止まるが、SI339・C-264以外は全て古墳時代中期以来の断面半球状を呈するタイプの環である。口縁部の立ち上がりを見ると、内傾しながら立ち上がるSI287・C-122などが認められ、その他の形状を呈するものでは口縁部の端部が「く」字状に外反するといったタイプに分けられる。一方でSI286の中にはこれと同様の半球状を呈するタイプの環以外に、C-115・119のように須恵器模倣環タイプも認められる。C-115は口縁部と体部との境から直立気味に立ち上がるが、明瞭な段は認められない。逆にC-119では明瞭な段を有し、口縁部も若干外反気味に立ち上がるといった異なる特徴を有している。断面が半球状のタイプの環では、内面の口縁部と体部との境に明瞭な段を有するタイプ（C-116・C-117・C-120）、明瞭な段を有しないタイプ（C-112）、さらに体部と口縁部との境に括れを持たせ「S」字状に外反するといった口縁部を有するタイプ（C-113）とに細分できる。これらに共存する甗は最大径を胴部中央に有し、直立する口縁部と胴部との境には段を有し、底部が平底気味に整形されているものであり（C-118）、このような組み合わせは名生館遺跡のSI1217・SK430などにみることができる。

2b期の遺物出土状況を見ると、SI349を除き比較的まとまったかたちで出土している。このうち環・甗についてはそれぞれの竪穴住居跡から出土しており、まずは当期の環の特徴を中心にみることにする。

当期の環は2a期とは異なり、古墳時代中期以来の断面半球状を呈するタイプの環は殆ど姿を消し、逆に須恵器模倣環が主流になってくる。その特徴をみると、環身の模倣を思わせる口縁部が内傾しながら立ち上がるタイプを中心に、直立状に立ち上がるタイプが認められる。一方で環蓋の模倣を思わせるSI283・C-076なども、僅かではあるが認められるようになる。

甗については、SI283を例にみると大・中・小の3タイプに分けられ、いずれのタイプも口縁部の内・外面ともにヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・内面ヘラナデといった調整技法が主流である。特に小・中型の甗では口縁部の径と胴部の最大径がほぼ等しく、かつ口縁部が短く外反するといった共通点を有する。こうした特徴は、SI288・SI314でも認められることから、当期の甗の特徴として捉えられる。

3期（7世紀初頭～前葉）

当期の遺物を伴う竪穴住居跡として、SI265・SI340を挙げることができる。器種としては、環・甗・壺・鉢が存在する。環についてはSI265・C-010のみであり、2b期より在地で製作されるようになる有段丸底形の系譜を引くタイプである。すでに口縁部と体部との境にみられる段は退化しており、僅かに入る稜線の位置も体部の下端

に移るなどの器形的特徴を有している。内面には全面ヘラミガキ調整が施され、仕上げ技法についても内・外面ともに黒色処理が施されるといった特徴を有する。

裏については、SI265 を例にみると 2 期と同様に大・中・小といった法量分化が認められる。長胴裏の胴部形状をみると、楕円形を呈するタイプ (C-011・006)、胴部上半が円筒状を呈するタイプ (C-012) がある。いずれも口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・ハケメ+ヘラナデ、内面ヘラナデといった調整が施されている。

甗については、SI265 : C-013 がある。胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾し、逆台形に近い器形を呈するタイプで、口縁部と胴部との境が器形上明瞭ではない。外面調整は胴部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ、内面調整は全面ヘラミガキが施されている。

鉢は SI340 : C-265 の 1 点のみであるが、断面半球状を呈し、口縁部と体部との境には段を有する。口縁部は直線状に外傾し、端部で短く屈折するといった特徴を有する。調整は、口縁部内・外面ともにヨコナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ヘラナデである。

4 期 (7 世紀中葉～後葉)

当期に該当する竪穴住居跡として、SI8・SI268・SI271・SI315・SI326・SI331・SI353 を挙げることができる。

この時期の環の特徴として、3 期までの大・中と主に 2 種類の法量が認められる様相から新たに小型の環が加わるようになり、ここで大・中・小といった 3 種類の法量分化が成立する。SI8 : C-003・SI268 : C-022 などがそれらに該当する。

高環については 3 点掲載しているが、いずれも脚部のみしか残存していない。SI268 : C-025 は長方形の透孔が穿かれた短脚タイプで、下方に向かって「ハ」字状に広がり、裾部で大きく屈曲する。また、残存部は脚部上端より 90° 近く屈曲して広がるといった特徴を挙げることができる。

鉢については、SI8 : C-015・SI268 : C-024・SI353 : C-282 の 3 点を掲載した。C-015 をみると、体部と口縁部との境に僅かな段を有し、口縁部は直線的に外傾する須恵器横做環を大型にしたようなタイプで、底面は平底に成形されているといった特徴を有している。一方で C-024 をみると、体部と口縁部との境に段というよりは沈線巡らすといったタイプで、口縁部もやや内湾気味に直立するといった C-015 とは異なる特徴を有している。このことから C-024 は、この時期辺りから出現する銅鏡などの金属器の影響を受けた器種と思われる。調整技法は、いずれも外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面については全面ヘラミガキが施され、その後には黒色処理仕上げを行っている。

裏をみると、球胴裏は最大径が胴部下半に位置し、調整技法は外面ハケメ・内面ヘラナデといったタイプ (SI8 : C-016・SI268 : C-023) と、最大径の位置が胴部中央にあり、外面胴部ヘラケズリ・内面ヘラナデ調整を施すといったタイプがみられる。長胴裏では、胴部上半が円筒状を呈するタイプ (SI271 : C-035・036, SI8 : C-017) が主体を占めている。胴部の調整をみると、外面はヘラケズリとヘラナデがあり、内面はいずれもヘラナデである。

甗は、SI326 : C-204 の 1 点のみの掲載に止まる。胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反し、胴部は球状を呈するといった特徴を有する。調整は口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデである。

この時期になると、これまでの調査により須恵器の出土量が増加する傾向が指摘されているが、今回は図化できるほどの残存状況をもって出土した例は少ない。ここでは、SI331 : E-054 にみられる高台付甗のみの掲載である。最大径の位置が胴部中央のやや上方に位置し、若干肩部が張るといったタイプで、頸部以上が欠損している。内・外面ともに明瞭なロクロ痕が残り、外面には全面に自然軸が付着している。

SI8 で出土した裏や環・鉢といった一括資料と類似する事例として、仙台市所在王ノ塚遺跡の SI201 を挙げるこ

とができる。そこには、SI315・SI268 出土の環・鉢ともに共通する特徴を有するものも認められることから、ほぼ同時期とみて良いものと思われる。なお、王ノ壇遺跡 SI201 については 7 世紀第 3 四半期末～第 4 四半期に位置付けられている。

この他にも、土師器環にみられる法量分化や金属器を模倣した器種の出現、高環脚部の透孔など、いずれもこの時期である 7 世紀中葉～後葉の特色として捉えられるであろう。

5 期（7 世紀末葉～8 世紀初頭）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI310・SI311・SI312・SI318・SI319・SI320 がある。土師器環をみると、これまでの有段丸底環・関東系環に加え、SI310：C-043・045、SI312：C-056 のような口縁部と体部との境にみられる段や稜線が不明瞭で、断面半球状ないし三日月状を呈するタイプが認められるようになる。これらは前段階の鉢にみられた金属器模倣タイプとして捉えられる器種であろう。いずれも内面調整はヘラミガキではあるが、外面についてはヘラミガキ・ヘラケズリといった異なる点も認められる。仕上げ技法をみても、C-056 以外は内・外面ともに黒色処理を施している。有段丸底環の調整技法は、外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面全面ヘラミガキといった定型化がみられる反面、SI320：C-151 のように内面黒色処理を施さない例も存在する。SI319：C-141 は、有段丸底環の特徴である口縁部と体部との境の段が底部付近に位置するタイプで、この時期の特徴として捉えられる資料といえる。

この時期、SI312：C-054・055 のように底部を平底に成形するといったタイプの環が新たに出現する。調整技法をみると、口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・内面ヘラミガキである。長町駅東遺跡第 1・2 次調査の SI33、同第 4 次調査の SI146 に伴う遺物の中に、類似例を見出すことができる。各報告書によれば前者は 5 期、後者は 6 期に位置付けられている。

鉢についてみると、体部から口縁部にかけて内湾し、体部上半に最大径を持たせるタイプ（SI311：C-048）と、口縁部と体部との境に沈線を巡らせ、断面半球状を呈するタイプ（SI318：C-127）とがある。調整は、前者が内・外面ヘラミガキ、後者が外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面全面ヘラミガキである。

甕については、全体像が分かる甕として球胴甕 1 点（SI319：C-149）と長胴甕 2 点（SI318：C-134・135）がある。球胴甕は口縁部が直線的に外傾し、最大径を胴部中央に有し、かつ口縁部と胴部との境に段を有するタイプである。調整は、口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデである。長胴甕は口縁部が直線的に外傾し、胴部上半が円筒状を呈するタイプで、口縁部と胴部との境に沈線を巡らすといった特徴を有する。

須臾器については、環・環蓋・甕などの器種を掲載した。出土量全体でみると、さらに 4 期よりも数量・器種ともに増加が認められる。SI319：E-032 は丸底タイプの環である。体部下端より底部にかけてロクロ調整後にヘラケズリ調整が加えられたもので、体部の立ち上がりは直立に近い。SI318：E-031 は底部回転ヘラ切り、ロクロ調整痕を残す環で、底部から体部への立ち上がりは丸みを持ち、体部が直線的に外傾するタイプである。

環蓋として、SI320：E-036 がある。擬宝珠形のツマミを持つ扁平な器形で、端部は若干外方に「ハ」字状に開いて垂下する。

この時期の特徴として、土師器環の製作技法が定型化の方向に進むとともに、新たに底部が平底に成形された環も出現することが挙げられるであろう。

6 期（8 世紀前葉～末葉）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI275・SI325 を 6a 期、SI321・SI333 を 6b 期に比定した。また、SI316A・316B を 6a 期～6b 期に比定している。ここでは SI316A・316B を除く 4 軒の例について、取り上げて

みたい。

この時期になると、土器組成に対し須恵器の占める割合が飛躍的に上がるとともに、新たな技法としてのロクロ土師器が出現するようになる。逆に、これまで土師器環の主流であった有段丸底環は姿を消し、SI325・C-199・SI333：C-242のような無段・平底化したタイプが増加する。

須恵器の中で、最も多く出土する器種として環があり、さらに甕・鉢・環蓋・壺と続く。環について言えば、この時期に土師器環を上回る比率を占める竪穴住居跡も認められるようになる。SI275より出土した環をみると、いずれも底部回転ヘラ切り後に底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すといったタイプである。これらを口縁部径 13.7～14.3cm・器高 3.1～3.6cm（器高が低いタイプ）、口縁部径 13.6～14.9cm・器高 4.0～4.4cm（器高が中程度のタイプ）、口縁部径 16.0cm・器高 6.9cm（器高が高いタイプ）と分類し、同類の環を産出する県内及び周辺に存在する窯跡及び窯跡関連施設から出土した環の法量を比較した結果、8世紀第1～第2四半期のものに近似値が求められた。これらの窯で用いられている調整技法も一致することから、器形的な特徴と併せここでは8世紀第1四半期後半～第2四半期前半と位置付けたい^(註1)。同様に、SI325：E-049についても同時期と捉えている。

甕では、SI275・SI321出土の3点の例を挙げる。口縁部の特徴として、上方で外反し端部に突帯を巡らすタイプ（SI321：E-039）と、短く屈曲し端部が直立して受口状を呈するタイプ（SI321：E-045）に分けられる。底部の形状が丸底タイプの例も見受けられる（SI275：E-006）。

環蓋は、SI275以外の竪穴住居跡で出土しており、扁平なタイプ（SI325：E-048）と器高が高いタイプ（SI333：E-056・061・062）に分けることができる。

鉢については、SI333：E-067がある。口縁部は短く外反し、口縁部と胴部との境には緩やかな段を設け、胴部は底部に向かって緩やかに窄まるといった器形を呈する。胴部外面には平行タキ目が残るが、内面はロクロナデである。器形的な特徴から8世紀後半として位置付けたい。

この時期より、新たにロクロ土師器が製作されるようになる。第9次調査においても、SI321から3点の甕が出土している。その特徴をみるといずれも口縁部は短く、大きく屈曲しながら外傾するといったタイプである。胴部は残存状況から推定すると、最大径が中央に位置し、緩やかに膨らむ楕円形状であったと思われる。異なる点では口縁部の端部外面に1条の沈線を巡らすタイプ（D-001）と、沈線のないタイプ（D-002）があり、さらに調整技法として前者の胴部外面に施されているヘラミガキが、後者では認められないといった特徴を指摘することができる。ロクロ土師器については、あすと長町関連遺跡の今までの調査所見などから8世紀後半及びそれ以降として位置付けられ、本書でも6b期としている。

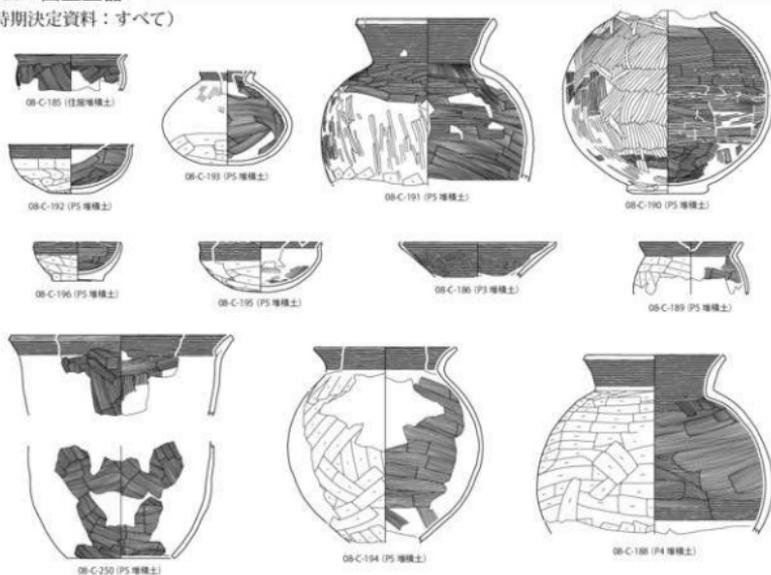
註1 ここでは、東北古代土器研究会が平成20年に刊行した「東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—」<陸奥>から7世紀末～8世紀代の窯跡を抽出、そこに掲載されている実測図を計測するといった簡便な手法で、それぞれのタイプ別に示された数値に近い窯跡ごとに列記したものである。なお、数値についてはあくまでもSI275出土遺物の個々の数値を、当該窯跡出土遺物の計測値に当てはめたデータであることをご了承願いたい。結果は、以下の通りである。いずれも8世紀第1四半期～第2四半期の範疇に入る。

器高が低いタイプ	木戸窯跡・木戸A地点3号窯・萱刈場窯A地点2号窯
器高が中程度のタイプ	木戸C地点1号窯・日の出山窯C地点1号窯・鳥屋窯三角田南地区1号窯
器高が高いタイプ	日の出山窯C地点3号竪穴住居跡

1 期

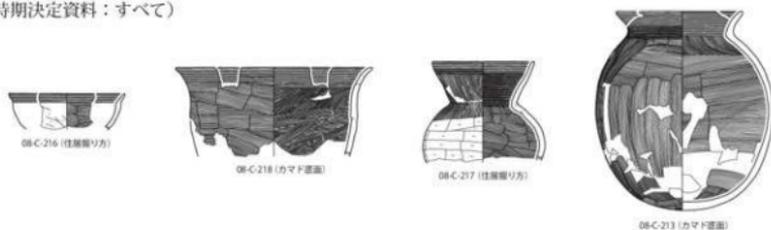
SI324 出土土器

(時期決定資料：すべて)



SI328 出土土器

(時期決定資料：すべて)



2a 期

SI339 出土土器

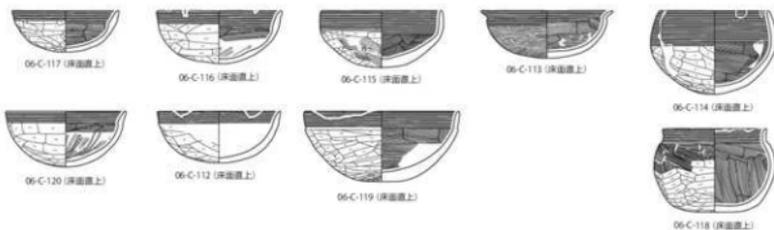
(時期決定資料：左 2 点)



第 281 図 竪穴住居跡出土土器集成図－1 期・2 期 (1)

SI286 出土土器

(時期決定資料：すべて)



SI287 出土土器

(時期決定資料：すべて)



SI289 出土土器 (※1～2a 期)

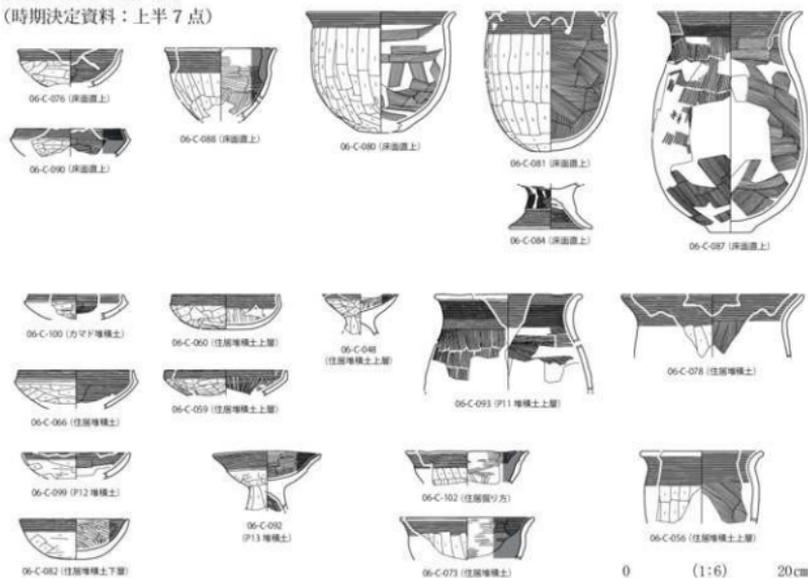
(時期決定資料：すべて)



2b 期

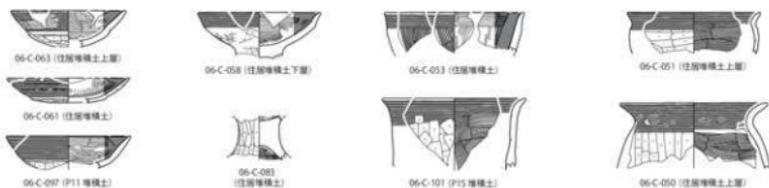
SI283 出土土器 (1)

(時期決定資料：上半 7 点)



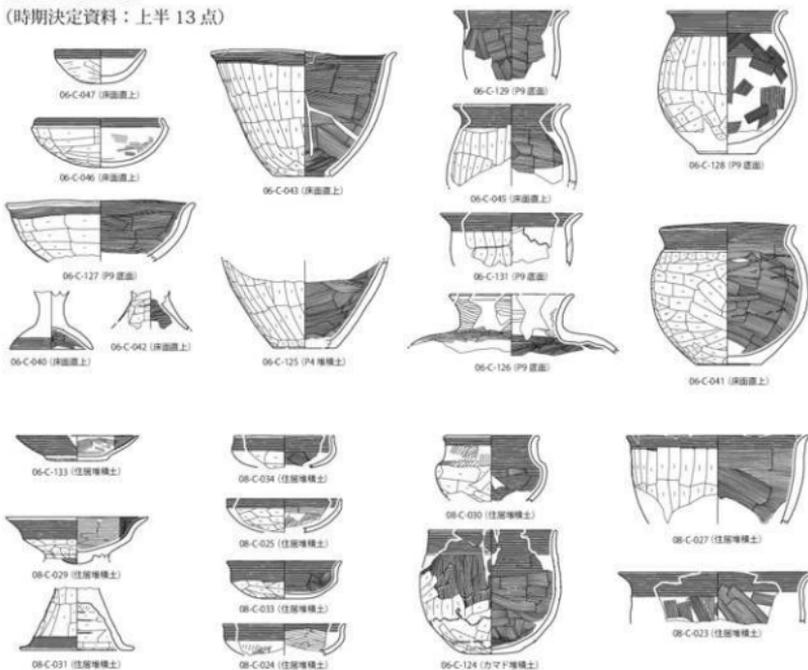
第 282 図 竪穴住居跡出土土器集成図－2 期 (2)

SI283 出土土器 (2)



SI288 出土土器

(時期決定資料：上半 13 点)



SI349 出土土器

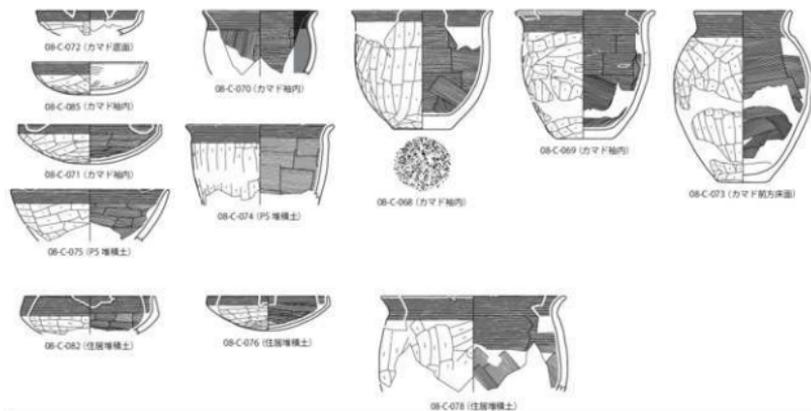
(時期決定資料：左 1 点)



第 283 图 竪穴住居跡出土土器集成図- 2 期 (3)

SI314 出土土器

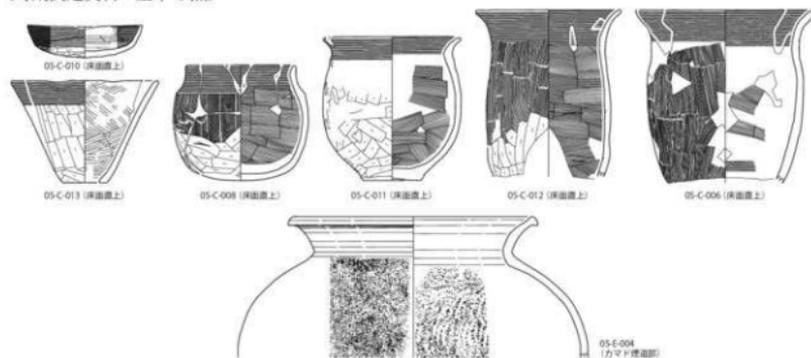
(時期決定資料：上半9点)



3期

SI265 出土土器

(時期決定資料：上半6点)



SI340 出土土器

(時期決定資料：左1点)

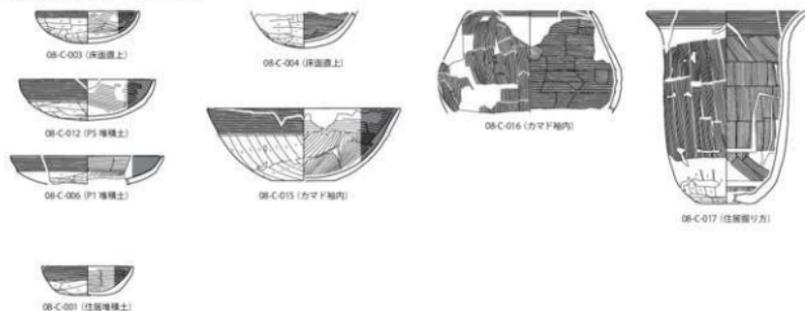


第 284 図 竪穴住居跡出土土器集成図－2 期 (4)・3 期

4期

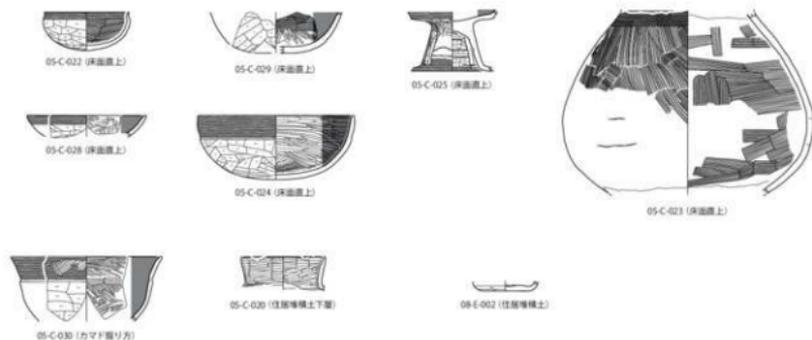
SI8 出土土器

(時期決定資料：上半7点)



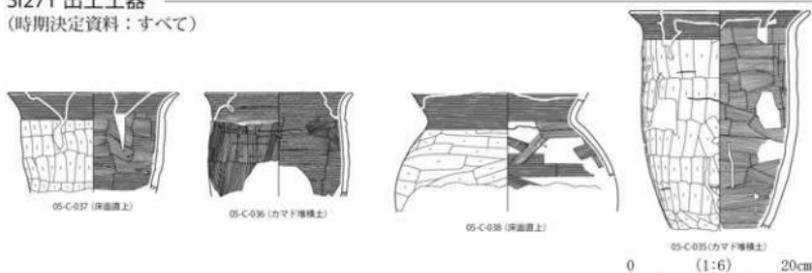
SI268 出土土器

(時期決定資料：上半6点)



SI271 出土土器

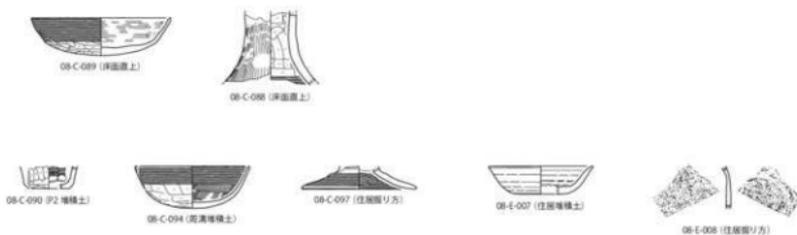
(時期決定資料：すべて)



第 285 図 竪穴住居跡出土土器集成図－4期 (1)

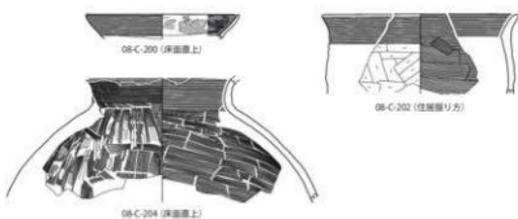
SI315 出土土器

(時期決定資料：上半 2 点)



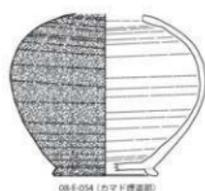
SI326 出土土器

(時期決定資料：左 2 点)



SI331 出土土器

(時期決定資料：すべて)



SI353 出土土器

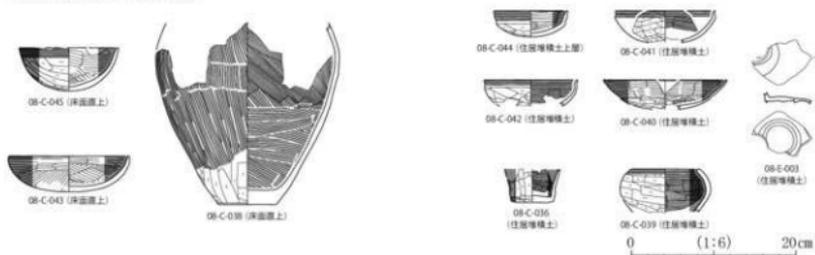
(時期決定資料：左 2 点)



5 期

SI310 出土土器

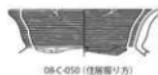
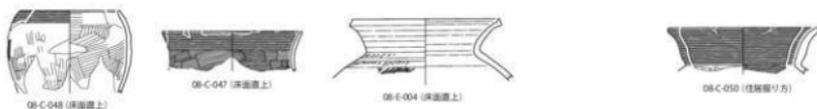
(時期決定資料：左 3 点)



第 286 図 竪穴住居跡出土土器集成図－4 期 (2)・5 期 (1)

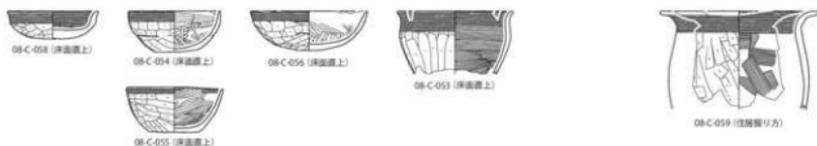
SI311 出土土器

(時期決定資料：左 3 点)



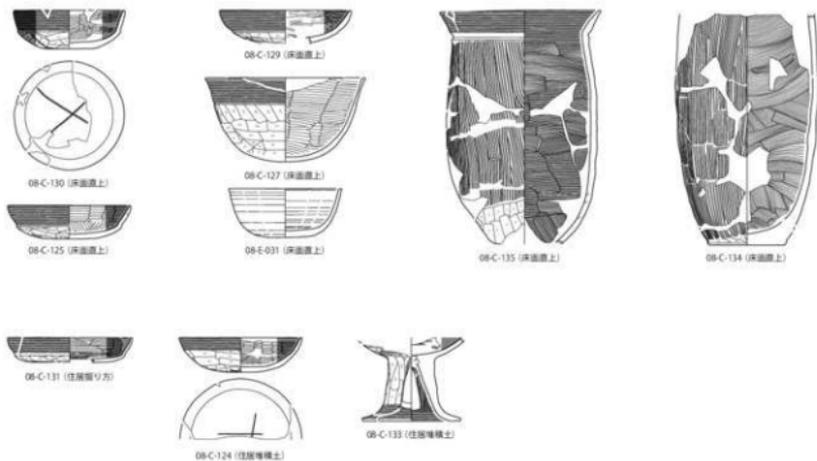
SI312 出土土器

(時期決定資料：左 5 点)



SI318 出土土器

(時期決定資料：上半 7 点)

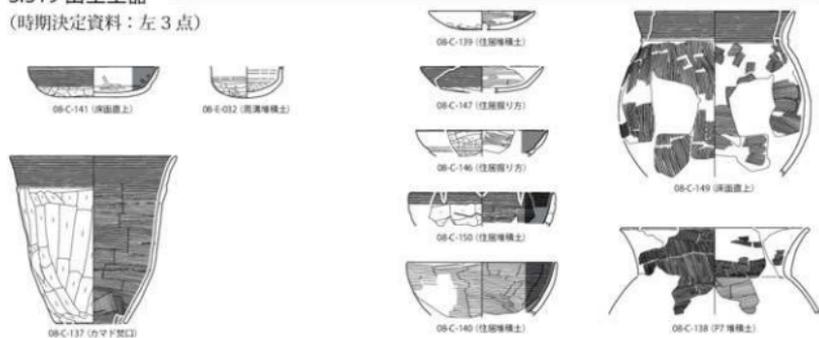


0 (1:6) 20cm

第 287 图 竪六住居跡出土土器集成图— 5 期 (2)

SI319 出土土器

(時期決定資料：左3点)



SI320 出土土器

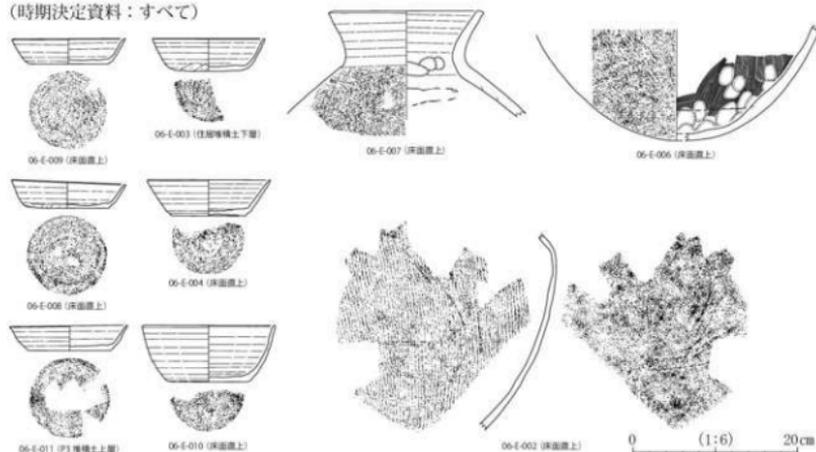
(時期決定資料：上半4点)



6a 期

SI275 出土土器

(時期決定資料：すべて)



第 288 図 竪穴住居跡出土土器集成図—5 期 (3)・6 期 (1)

SI325 出土土器

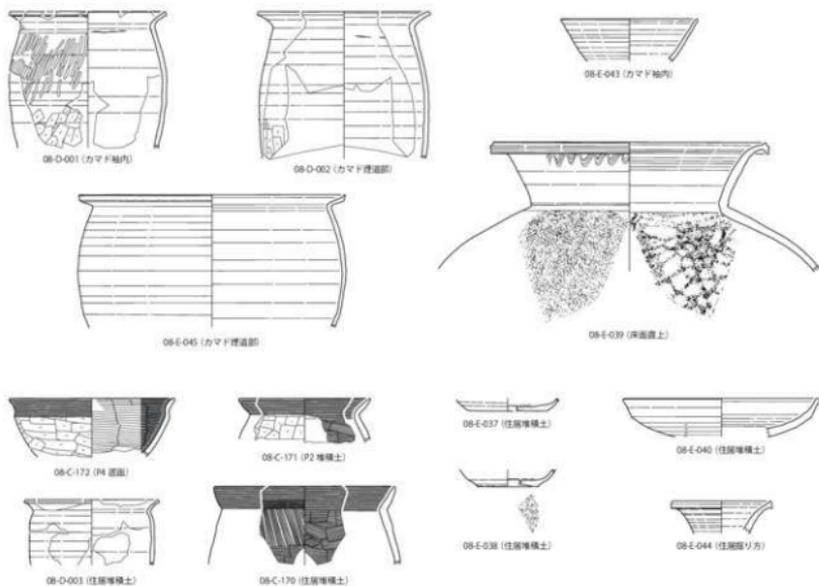
(時期決定資料：左3点)



6b 期

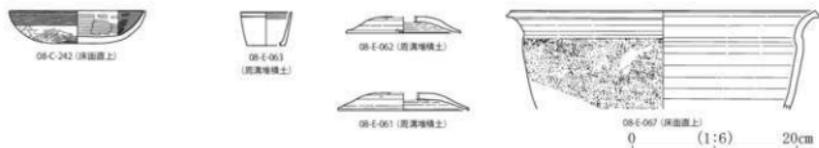
SI321 出土土器

(時期決定資料：上半5点)



SI333 出土土器 (1)

(時期決定資料：5点)



第 289 図 竪穴住居跡出土土器集成図-6 期 (2)

SI333 出土土器 (2)



08-C-239 (住居壁リ方)



08-C-236 (住居増積土)



08-C-247 (方マド増積土)



08-E-066 (住居壁リ方)



08-E-036 (住居増積土)



08-E-058 (住居増積土)



08-E-065 (住居壁リ方)

6a ~ 6b 期

SI277 出土土器

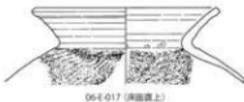
(時期決定資料：上半 5 点)



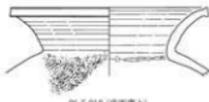
06-C-027 (床面直上)



06-C-023 (床面直上)



06-E-017 (床面直上)



06-E-018 (床面直上)



06-C-022 (床面直上)



06-C-019 (住居増積土)



06-C-018 (住居増積土)



06-E-015 (住居増積土)

SI316A 出土土器

(時期決定資料：左 2 点)



08-C-109 (瓦溝増積土)



08-C-120 (P4 増積土)



08-E-016 (住居増積土)



08-E-015 (住居増積土)



08-C-098 (方マド増積土)



08-E-012 (住居増積土)



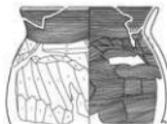
08-E-017 (住居増積土)



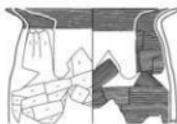
08-C-106 (住居増積土)



08-E-020 (床面直上)



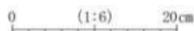
08-C-108 (床面直上)



08-C-101 (住居増積土)



08-E-013 (住居増積土)



第 290 図 竪穴住居跡出土土器集成図 - 6 期 (3)

SI316B 出土土器

(時期決定資料：左1点)



時期不確定

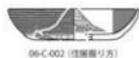
SI264 出土土器

(3期以前)



SI273 出土土器

(5期以降)



SI276 出土土器

(2b～5期)



SI284 出土土器

(4～5期以前)



SI313 出土土器

(2b期以降)



0 (1:6) 20cm

第291図 竪六住居跡出土土器集成図-6期(4)・時期不確定(1)

SI317 出土土器
(4期以降)



08-C-123 (住居堆積土)

SI323 出土土器
(4～6b期)



08-C-179
(住居層リ方)



08-C-182 (住居層リ方)

SI327 出土土器
(5～6b期)



08-C-206 (住居層リ方)

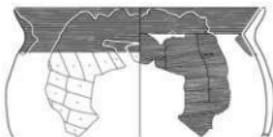


08-E-050
(住居層リ方)

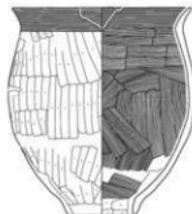
SI329 出土土器
(3期以降)



08-C-223 (床面遺土)



08-C-227 (PS 堆積土)



08-C-224 (床面遺土)



08-E-051 (床面遺土)



08-C-226 (カマド内)



08-C-228 (P3 堆積土)

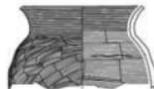


08-C-230 (住居堆積土)

SI330 出土土器
(2b期以降)



08-C-231 (住居堆積土)



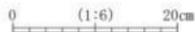
08-C-233 (カマド堆積土)



08-C-232 (住居堆積土)

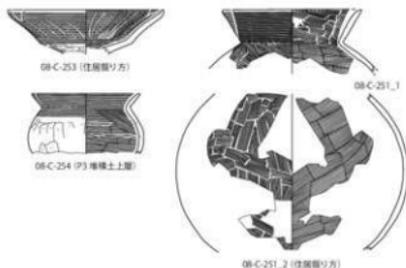


08-E-053 (住居堆積土)



第 292 図 竪穴住居跡出土土器集成図—時期不確定 (2)

SI335 出土土器
(2期以前?)



SI352 出土土器
(2b期以前)

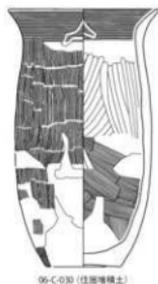


時期不明

SI272 出土土器



SI281 出土土器



SI344 出土土器



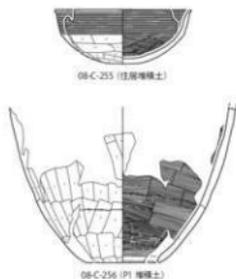
SI285 出土土器



SI322 出土土器



SI338 出土土器



0 (1:6) 20cm

第 293 図 竪穴住居跡出土土器集成図-時期不確定 (3)・時期不明

SB37 出土土器



08-E-071 (P6 埴輪土中器)



08-E-070 (P6 埴輪土土器)

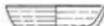
SD7 出土土器



08-E-079



08-E-081



08-E-077



08-E-078



08-E-074

SD180 出土土器



08-C-295



06-C-144



08-C-296



08-E-083



06-C-143

SD182 出土土器



06-C-146

SD205 出土土器



08-C-301



08-C-307



08-C-298



06-C-153



08-C-303



08-C-300



08-C-151



08-C-299



06-C-150



08-E-088



06-E-030



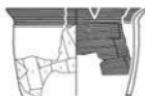
06-E-032

SD224 出土土器



06-E-034

SD266 出土土器



08-C-310

※すべて埴輪土から出土



08-C-311



06-E-035

0 (1:6) 20cm

第 294 図 掘立柱建物跡・溝跡出土土器集成図

第2節 古墳時代～古代の集落について（第295～310図）

古墳時代～古代の当遺跡内は、主に竪穴住居跡で構成される「集落」として機能してきた。この集落は外縁に溝跡や材木列跡、一本柱列跡といった区画施設を伴うものであり、一般的な集落とは構造を異にする。既述したが、長町駅東遺跡の集落成立には郡山官衙の造営から多賀城への機能移転に至るまでの政治的な動向が密接に絡み、従来の集落から公的な性格を帯びた拠点集落へと整備されていったことが指摘されている。本節ではこの指摘を鑑み、集落の主要構成遺構である「竪穴住居跡」を中心にその時期的変遷を追ってみる。加えて「掘立柱建物跡」「材木列跡」といった付属的な施設についても、再度取り上げてみたい。

（1）竪穴住居跡（第295～300図）

今回の調査では、84軒が検出された。遺跡全体では未調査部分も含め、400軒を超えるものと考えられる。今回の報告部分は竪穴住居跡の密度が濃く、SI316Aのように最大で13軒の重複関係が認められる例もある。このため残存状況が芳しくない竪穴住居跡も多数存在するが、復元部分を含み、ある程度原形の把握が可能な竪穴住居跡は53軒を数える。以降、これらの竪穴住居跡につき「規模・形態・方向」「床面（掘り方）」「柱穴」「カマド」「その他の施設」の5つの項目ごとにまとめを行うが、「周溝」については全容不明の竪穴住居跡が多いため割愛した。また、SI279は「平地式建物跡」の可能性があり、他の竪穴住居跡とは切り離して「特殊建物跡」として記述する（「属性表」には併記）。

①竪穴住居跡の構造について

【規模・形態・方向】

確認できた平面形状は、全て方形基調である。特に正方形のプランをもつ竪穴住居跡が半数以上を占めている。SI7・287・316A・333・327のように長方形を呈する竪穴住居跡や、SI8・265・267・268・284・310・317・318・322・328・329・348など片方の辺が広がる不整形の竪穴住居跡もある。

規模は、長軸2.52（残存値）×短軸2.42mを測るSI275が最小規模である。この竪穴住居跡は床面の中央に浅い土坑を伴い、カマドが付設された痕跡も認められないことから、特殊な性格をもつ施設と考えられる。床面からは多量の土師器や須臾器、礫のほか、鉄滓や糶（ふいご）の羽口などが出土している。最大規模の竪穴住居跡としては、長軸8.42×短軸6.63mのSI316Aが挙げられる。SI325→SI316B→SI316Aの順で2回にわたって拡張されたと考えられ、SI316Aはその最終的な形態といえる。これらの竪穴住居跡からは破片ではあるが円面硯や瓦、鉄鍬やその他の武器の一部とみられる棒状鉄製品・環状鉄製品が出土しており、他の竪穴住居跡とは異なる性格が考えられる。なお、今回の調査で検出された竪穴住居跡は概ね4～5m級の規模が主体である。

方位は真北から西に傾くものが主体である。カマドの位置を無視し、四壁の方向だけを見れば振れが30°未満に収まるものが30軒、30～40°の間が14軒である。これは河川跡の方向性に概ね一致するものであり、地形的な制約が竪穴住居跡の方位に影響していたことが窺える。逆に東側に振れる竪穴住居跡は30°未満が5軒であり、45°前後振れる竪穴住居跡は4軒である。

【床面（掘り方）】

殆どの竪穴住居跡で掘り方が認められた。掘り方形状は様々で、規則性は見出し難い。SI268のように四壁際が下がり、中央部分が島状に高まるといった整然とした掘り方も存在する。SI262の掘り方土は、全体が30cm前後の厚みを有していた。粘土のような選定された素材で構築された床は認められず、全て基本層IV層土を基本材とした混土を使用している。SI268・312・325の底面からは、鋤先状の工具痕が検出されている。

長町駅東通跡第5・6・9次調査 竪穴住居跡の属性一覧(1)

住居番号	Y・X ¹⁾	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸(m)	床面高(m)	方位	竪出基壇	付設位置	燃焼部位置	築造素材※1は芯材	長さ(m)	断面	煙出し			
S4	04	方形	393×548	0.24	N-26°W	西壁	北壁	—	—	—	—	—	—	4	北西コーナー付近を焼出。大平部分第1・2次調査で焼出。
S7	15	長方形	491×387	0.4	N-18°W	東壁	—	—	—	—	—	—	—	4	北西コーナー付近を焼出。大平部分第1次調査で焼出。
S8	24-25	方形?	672×583	0.61	N-29°W	カマド	北壁	内	盛土(腐炭質切石)	69	平坦	—	土坑7基(1基は竪穴・4基はカマド関連?)	4	カマド前方～北西コーナーを焼出。南東部分第1・2次調査で焼出。
SI262	14	方形or長方形	(285)×(213)	0.70	N-24°W	西壁	—	—	—	—	—	—	—	6b	南西部分を焼出。大平部分調査区外。
SI263	14-20	方形or長方形	(335)×(125)	0.58	N-15°W	南壁	—	—	—	—	—	—	—	不明	南側の一部分が残存。
SI264	13-14 19-20	方形or長方形	(560)×(134)	0.61	N-55°E	カマド	東壁	内	盛土(芯材瓦葺面?先隔にビット)	90	平坦	—	—	3 以前	東平部分が残存。
SI265	19-20 22-23	方形?	452×(350)	0.44	N-21°W	カマド	北壁	やや外	盛土(腐炭質切石)	112	やや上がる	—	—	3	西壁消失。
SI266	13-19	方形or長方形	(320)×(300)	0.34	N-23°W	東壁	—	—	—	—	—	—	—	不明	南東部分と土柱が残存。
SI267	20-23	方形or長方形	(546)×(460)	0.79	N-38°W	東壁	北壁	やや外	—	71	平坦	—	土坑1基	2b ～ 4	カマド～南東コーナーの床面と掘り方が残存。
SI268	22-25 (320) 01～04 (930)	方形	394×356	0.45	N-8°W	カマド	北壁	やや外	盛土	185	やや下がる	ビット状	ビット2基(竪穴?)	4	南西コーナー～西壁の一部が消失。
SI269	18-19 21-22	方形or長方形	(337)×(315)	0.41	N-67°E	南壁	北壁	内	—	—	—	—	—	不明	東・西・北の壁が消失。
SI270	19-20	方形or長方形	(497)×(194)	0.50	N-22°W	東壁	—	—	—	—	—	—	—	不明	北東部分を中心に残存。
SI271	19-22	長方形?	(397)×(352)	0.45	N-50°E	カマド	東壁	内	盛土(腐炭質切石)	194	平坦	—	—	4	カマド前方～南東部分が残存。
SI272	13-14	方形	446×411	0.20	N-18°W	西壁	—	—	—	—	—	—	—	不明	北東部分調査区外。
SI273	05-07	方形or長方形	(200)×(210)	0.59	N-33°E	西壁	—	—	—	—	—	—	土坑1基	5 以降	北西コーナー付近が残存。
SI274	06	方形or長方形	(259)×(148)	0.78	N-27°W	カマド	北壁	内?	北壁内外に芯材瓦葺面?ビット一母	—	—	—	—	不明	北無掘り方のごく一部が残存。
SI275	03	方形?	(252)×242	0.68	N-19°W	東壁	—	—	—	—	—	—	ビット1基 土坑3基	6a	西壁消失。
SI276	07	方形or長方形	(418)×(352)	0.64	N-67°W	北壁	—	—	—	—	—	—	土坑2基	2b ～ 5	壁は北西コーナー付近が残存。
SI277	04-06	方形or長方形	(284)×(166)	0.27	N-72°W	南壁	—	—	—	—	—	—	—	6a ～ 6b	南西部分が残存。
SI278	03-05	方形or長方形	(303)×(205)	0.70	N-20°W	西壁	—	—	—	—	—	—	—	4 ～ 6a	南壁付近と西壁の一部が残存。
SI279	05-06	円形?	(506)×(294)	0.79	N-39°W	柱穴配置	—	—	—	—	—	—	—	2b 以降	周溝と土柱穴を焼出。「平地式建物」か。

長町駅東通第5・6・9次調査 竪穴住居跡の属性一覧(2)

住居番号	年代*	平面形状・規模			軸方位		カマド				煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸 (m)	床面積 (m ²)	方位	竪出基準	付設位置	燃焼位置	竪煙管材 ※(1)は芯材	長さ (m)	底面	煙出し				
SZ280	14-20	方形or 長方形	(334) × (92)	9.72	N-45°-W	カマド	南壁	内	-	-	-	-	-	-	不明	カマドと南壁付近の床面 以下が残り。
SZ281	04-06	方形or 長方形	510 × (265)	9.35	N-38°-E	南壁	-	-	-	-	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	不明	南側1/3部分が残り。
SZ283	03-05	方形	625 × 612	9.25	N-75°-W	カマド	西壁	内	盛土	-	-	-	-	床面から土坑5基 (貯蔵穴?) 掘り方から土坑2基	2b	北東コーナー消失。
SZ284	05	方形	388 × 380	9.30	N-20°-W	カマド	北壁	内	盛土	71	やや 上がる	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	4 ～ 5	北東コーナーと西壁上部 が消失。床面から30m大の 白色粘土塊3個出土。
SZ285	14-20	方形?	(305) × (276)	掘り方 9.68	N-33°-W	カマド	北壁	やや外	-	-	-	-	-	土坑2基	不明	カマド底面と掘り方が 残り。
SZ286	03-04 06	方形or 長方形	327 × (145)	9.38	N-32°-W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	-	2a	南側部分が残り。
SZ287	05-06	長方形	420 × 326	9.42	N-25°-E	西壁	北西	床面	地床材 長×短×深さcm 47×31×4			-	-	土坑3基 (1基は貯蔵穴?)	2a	北壁消失。
SZ288	07(6.30) 05-09 (9.2)	方形	(616) × (600)	9.41	N-19°-W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	-	土坑2基(貯蔵穴?) 掘り方から土坑3基	2b	北側部分消失。
SZ289	03～ 06	方形or 長方形	(362) × (336)	9.34	N-25°-W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	-	1 ～ 2a	中央～南西コーナー付近 が残り。
SZ290	05	方形	340 × 330	掘り方 9.12	N-33°-W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	-	2b 以前	南西コーナー付近の壁と 掘り方が残り。
SZ310	09-14	不整 方形	472 × 467	9.47	N-12°-W	カマド	北壁	内	盛土	(109)	平坦	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	5	北東コーナー消失。
SZ311	40-44	方形or 長方形	(423) × (325)	9.43	N-6°-W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	-	5	東側1/3部分消失。床面以 下が残り。
SZ312	36-40 41-44	楕円 方形	494 × 488	9.48	N-23°-W	カマド	北壁	内	盛土	66	平坦	ビット 状	-	土坑1基(貯蔵穴?)	5	床面に白色粘土塊約 3個あり。
SZ313	41	不整 方形	325 × 325	9.43	N-77°-E	カマド	東壁	内	盛土	-	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	2b 以降	東西に分割。
SZ314	36-37 40-41	方形	722 × 688	9.47	N-18°-W	カマド	北壁	内	盛土 (土師器敷)	-	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	2b	東西に分割。南東コーナー 調査済み。
SZ315	23-24 28-29 33	方形	540 × 535	9.69	N-30°-W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	-	土坑6基(1基は貯蔵穴 4基はカマド関連?)	4	南北に分割。
SZ316 A	13-18 19-23 24	長方形	842 × 663	9.52	N-15°-W	カマド	北壁	内	盛土	265	やや 下がる	-	-	土坑2基 (1基は貯蔵穴?)	6a ～ 6b	東西に分割。SZ316Bの西壁 を拡張した住居か。
SZ316 B	13-18 19-23 24	方形	702 × 663	9.49	N-15°-W	カマド	北壁	内	-	265	平坦	ビット 状	-	土坑1基(貯蔵穴?)	6a ～ 6b	東西に分割。SZ325の東・南 ・北壁を拡張した住居か。
SZ317	01-03 04	長方形?	(421) × 395	9.49	N-68°-E	カマド	東壁	内	盛土	-	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	4 以降	北西側1/3部分の床面と北 壁が消失。
SZ318	08-09 13-14	不整 方形	427 × 374	9.61	N-37°-W	カマド	北壁	内	-	(155)	やや 下がる	-	-	-	5	東西に分割。
SZ319	13-14 18-19	不整 方形	529 × 470	9.55	N-48°-W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	-	ビット3基(2基は カマド関連?)・土坑 3基(1基は貯蔵穴?)	5	東西に分割。北東コーナー と南西部分が消失。

長町駅東通跡第5・6・9次調査 竪穴住居跡の属性一覧(3)

住居番号	Y座!	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸(m)	床面積高(m)	方位	掘出基準	付設位置	燃焼部位置	軸構造材※(1)は芯材	長さ(m)	断面	掘出し			
SE320	14・19	不整形? 方形?	488 × 458	0.58	N-36°W	カマド	北壁	内	盛土	140	やや下がる	-	土坑4基(1基は貯蔵穴?)	5	北西部分消失。
SE321	08・13	方形	500 × 497	0.61	N-13°W	カマド	北壁	内	盛土 ※遺物混入	230	やや下がる	ビット状	土坑2基(1基は貯蔵穴?)	6b 後半以降	
SE322	03・07	不整形 方形	329 × 300	0.46	N-11°W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	土坑1基(カマド煙道?)	不明	北壁消失。
SE323	44・45 48・49	方形or 長方形	(480) × (408)	0.68	N-12°W	カマド	北壁	やや外	盛土	[111]	-	ビット状	土坑2基	4 ～ 6b	西・北壁消失。
SE324	07・12	方形?	(377) × (356)	0.46	N-73°E	カマド	東壁	内	-	-	-	-	土坑4基(1基は貯蔵穴?)	1	掘り方と床面東半部分が残り。
SE325	18・19 23・24	長方形	632 × 535	0.33	N-13°W	カマド	北壁	内	盛土	[175]	やや下がる	-	ビット3基(2基はカマド煙道?) 土坑1基	6a	大部分の壁が消失。 床面全体を掘出。
SE326	48・49	方形or 長方形	(435) × 400	0.50	N-83°E	カマド	東壁	やや外	盛土	-	-	-	土坑1基	4	カマド付近の東壁と床面以下が残り。
SE327	07・08 12・13	長方形?	(541) × 476	0.47	N-32°W	カマド	北壁	内	-	117	やや下がる	-	ビット1基(カマド煙道?) 土坑3基(1基はカマド煙道?)	5 ～ 6b	南半部分は掘り方が残り。
SE328	04・08	不整形 方形	416 × 354	0.62	N-83°E	カマド	東壁	内	盛土	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	1	南壁消失。
SE329	23・28	不整形 方形	441 × 397	0.51	N-32°W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	3 以降	東西に分断。南東コーナー・北東コーナー消失。
SE330	18・23	方形	353 × 352	0.50	N-37°W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	2b 以降	南東コーナー消失。
SE331	19	不明	-	0.64	N-78°E	カマド	東壁	-	-	(181)	やや下がる	-	-	4	カマド煙道部のみ残り。 掘出し底部に平瓦葺部も確認。
SE332	13・18	方形or 長方形	(334) × (234)	0.62	N-36°W	カマド	東壁	内	盛土	-	-	-	土坑2基	2b 以前	カマド～北壁部分が残り。
SE333	24・29	長方形	523 × 410	0.60	N-2°W	カマド	北壁	内	盛土	197	やや下がる	ビット状	土坑3基(2基は貯蔵穴・1基はカマド煙道?)	6b	東壁調査区外。
SE334	18	方形or 長方形	400 × (260)	0.48	N-45°E	カマド	東壁	内?	盛土	-	-	-	土坑2基(1基は貯蔵穴?)	不明	北壁部分が「コ」字状に残存。
SE335	03・07	方形or 長方形	(597) × (524)	掘り方 9.30	N-25°W	東壁	-	-	-	-	-	-	土坑1基(カマド煙道?)	2 以前 7	掘り方が残り。西側部分調査区外。
SE336	28・29 32・33	方形	410 × 370	0.72	N-25°W	南壁	-	-	-	-	-	-	-	4 以前	北壁消失。
SE337	18・23	方形or 長方形	(344) × (172)	0.52	N-38°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	2b 以降	北壁消失。北西部分が残り。
SE338	28・32	方形or 長方形	(316) × (307)	0.60	N-38°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	不明	東・南・北壁消失。
SE339	33・37	方形?	(485) × (483)	0.56	N-18°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	2a	北壁東部・南西コーナー消失。南東部分調査区外。
SE340	14・19	方形?	(639) × (627)	0.53	N-23°W	カマド	北壁	内	盛土	-	-	-	土坑1基(貯蔵穴?)	3	西壁・床面の大部分が消失。

長町駅東通跡第5・6・9次調査 竪穴住居跡の属性一覧(4)

住居番号	年代	平面形状・規模			軸方位		カマド				煙道部		その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸(m)	床面積高(m)	方位	基出基準	付設位置	燃焼部位置	給排煙材※(1)は芯材	長さ(m)	成層	煙出し			
SI341	29・33	不明	(161) × (36)	9.64	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	4以前	東壁付近の一部が残存。
SI342	23・28	不明	(226) × (25)	9.55	N-59°E	西壁	-	-	-	-	-	-	-	3以前	西壁の一部が残存。
SI343	23・24 28・29	不明	(480) × (245)	9.54	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	4以前	床面の一部が残存。
SI344	13・18	不明	(193) × (152)	9.60	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	一部の床面以下が残存。
SI345	33	方形or 長方形	(215) × (108)	9.65	N-20°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	2a	北西コーナー付近が残存、 東側部分調査区外。
SI346	24	方形or 長方形	(400) × (112)	9.53	N-79°E	南壁	-	-	-	-	-	-	-	4	南壁～東西南コーナー付近 が残存。
SI347	41	不明	(106) × (96)	9.63	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	2b	南壁付近の一部が残存、 東側調査区外。
SI348	24・29	方形or 長方形?	(520) × (454)	9.47	N-32°W	カマド	北壁	-	-	(134)	平坦	-	-	4	南壁・北壁消失。
SI349	23	長方形or 方形	(356) × (214)	9.52	N-45°E	西壁	-	-	-	-	-	-	-	2b	北西部分が残存。
SI350	29	方形or 長方形	(232) × (121)	9.62	N-7°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	4以前	床面の一部が残存。
SI351	09	方形or 長方形	(255) × (131)	9.56	N-38°E	北壁	-	-	-	-	-	-	-	5以前	南壁・北壁・床面の一部が 残存。
SI352	23・28	方形or 長方形	(412) × (158)	9.56	N-5°W	西壁	-	-	-	-	-	-	-	不明	西側部分が残存。
SI353	24・29	方形	650 × 625	9.44	N-23°E	西壁	-	-	-	-	-	-	-	4	南側の床面・壁が消失。

※規模について、()は現存値、[]は推定値を表す。

※床面積高は、各住居跡における最も低い値を示した。

※カマド燃焼部位置は、壁面の内側に構築されるものを「内」、壁面の外側に1/2程度張り出すものを「中」、全体が張り出すものを「外」とした。

※煙道部断面の「下」の表記は、煙出し方向を示す。

【柱穴】

柱穴配置が明らかになった竪穴住居跡は43軒存在する。住居範囲の対角線上に主柱穴4基を配置するのが基本形態で、大半の竪穴住居跡がこれに該当する。ただし4基が配置される場合でも、SI340のように柱筋が台形状に歪む例や、SI8・268・269・313・327・335・353のように対角線上からややずれて配置される例が認められる。SI275・329・333・336・338の主柱穴は2基で構成されると思われ、SI275・329・338は住居範囲の東西軸上付近に配置されている。SI336も東西に配置されているが、柱筋は北側に寄る。SI333は南西コーナーと北東コーナーの対角線上に位置し、2基ともにコーナー寄りに配置されている。SI336とSI333については本来4基が存在した可能性もあるが、これと対応するような柱穴は検出されなかった。

確認された柱痕跡の径は、15～20cm前後である。最大はSI329-P2の29cmで、SI314・SI316A・SI340でも同等規模の柱痕跡が認められている。一部の竪穴住居跡では、柱穴の重複も認められる。根石を伴う柱穴はど

く稀であり、SI323 - P2、SI335 - P3、SI348 - P4 の 3 軒で確認された。また、SI339 - P3 もその可能性があり、堆積土上層から扁平な礫が出土している。

【カマド】

カマドは、41 軒で検出された。北壁に造り付けられる例が大半を占める。この中で SI269 のカマドはかなり東側に寄って付設されている。東壁に造り付けられる例としては SI264・271・313・317・324・326・328・331・334 があるが、軒数は少ない。また SI280 の南壁、SI283 の西壁といった稀な例もある。この傾向は、長町駅東遺跡全体を通じて共通する。なお、SI287 からはカマドではなく小規模な地床が検出されている。

これらのカマドの形態は、概ね下記のようにまとめられる。

a. 燃焼部

燃焼部の状況が把握できる竪穴住居跡は 36 軒である。燃焼部は壁内に位置するものが殆どで、SI265・267・268・285・323・326 のように全体の 1/2 程度外を掘り込むカマドも存在するが、完全に壁外に位置するカマドは認められない。このため、全てのカマドには袖が伴う。袖の構築材には基本層Ⅳ層土が主に使用され、白色粘土等を用いたカマドは皆無であった。袖材には SI8・320・321・329 のように土器の破片や石器などを補強材に混入する例も存在するが、ごく少数である。焚口に芯材を用いる例としては SI8・265・271 の石材、SI314 の土師器転用材があり、前者 3 軒ではいずれも凝灰岩切石の使用が認められた。また SI274・280 では構築材の抜き取り痕とみられるビットのみが検出されている。

底面は概ね平坦にしつらえられているカマドが多く、底面を若干掘り窪めるのは SI8・264・265・269・271・319・326・333 の 8 軒である。また、SI320～322 の底面は起伏し、SI283・284・313 の底面は奥壁方向へと若干立ち上がる。SI312・328・332 では底面の中央付近に棒状礫による支脚が埋設され、SI312・332 の支脚は土器に接する面を平らに加工している。

奥壁まで残存する竪穴住居跡は 29 軒であるが、このうち煙道部へと平坦につながるカマドは 7 軒である。ほか奥壁を介して煙道部へと繋がるが、奥壁高が 10cm 未満と低いものも 5 軒含まれる。

b. 煙道部

煙道部が検出された竪穴住居跡は、20 軒である。しかし完存する煙道部は、12 軒と少ない。部分的に残存する竪穴住居跡も含めて概ねの状況を見ると、煙道部は長さが 100cm を超えるものが 12 軒あり、長町駅東遺跡全体をみてもこれが一般的な形態である。特に SI316A・B や、SI321 の煙道部は、200cm を超える長さを有している。底面は煙出し方向に下がるか、あるいは平坦に達するものが主体である。ただし、SI265・284 のように底面が立ち上がるものも稀に存在する。煙出し部分は、ビット状に掘り込まれるものが 6 軒認められた。SI265・321・331 では、雨受けや煙突の補強材に転用されたとみられる土師器・須恵器が煙出しの底面から出土している。煙道部の構築にあたっては索掘りのものが殆どであるが、SI8・264・265・284 では掘り方を伴い、壁・天井を土材で構築している。

【その他の施設】

カマドの脇、もしくはカマドが位置する壁のコーナー付近に掘り込まれている土坑が、SI8・268・281・283・284・287・288・310・312～317・319～321・323・328～330・333・334・340 で検出されている。貯蔵穴と考えられるが、中には人為的に埋め戻されている土坑も認められる。規模・形態は様々であるが、これらを複数併う竪穴住居跡や、掘り直しと思われる土坑の重複も一部で認められる。SI283 では 5 基が北西コーナーからカマド方向へと一列に重複し、この方向に向かって掘り直されたと考えられる。

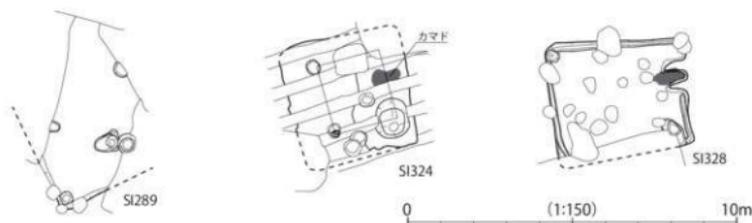
堆積土中に多量の焼土や炭化物を含む土坑（もしくはピット）を伴う、竪穴住居跡も認められる。SI8・315・319・322・325・327・333・335がこれに該当する。カマド付近に配置されるものが多いが、やはり規模・形態に規則性は認められない。カマド内の塵灰を、処理するための施設と考えられる。

SI276では、床面の中央付近に掘り込まれた土坑が検出されている。その底面からは敷き詰められたような状態で炭化物が検出された。しかし具体的な機能は明らかにできなかった。

②各期の様相

【1期】(SI289・324・328)

時期が確定できた当期の竪穴住居跡は、3軒である。このうちSI289は2a期まで存続すると考えられるが、ここに示した。方位は四辺の向きでみるとSI289が25°西に振れ、SI324が17°、SI328が7°西に振れる。規模は長軸でSI289が3.62m以上、SI324が3.77m、SI328が4.16mを測る。平面形状はSI289については不明であるが、SI324は正方形、SI328は西側に広がる不整形を呈する。主柱穴の配置はいずれも不規則で、住居範囲の対角線上に4基が並ぶものはない。ただし、SI324については第295図に示したような配置も考え得る。カマドはSI324・328で検出され、ともに東壁に付設されている。また、SI324・328では貯蔵穴とみられる土坑も検出されており、いずれもカマド側のコーナー部分に配置されている。SI324ではその内部から土師器が6個体、潰れた状態で出土した。



第295図 竪穴住居跡集成図(1) - 1期

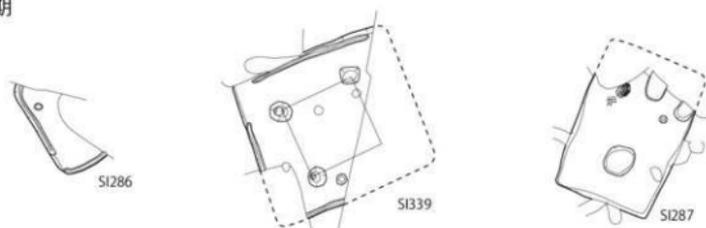
【2期】(SI283・286～288・314・339・349)

7軒が当期の竪穴住居跡として確定され、このうちSI286・287・339が6世紀初頭～前葉の2a期、SI283・288・314・349が6世紀中葉～末葉の2b期にそれぞれ比定される。方位は四辺の向きでSI283・287が15°～25°東に振れるが、ほかは西に振れる。その角度はSI286・349が32°～45°と大きいのが、残りの3軒は18°～19°とほぼ同じである。規模は2a期の3軒(SI287含む)が長軸3～5m程度であるのに対し、2b期の竪穴住居跡は6～7m以上の規模をもつ(SI349は不明)。長町駅東遺跡全体をみても、当期には竪穴住居跡が大型化する傾向が窺える。平面形状はSI283・288・314・339がほぼ正方形、SI287が南北方向に長い長方形を呈する。SI286・349については不明である。主柱穴は、SI283・288・314・339では4基を対角線上に配置している。またSI283では補助柱穴や壁柱穴を不規則に配置している。SI286・287・349では主柱穴らしき柱穴は見当たらず、小規模なピットが認められるのみである。カマドはSI283・288・314で検出され、SI283では西壁、SI288・314では北壁に付設されている。長町駅東遺跡全体では当期のカマドは北壁に付設されるものが殆どであり、例外として西壁に付設される例がSI283を含み今のところ2軒、東壁の例が1軒である。また、SI314のカ

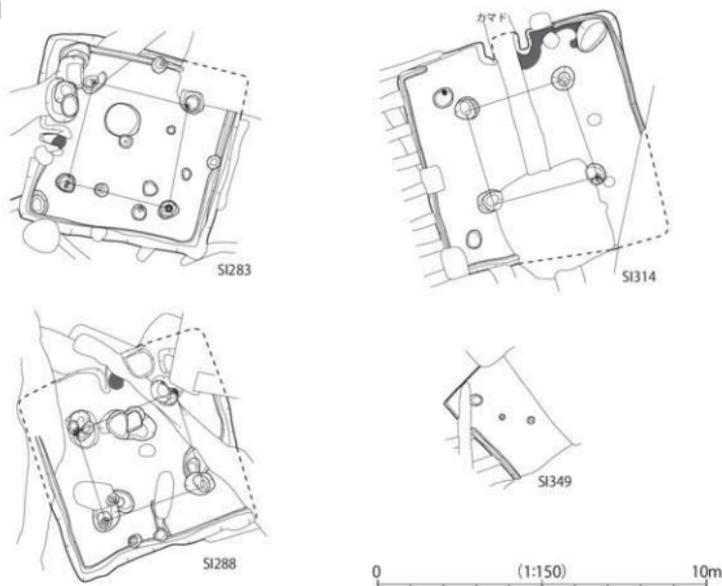
マドは袖の焚口部分に土師器甕を芯材として埋設している。長町駅東遺跡ではカマドの芯材に石材を使用する例が多く、土器の使用は少ない。実際の軒数では石材が19軒に対し、土器が7軒である。煙道部は今回いずれのカマドからも検出されておらず、形態は不明である。なお、SI287ではカマドではなく地床が検出されている。

その他の施設としては、SI283・287・288・314から貯蔵穴と思われる土坑が検出されている。いずれもカマドもしくは炉の設置方向のコーナー付近に、もしくはカマドの脇に位置している。SI288ではその内部から4個体の土師器が出土している。またSI283では北西コーナーからカマド脇にかけて5基が重複しながら並び、掘り直しによる重複であると考えられる。このうちの2基には、底面から壁面にかけて粘性のシルトが厚く貼られているのが確認されている。

2a 期



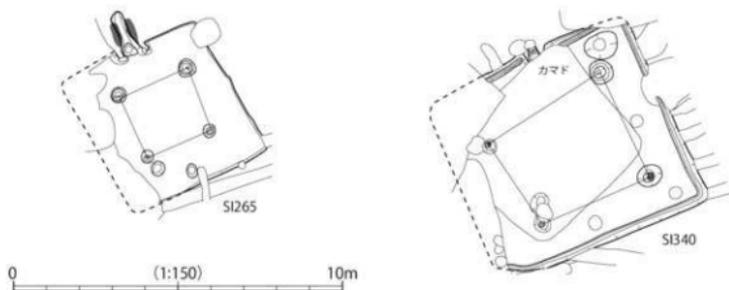
2b 期



第296図 竪穴住居跡集成図(2) - 2期

【3期】(SI265・340)

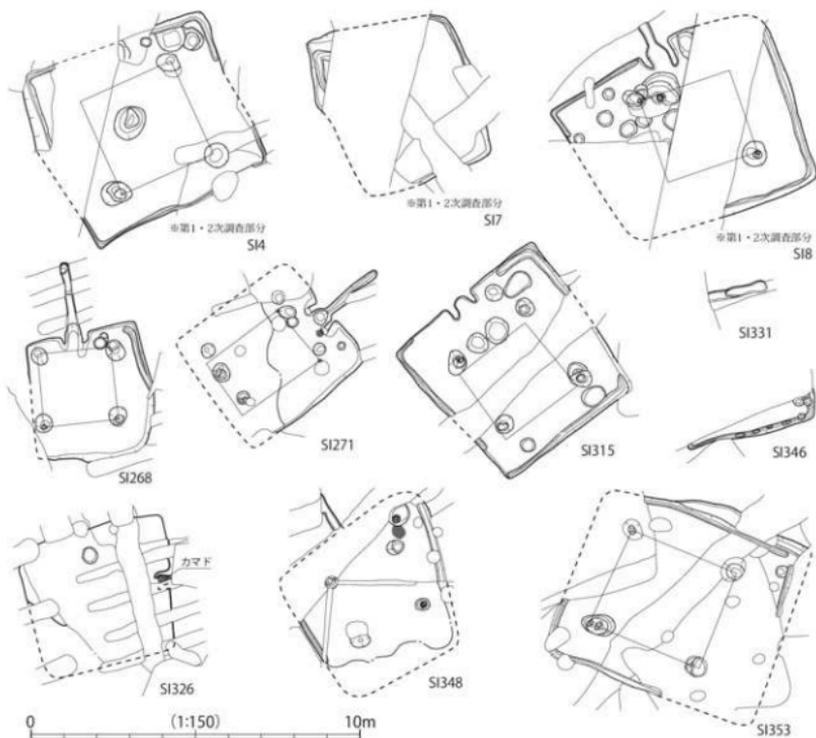
確定されたのは2軒のみである。方位はSI265・340ともにN-21°23'-Wと近い数値を示すが、長町駅東遺跡全体をみると当期の竪穴住居跡は30°~50°西側に振れるものが主体であり、これらよりは若干振れが小さいといえる。規模は長軸でSI265が4.52m、SI340が6.39mを測り、両者には2m近い差が認められる。実際に長町駅東遺跡における当期の竪穴住居跡の規模は、6mを超える大型のものとして4m以下の小型のものに分かれる傾向がある。平面形状はSI265がやや歪んだ方形、SI340が若干東西方向に長い方形と思われる。主柱穴はSI265の例では4基を対角線上に配置しており、SI340では北西側の柱穴が偏って配置される。カマドはいずれも北壁に付設され、この付設方向が主体である点は2期と同じである。SI265では焚口の芯材に円礫や凝灰岩の切石を用いているが、SI340は焚口部分が残存しない。煙道部はSI265で残存しており、その長さは1.12mを測る。この規模は長町駅東遺跡において煙道部が検出された当期の竪穴住居跡としては、一般的な長さである。その他、SI340では貯蔵穴とみられる土坑が検出されている。



第297図 竪穴住居跡集成図(3) - 3期

【4期】(SI4・7・8・268・271・315・326・331・346・348・353)

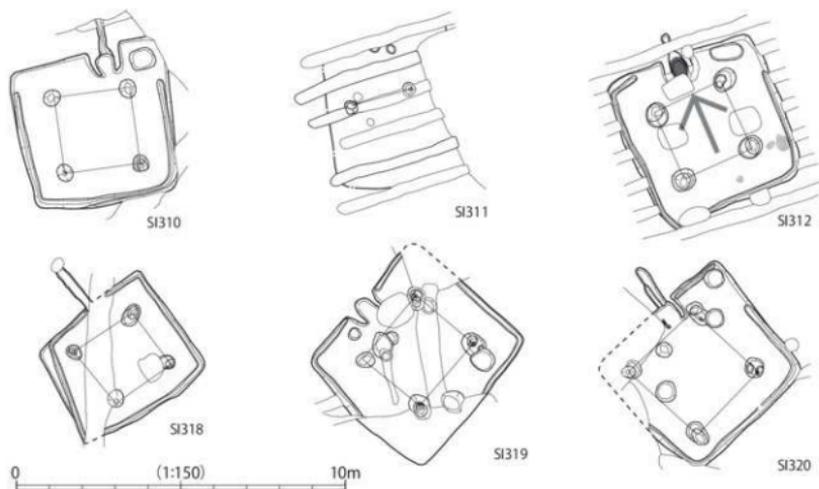
11軒が確定された。方位は四辺が西に振れる竪穴住居跡が殆どで、東に振れるのはSI353の1軒のみである。西への振れは20°~40°の間に取まる竪穴住居跡が多い。これは長町駅東遺跡全体でみても当期の竪穴住居跡における共通の方位といえ、SD66やSA1・6などの区画施設の方向性と概ね一致することから、これらの区画方向を意識していると考えられる。規模は、長軸でSI4が5.93m、SI8が6.72m、SI353が6.50mと大型であるほかは4~5m前後で、まとまりが認められない(SI331は不明)。平面形状は整然とした方形ではなく、歪んだ形状を呈するものが多い。特にSI8・348は、壁のラインが著しく歪む。主柱穴はSI4・8・268・271・315・348・353で検出され、4基を対角線上からずれている例も認められる。またSI271は主柱穴の南北方向の中間に別の柱穴が存在し、これを含む6基による主柱穴の配置も考えられる。カマドはSI7・346・353を除く8軒で検出され、SI4・8・268・315・348が北壁、SI271・326・331が東壁に付設されている。袖材は基本層IV層土を主体としており、唯一SI271のみが凝灰岩切石を焚口の芯材としているが、袖に芯材を埋設するカマドは長町駅東遺跡全体では当期に増加する傾向にある。煙道部が完存するのはSI268・271の2軒のみで、長さはSI268が1.85m、SI271が1.94mを測る。これも当期における長町駅東遺跡共通の傾向であり、長さが1.5mを超える煙道部の増加が認められる。このように当期の竪穴住居跡は、形態・構造が多様化する。



第 298 図 竪穴住居跡集成図 (4) - 4 期

【5期】(SI310～312・318～320)

当期に確定された竪穴住居跡は 6 軒である。方位は真北を基準とする傾向はなく、 $N-6^{\circ}\sim 48^{\circ}-W$ と一定の方向も示さない。規模は、長町駅東遺跡全体でみると 4 期に比べて大小に分かれる傾向があり、概ね長軸 4.5～5m 程度と、3m 前後の竪穴住居跡が存在する。平面形状は正方形や長方形・不整形と多様であり、4 期と同じ状況である。第 299 図に示した 6 軒も、SI311・312 以外は平面形状に歪みが認められる。主柱穴は 4 基を対角線上に配置するのが基本形態であるが、SI311 は 2 基しか検出されておらず、変則的な配置が想定される。カマドは SI311 を除く 5 軒で検出され、いずれも北壁に付設されている。当期は始どのカマドが北壁に付設されるようになるが、東壁や西壁に付設される竪穴住居跡も若干残る。焚口芯材の埋設例も減少し、袖が残存する SI310・312・319・320 についてもその痕跡は認められていない。煙道部は 4 期よりもさらに長くなる傾向が窺え、全長 1.5m を超えるものが多数を占めるほか、逆に 1m 未満のものはごく僅かとなる。



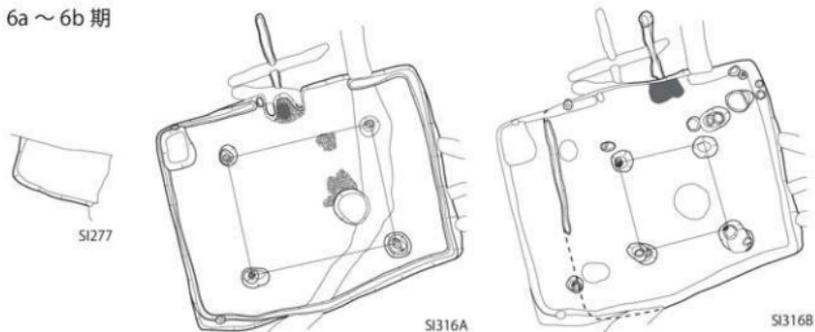
第299図 竪穴住居跡集成図(5) - 5期

【6期】(SI262・275・277・316A・316B・321・325・333)

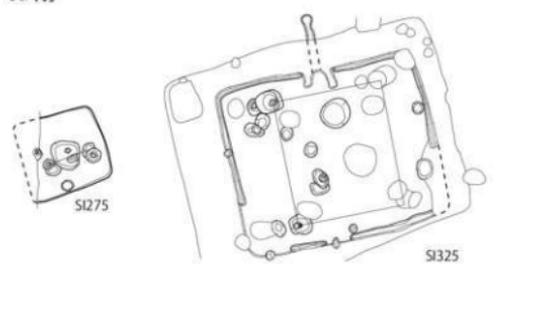
建て替えも含め、8軒が確定される。8世紀前葉の6a期にSI275・325が、8世紀中葉～末葉の6b期にSI262・321・333が、6a期～6b期にSI277・316A・316Bがそれぞれ比定される。当期の竪穴住居跡の方位は、四辺全体でみると20°以下の角度で西に振れるものが多い。規模の点では長軸5～6mと長軸3.5m前後の竪穴住居跡に分けられるが、5期と比べ全体的に若干大型化することが指摘される。当期の竪穴住居跡の平面形状は方形のものが増え、一部長方形の竪穴住居跡も存在するが、全体的に整った形状が主体となる。柱穴は4基の主柱穴を対角線上に配置するという基本形態は変わらないが、SI275のように2基を配置したものやSI333のように不規則な配置のものも少数認められる。カマドはSI316A・316B・321・325・333の5軒で検出され、いずれも北壁に付設されている。ただし長町駅東遺跡全体では、5期と同じく東壁や西壁に付設されるカマドもあり、大きな変化は認められない。袖の構築方法についても同様で、石材や転用した土器を芯材に埋設する例が少数ではあるが存在する。SI321では小礫や土器の破片などを土材に混入して補強を図っている。煙道部は5期よりもさらに伸びる傾向があり、1.5～2m以上のものが大半を占めるようになる。中でもSI316Aのカマド煙道部は全長2.65mを測り、当期の竪穴住居跡の中では最長である。

当期の竪穴住居跡の中で異質な存在とされるのがSI275、そして第3次調査のSI87である。時期はともに6a期に属する。SI275は長軸2.5m程、SI87は長軸3.5m程といずれも小型の規模で、床面施設として大型の浅い土坑を伴う点で共通する。SI87の土坑は被熱痕や炭化物、灰が内部に認められたことから「炉」として認識されているが、鍛冶関連の遺物は出土していない(仙台市教委、2009年)。一方SI275は加熱の痕跡は認められなかったが、土坑内や床面上から鉄滓および鞆羽口など、鍛冶関連の遺物が出土している。明らかに居住用施設としての様相を呈してはならず、これらの施設について今後の検討が要されるであろう。

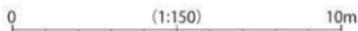
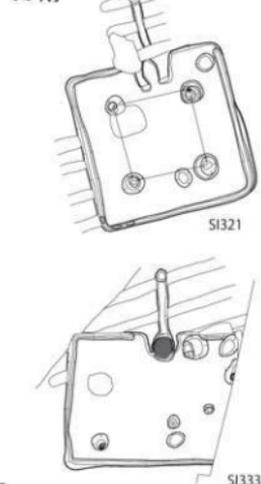
6a～6b期



6a期



6b期



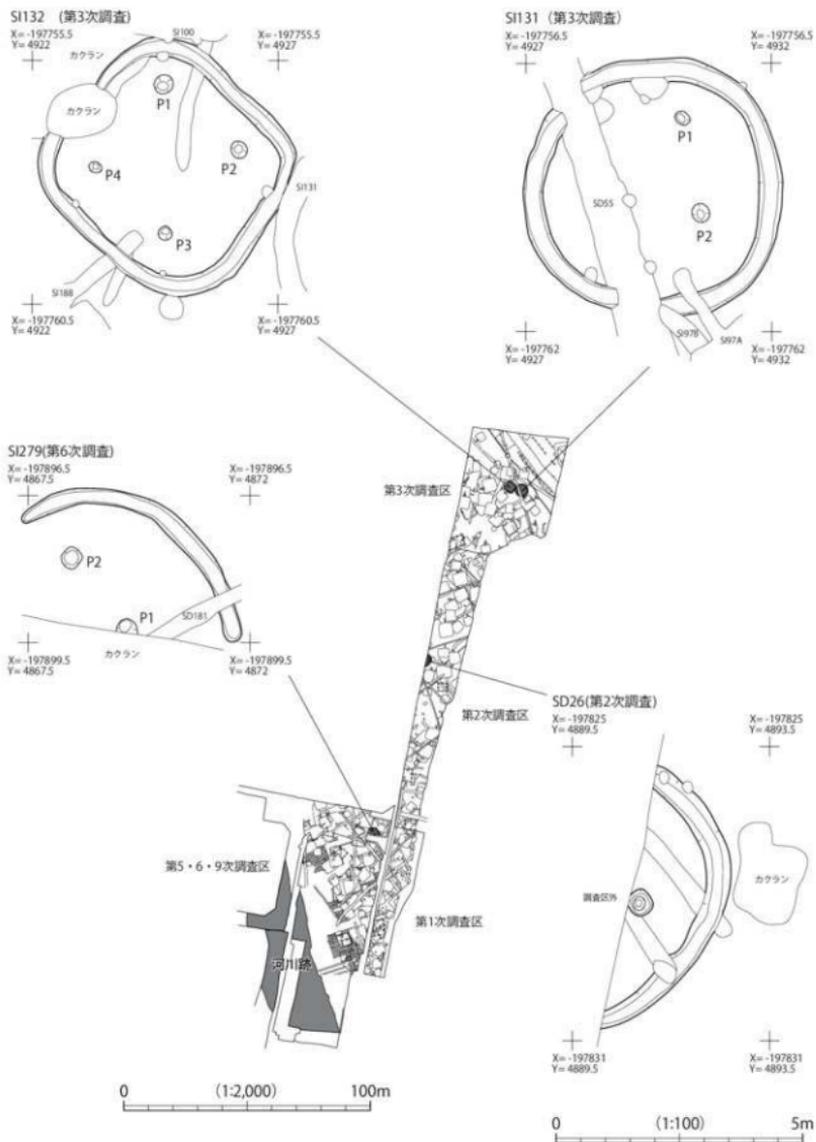
第300図 竪穴住居跡集成図(6) - 6期

(2) 特殊建物跡(第301図)

既述の通り、SI279は他の竪穴住居跡とは構造を異にしている。類似する形態の遺構として、第3次調査で検出されたSI131・132がある。掘り方をもたず、溝を巡らした内側に柱穴を配置する点で共通する。また「溝跡」として報告されているが、第2次調査のSD26もその可能性が指摘される。なお、SI131・132については同報告書の中で「平地式建物跡」の可能性が指摘されているが、本書では断定を避け、「特殊建物跡」としてまとめた。

これらはいずれも幅40～50cm程度の周溝を巡らし、その走行状況は円形もしくは(隅丸)方形を呈する。周溝はSI131・132では全周するが、SI279では断続部が認められる。周溝内径(辺)の規模は概ね4～4.5mの規模に収まり(SD26は推定)、中型の竪穴住居跡程度の規模である。

柱穴は、SI132の状況から4基を方形に配置するのが基本形態であると思われる。柱間は芯々でSI131が2m、SI132が2.1m、SI279が1.8mを測る。



第 301 図 長町駅東遺跡の特殊建物跡

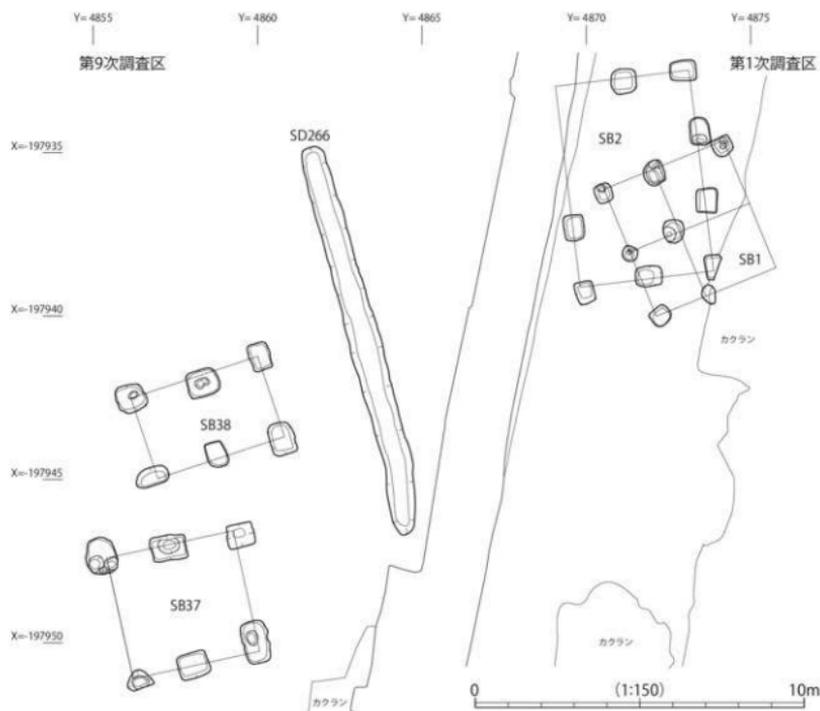
いずれも時期を決定できるような遺物は出土していないが、重複関係などから SI131・132 は 7 世紀前葉頃と考えられている（仙台市教委、2009 年）。SI279 は、本書編年の 2b 期（6 世中葉～末葉）以降としかいえない。SD26 は時期不明である。

(3) 掘立柱建物跡（第 302 図）

掘立柱建物跡は、3 棟が検出された。分布上これらを竪穴住居跡と重ねると、SB39 は比較的中心寄りに位置するのに対し、SB37・38 は外縁付近に位置する。また、全ての掘立柱建物跡が竪穴住居跡を壊して構築されている。

棟方向は SB39 が $N-43^{\circ}-E$ と北東に面するが、SB37・38 は $N-72^{\circ}-79^{\circ}-E$ で、むしろ東に面する。3 棟ともに側柱建物で、特に SB37・38 は大型の柱穴で構成される。根石を伴う柱穴は認められなかった。

SB37・38 の東側、第 1 次調査区では SB1・2 が検出されている。その中間には、 $N-15^{\circ}-W$ を指向する SD266 が位置している。この数値は SB37・38 の南北の柱筋方向とほぼ一致する。また SB1 は $N-25^{\circ}-W$ 、SB2 は $N-7^{\circ}-W$ である、これらを含めても誤差は 10° 以内に収まる。SB37・38 から SD266 までの距離は約 3～5m、SB1・2 から SD266 までの距離は 6～8m を測る。いずれも方形基調のしっかりとした柱穴を有する点や、竪穴住居跡を壊して構築されているという点でも共通性が認められる。



第 302 図 SB37・38、SD266 および周辺の掘立柱建物跡

(4) 材木列跡

今回報告する遺構の中で特筆されるのが、SA6である。SI314やSB37との新旧関係から、4期(7世紀中葉～末葉)に位置付けられる。これと同様の遺構が集落北辺の第3次および第4次調査区で検出されており(SA1)、本材木列跡との関係が考えられる。SA1はN-27～36°-Wを指向し(SA6はN-35°-W)、郡山1期官衙の時期に位置付けられている(仙台市教委、2007年)。なお、この二つの材木列跡の距離は165m前後である。

(5) 集落の変遷(第303～310図)

最後に、長町駅遺跡東遺跡に営まれた古墳時代～古代の集落について、その変遷を追ってみたい。なお第303～310図の各変遷図については、あくまで今回報告対象とした範囲に限定する。

長町駅東遺跡の集落変遷を考える上で重要なのが、北東に隣接する西台畑遺跡との対比である。同遺跡は長町駅東遺跡と同じく郡山官衙の造成や運営に関わる集落として認識されており、溝跡や材木列跡を区画施設に伴うなど、集落の構造にも共通点が多い。このため1期官衙成立期にあたる4期以降については、両者を含めた検討を行うこととしたい。

1期(引田式期)

この時期の竪穴住居跡は、3軒(SI289・324・328)のみである。概ね高位面の北東端部から河川跡に向かうようにして点在する。各主軸方向をみると、傾斜に対してSI289が平行、SI324・328が直交して構築されているのが判る。今のところ長町駅東遺跡では当期の竪穴住居跡はほかに検出されていないことから、これらが集落形成の初現であると思われる。

2a期～2b期(住社式期)

時期が確定されたのは、SI283・286～288・314・339・349の7軒である。SI289も1期から存続する可能性もあるが、便宜上ここには含めていない。6世紀初頭～前葉の2a期に比定されるのがSI286・287・339、6世紀中葉～後葉の2b期に比定されるのがSI283・288・314・349である。当期には第1・2次調査のSI5・6・22・42・46、第3次調査のSI79、第4次調査のSI134・136も構築され、さらに第3次調査で検出された一本柱列跡SA4・5も構築されるなど、2b期を中心に区画施設を伴う集落への発展の兆しが看取される。

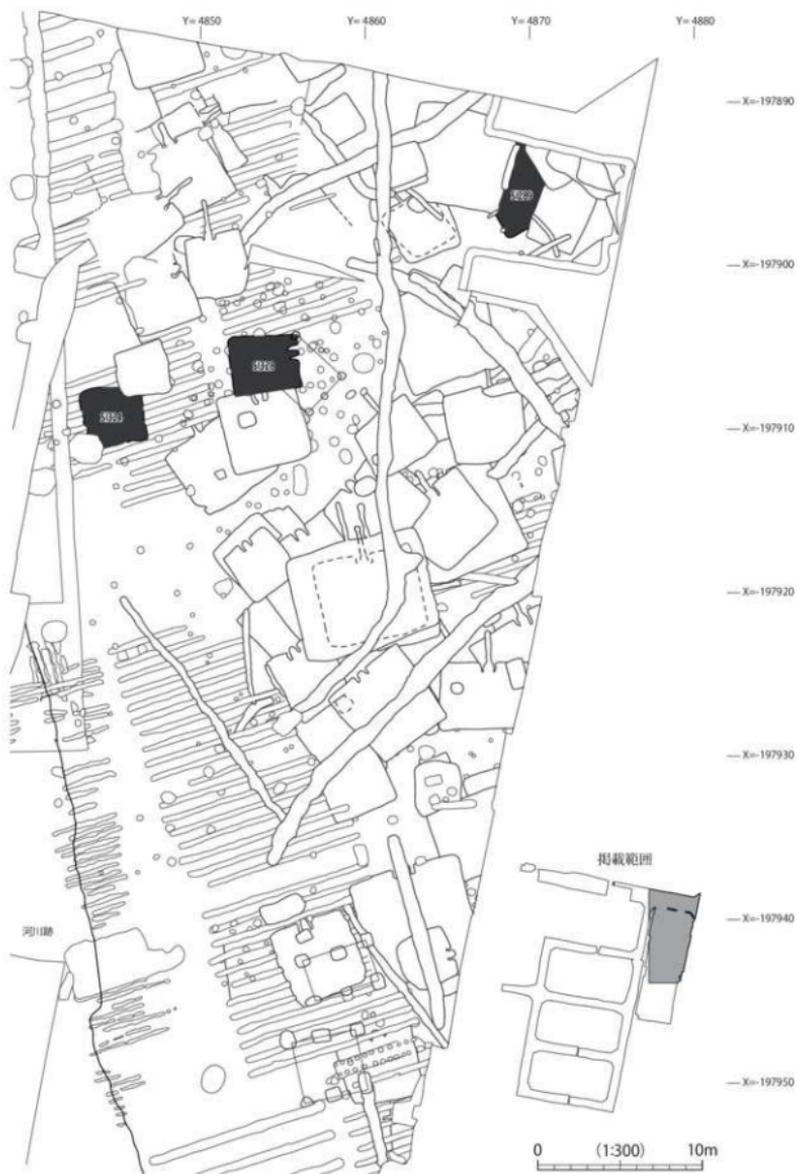
3期(粟田式期古段階)

SI265・340の2軒のみであるが、当期には第3次調査区で16軒の竪穴住居跡が構築されている。2期の区画施設であった一本柱列跡SA4・5はその機能を失うが、中型の溝跡SD63が掘削されており、これが新たな区画施設として代替された可能性も考えられる。

4期(郡山1期官衙期)

SI4・7・8・268・271・315・326・331・346・348・353の11軒がある。集落全体では、早い段階で大型の溝跡SD66や材木列跡SA1などの区画施設が集落の北側に整備され、対する南側にも今回報告したSA6が構築される。竪穴住居跡も極端に増加し、管見では今のところ区画内で60軒(以上)を数えることができる。分布も区画内のほぼ全域とその北側外縁へと広がり、一つの画期をむかえる時期である。

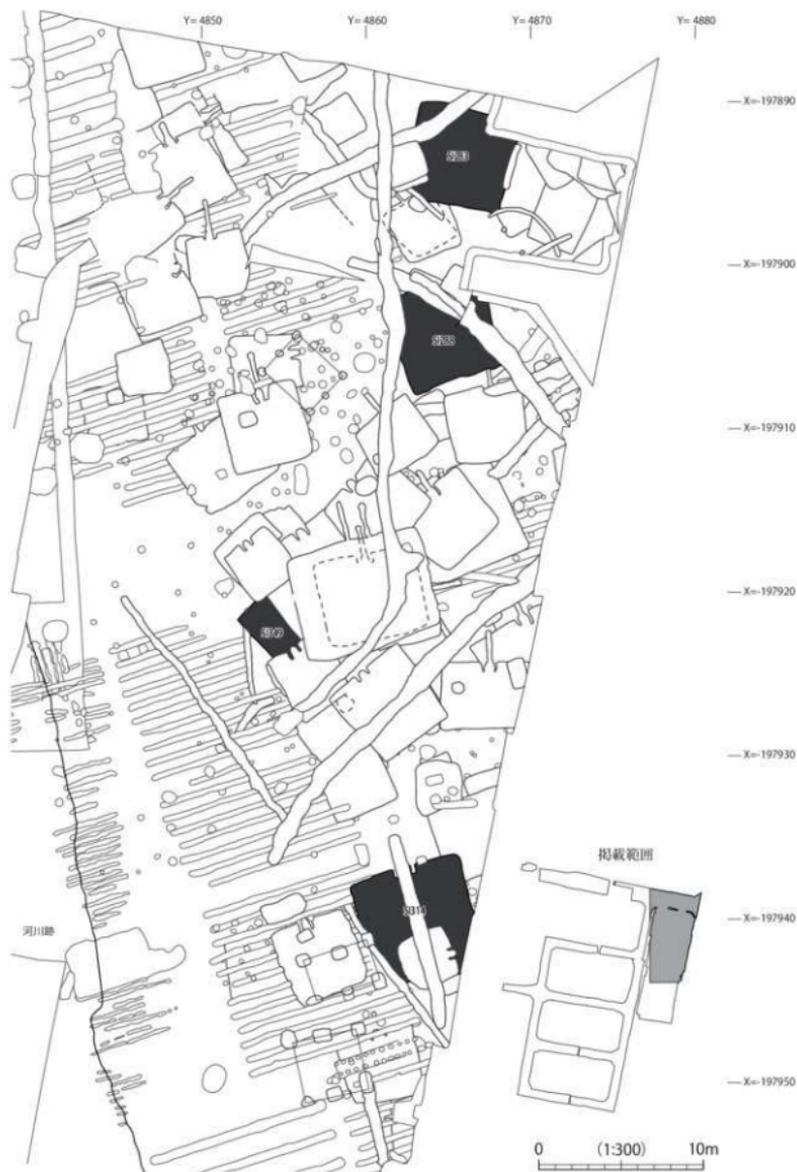
この時期には、西台畑遺跡でも同様の現象が認められる^(註1)。同遺跡では現在までに128軒の竪穴住居跡が調



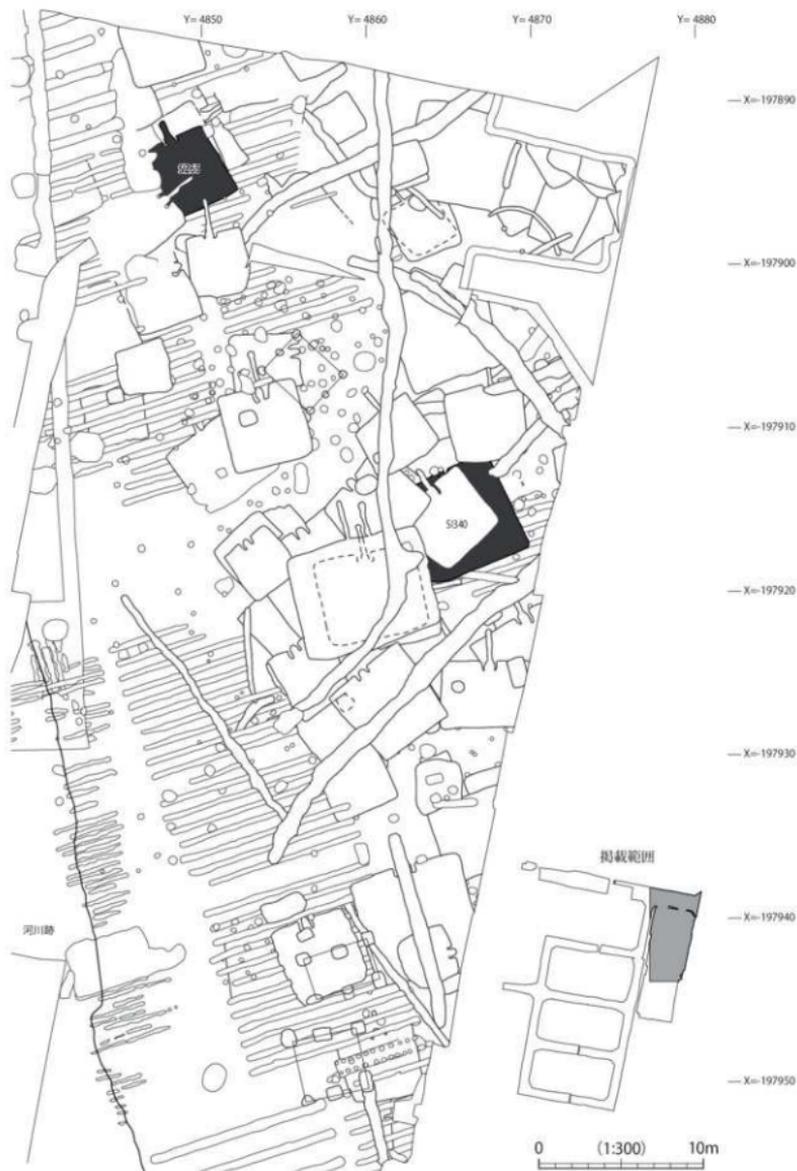
第303図 第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図(1期:引田式期)



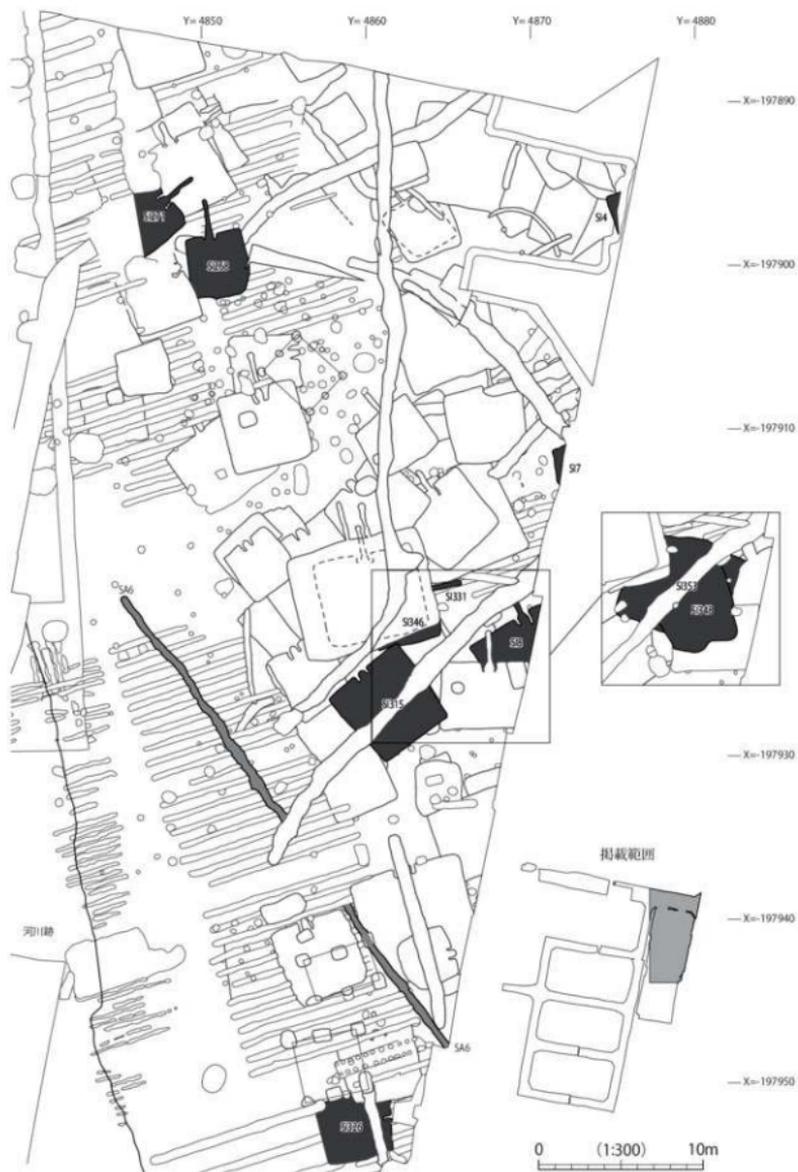
第 304 図 第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図 (2a 期: 6 世紀初頭～前葉)



第 305 図 第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図 (2b 期：住社式期)



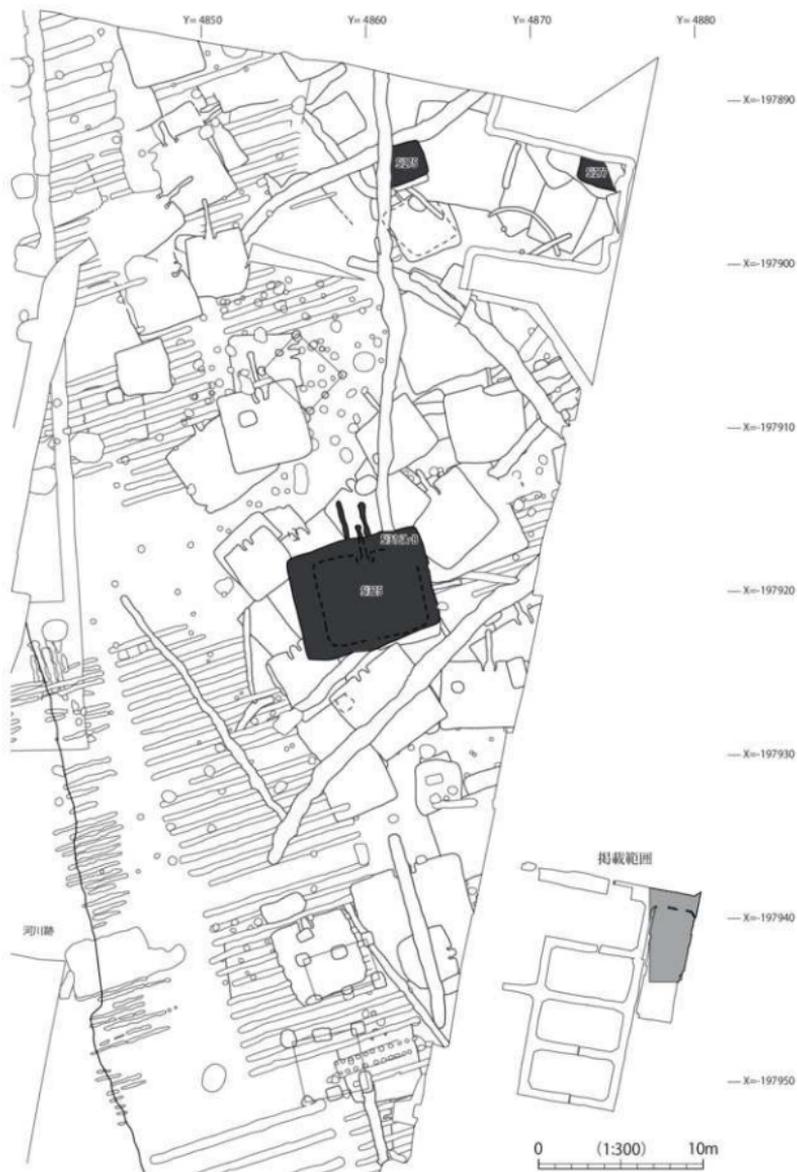
第 306 図 第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図 (3 期: 栗園式期古段階)



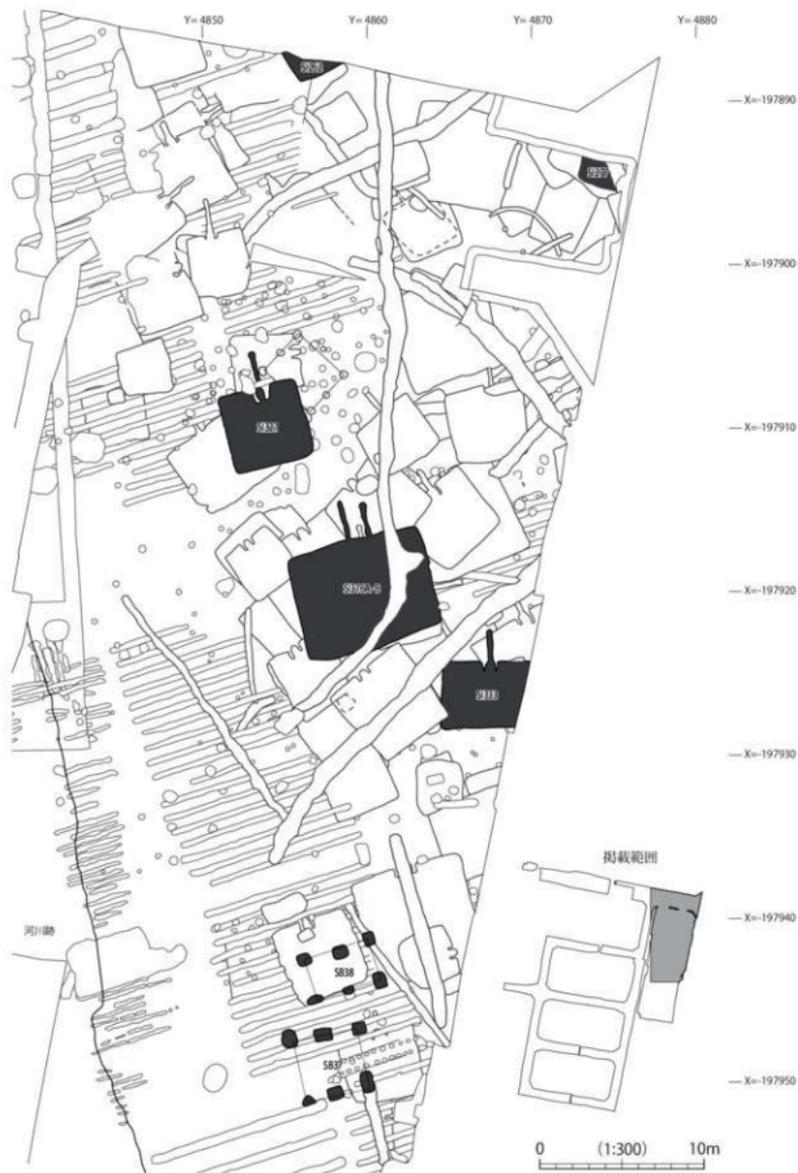
第 307 図 第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図 (4 期：郡山 I 期官衙期)



第308図 第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図（5期：郡山II期官衙期）



第309図 第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図(6a期：8世紀前葉)



第 310 図 第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図 (6b 期: 8 世紀中葉～末葉)

査されている。最も遅るのは古墳時代前期後葉（塩釜式期）の竪穴住居跡3軒であるが、集落としての継続性が認められるのは本書の時期区分でいうところの2b期以降である。

5期（郡山Ⅱ期官衙期）

SI310・311・312・318～320の6軒があるが、長町駅東遺跡では竪穴住居跡の分布状況や軒数は4期と比べて殆ど変化はなく、この点については西台畑遺跡でも同様であるとみられる。

6期

SI262・275・277・316A・316B・321・325・333の8軒があり、このうちSI275・325が8世紀前葉の6a期、SI262・321・333が8世紀中葉～末葉の6b期、SI277・316A・316Bが6a期～6b期にまたがる。長町駅東遺跡では竪穴住居跡の数は5期よりも減少し、当期に確定されるのは32軒だけとなる。特に後半の6b期になると9軒しか存在しなくなる。

註1 西台畑遺跡では、あすと長町上地区画整理事業に伴って平成10年度から発掘調査が実施されている。このうち第1～8次調査まで報告書が刊行されており、文中の竪穴住居跡の編年順についてはこれらの報告に従った。このうち本書編年の4期に比定されるのはSI2・4・7・32・42・55・56・62・64・67・69・74・76～78・80・84・86・90・113・120である。

第3節 まとめ

今回報告した第5・6・7・9次調査は、河川の北岸に営まれた古墳時代～古代の集落跡を中心とした調査であった。ちなみに40街区南側のJR太子堂駅前広場周辺の道路を対象とした試掘確認調査では、名取川の可能性がある大規模な河川堆積を広範囲に確認している。40街区での調査状況から、長町駅東遺跡の西側では、北を流れる広瀬川から南の名取川方向に向かって、小規模な河川が流れを変えながら流下していたことが考えられる。こういった地勢の中に立地する長町駅東遺跡の、今回の調査成果について以下にまとめる。

(1) 縄文～弥生時代

当時代については遺構が全く検出されず、遺物のみが出土している。少なくとも調査区内においては人々の生活域形成には至らず、むしろその外縁的な場所であったと考えられる。

縄文時代の遺物については、第9次調査で基本層XV層から後期前葉の土器が、IXa層から帰属時期不明の土器が出土した。量は少なく、IXa層では1個体が壊れたようなまとまりが認められたが、接合するものはなかった。

弥生時代の遺物については、第5・6・9次調査で土器・石器が相当数出土した。しかし古墳時代～古代の遺構検出時や遺構堆積土中の層位不明遺物が大半を占め、遺物包含層からの出土は割合的に少ない。包含層の遺物は全て基本層IV層から出土したが、遺物の分布には隔りがある。北側の第5・6次調査区では数点程度の出土であったのに対し、第9次調査区では比較的集中して出土する傾向が窺われた。ただし第9次調査区では古墳時代以降の遺構が激しく重複しているため、IV層の残存範囲は部分的である。土器は殆どが中期中葉の樹形皿式期のものである。破片資料が多勢を占め、接合した個体資料はごく僅かであった。

(2) 古墳時代～古代

竪穴住居跡・竪穴遺構 76 軒、掘立柱建物跡 3 棟、材木列跡 1 条、溝跡 17 条、土坑 22 基、ピット 54 基、性格不明遺構 4 基が検出された。遺構は高位面のみを検出され、当時の低位面は河川であったと思われる。当該時代の遺跡内は居住域として長期にわたって存続し、最終的には溝跡群を中心とする生産域的な様相を示すようになる。

竪穴住居跡の時期は、1～6 期に大別される。時期が確定できなかった竪穴住居跡も 35 軒存在するが、概ねの集落変遷は辿ることができた。最も遡るのは引田式期（本書 1 期）の 2～3 軒であり、長町駅東遺跡では初の発見である。その後竪穴住居跡の数が減少傾向にあるものの、郡山 I 期官衙期（4 期）になると区画施設を伴う大規模な居住域を形成する。第 9 次調査で検出された材木列跡 SA6 はこの居住域の南縁を区画する施設と思われる、今回の調査における大きな成果の一つである。郡山 II 期官衙期（5 期）に移行すると竪穴住居跡の数は若干減少するが、官衙に関連する居住域としての機能を維持していたと思われる。ところが官衙の機能が衰退し、さらに多賀城にその機能が移転する時期（6 期）になると竪穴住居跡の数が激減し、相対して旧区画の縁辺付近や外縁部を中心に掘立柱建物跡が構築されるようになる。なお、長町駅東遺跡の集落における最終的な廃絶時期は判然としなが、これまでの調査成果によると竪穴住居跡や掘立柱建物跡に 9 世紀代に下る遺物は認められない。

居住域としての機能が失われると、調査区内は溝跡が検出遺構の主体となる。これらの配置に規則性は認められないが、一部には地形を意識したような方向性を示すものもあり、恐らく生産域（耕作域）の土地割りや灌漑を兼ねた溝跡が大半であると思われる。重複関係から新しく位置付けられる SD7・180 の上層には灰白色火山灰が堆積しており、9 世紀を中心としたこの地が耕地化していたことが窺われる。

(3) 中世～近世

掘立柱建物跡 1 棟、小溝状遺構 258 条、溝跡 61 条、井戸跡 4 基、土坑 68 基、ピット 344 基、性格不明遺構 9 基が検出された。遺構の分布は拡大し、低位面にも検出されるようになる。

当該時代の遺跡内は、一貫して生産域（耕作域）の様相を呈する。小溝状遺構は大半がその耕作痕と思われる、高位面のほぼ全域と、低位面の南西寄りを中心に検出された。高位面では A 群が整然と畑の 1 区画を示すような単位で並び、これらに混じって検出された SX25～27 も、耕作関連の施設であると思われる。

当該時代の遺物はごく僅かであり、遺構出土の遺物のうち図化できたのは陶磁器 3 点と木製品 1 点だけである。このうち SX27 から出土した土師質陶器の灯明具はいわゆる「秉燭（ひょうそく）」で、18 世紀のものである。今回検出された遺構は、近世を中心とするものと考えたい。

引用・参考文献

- 呂妻俊典 2004 『多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代』『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会
- 加藤道明 1983 『宮城県における土師器研究の現状』『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 菊池佳子 1994 『多賀城以前の陸奥国と須恵器』『歴史』第82号 東北史学会
- 木本元治 1990 『南東北地方における歴史時代の須恵器編年1』『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 工藤信一郎 2010 『長町駅東遺跡・西台畑遺跡の集落について』『宮城考古学』第12号 宮城県考古学会
- 国土館大学考古学会 2009 『古代社会と地域間交流』六一書房
松本太郎「鬼高系の系譜と歴史的背景」 富田和夫「移民の携えた土器」
桜岡正信「古代東北と上野」 池田敏広「栃木県域における6・7世紀の土器様相」
長島榮一「官衙からみた関東系土師器」 村田晃一「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東」
- 斎野裕彦 2002 『農具・石燈丁・大型直縁石器器・石鎌』『考古資料大観9 石器・石製品・骨角器』小学館
- 櫻井友祥 2011 『古墳時代終末期から多賀城創建前後の須恵器生産の展開』『宮城考古学』第13号 宮城県考古学会
- 佐藤敏幸 2007 『宮城県北部・沿岸部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 仙台市教育委員会 1992 『郡山遺跡—第65次発掘調査報告』仙台市文化財調査報告書第156集
1992 『郡山遺跡—第112次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第222集
1994 『南小泉遺跡—第22・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
1998 『南小泉遺跡—第26次調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第225集
1998 『南小泉遺跡—第30・31次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第226集
2000 『王ノ塚遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集
2001 『郡山遺跡—第124次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第251集
2004 『滝ノ里遺跡—第7次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第280集
2005 『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編—』仙台市文化財調査報告書第283集
2007 『長町駅東遺跡第4次調査』仙台市文化財調査報告書第315集
2008 『長町駅東遺跡第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第324集
2008 『南小泉遺跡他』仙台市文化財調査報告書第326集
2009 『長町駅東遺跡第3次調査』仙台市文化財調査報告書第340集
2010 『西台畑遺跡第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第359集
2010 『沼向遺跡第4～34次調査(第9分冊)』仙台市文化財調査報告書第360集
2011 『西台畑遺跡第3次調査』仙台市文化財調査報告書第388集
2013 『西台畑遺跡第8次調査』仙台市文化財調査報告書第409集
2013 『西台畑遺跡第4・5・7次調査』仙台市文化財調査報告書第411集
2013 『郡山遺跡第167・180・196次調査』仙台市文化財調査報告書第412集
- 高橋誠明 1999 『宮城県における古墳時代中期の土器様相』『東国土器研究』(第5号)東国土器研究会
- 辻 秀人 1984 『宮城の横穴と須恵器』『宮城の研究1考古学篇』清文堂
- 東北古代土器研究会 2005 『東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編—』<福島> 研究報告1
2005 『東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編—』<宮城> 研究報告2
2008 『東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—』<陸奥> 研究報告3
- 奈良佳子 2003 『宮城県域の7世紀の須恵器』『古代東北北海道研究会資料』古代東北北海道研究会
- 奈良文化財研究所 2003 『古代の官衙遺跡 I 遺構編』
2004 『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』

古川市教育委員会	1991	『名生館遺跡Ⅰ』古川市文化財調査報告書 8 集
宮城県教育委員会	1991	『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 140 集
	1994	『山王遺跡八幡地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 162 集
	1999	『名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 181 集
	2001	『山王遺跡八幡地区の調査 2—古墳時代後期 SD2050B 河川編—』宮城県文化財調査報告書第 186 集
村田晃一	1996	『陸奥国における 7 世紀の様相』『飛鳥・白鳳時代の諸問題 1』国際古代史シンポジウム実行委員会
	2000	『飛鳥・奈良時代の陸奥国北辺』『宮城考古学』第 2 号 宮城県考古学会
	2002	『7 世紀集落研究の視点 (1)』『宮城考古学』第 4 号 宮城県考古学会
	2003	『宮城県中・南部における 6～8 世紀の上器編年』『古代東北北海道研究会第 1 回研究資料』 古代東北北海道研究会
	2007	『v. 宮城県中部から南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
柳沼賢治	1999	『福島県における 5 世紀土器とその前後』『東国土器研究』(第 5 号) 東国土器研究会
利府町教育委員会	2011	『巖沢京跡Ⅱ』利府町文化財調査報告書第 13 集